

志木市遺跡群 20

田子山遺跡第107地点

新邸遺跡第10地点

西原大塚遺跡第159地点

2013

埼玉県志木市教育委員会

志木市遺跡群 20

田子山遺跡第107地点

新邸遺跡第10地点

西原大塚遺跡第159地点

2013

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 尾崎 健市

ここに刊行する『志木市遺跡群 20』は、国庫・県費補助事業として、教育委員会が、平成 20・21 年度に確認調査及び発掘調査を実施した市内遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

今回は、そのうちの発掘調査を実施した、田子山遺跡第 107 地点・新邸遺跡第 10 地点・西原大塚遺跡第 159 地点を報告しています。

ここでは、この 3 地点の主な調査内容について触れたいと思います。

まず、田子山遺跡第 107 地点からは、古墳時代後期の住居跡 1 軒と平安時代の住居跡 1 軒が検出されました。今回は 2 軒の住居跡ともに調査区隅からの検出であり、部分的な調査で終了しましたが、土器がまとまって出土しています。

次に、新邸遺跡第 10 地点からは、古墳時代前期の住居跡 2 軒と近世の溝跡 1 本が検出されています。特に、溝跡については、位置関係から野火止用水跡と考えられます。

西原大塚遺跡第 159 地点からは、縄文時代の土坑 2 基と弥生時代後期の住居跡 8 軒、古墳時代後期の住居跡 1 軒、近世以降の土坑 6 基・溝跡 1 本などと今回報告する中で一番遺構・遺物が多く検出されました。特に、西原大塚遺跡については、縄文時代中期には「環状集落」という集落形態をもつことが判明しつつあり、県下でも代表的な遺跡の 1 つと言えます。

以上のような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる 1 ページが追加されたことになりました。今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究や幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げる次第です。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成20・21年度に調査を実施した成果とそのうち発掘調査を実施した田子山遺跡第107地点・新邸遺跡第10地点・西原大塚遺跡第159地点について、発掘調査報告書としてまとめたものである。
2. 発掘作業・整理作業・報告書刊行作業は、志木市教育委員会が主体となり、主に国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。なお、中世以降の遺物については、朝霞市教育委員会の野澤 均氏にご教示を頂いた。
深井恵子 第2章第3節の遺構、第3章第2節の遺構、第4章第2節の遺構
青木 修 第2章第2節(3)、第3章第2節(4)-1、第4章第2節(2)、第5章(3)①
4. 遺物の実測は、星野恵美子・鈴木浩子・松浦恵子・増田千春が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木 修が行った。写真撮影は青木 修が行った。
5. 表土剥ぎ及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店に委託した。
6. 西原大塚遺跡第159地点出土石器の実測・観察表の作成は、有限会社アルケアーリサーチに委託した。

7. 調査組織

調査主体者	志木市教育委員会
教 育 長	白砂正明(平成20年4月～平成24年6月)
〃	尾崎健市(平成24年7月～)
教育政策部長	山中政市(平成21年4月～平成22年3月)
〃	丸山秀幸(平成24年4～9月)
教育政策部次長	丸山秀幸(平成22年4～平成24年3月)
〃	菊原龍治(平成24年10～)
生涯学習課長	土岐隆一(平成21年4月～平成24年3月)
〃	谷口 敬(平成24年4月～)
生涯学習課副課長	土岐隆一(平成20年4月～平成21年3月)
〃	松井俊之(平成24年4月～)
生涯学習課主幹	大熊克之(平成19年12月～平成22年12月)
〃	松井俊之(平成23年1月～平成24年3月)
生涯学習課主査	尾形則敏(平成21年4月～)
生涯学習課主任	尾形則敏(～平成21年3月)
〃	松永真知子(平成18年4月～)
生涯学習課主事	徳留彰紀(平成22年4月～)
生涯学習課主事補	徳留彰紀(平成21年4月～平成22年3月)
〃	大久保 聡(平成24年4月～)
志木市文化財保護審議会	神山健吉(会長)(昭和54年4月～平成24年3月)
	井上國夫(会長)(平成24年4月～)

井上 國夫（委員）（昭和55年4月～平成24年3月）
高橋 長次（委員）（昭和63年4月～）
高橋 豊（委員）（平成8年4月～）
内田 正子（委員）（平成10年4月～平成24年3月）
深瀬 克（委員）（平成24年4月～）
上野 守嘉（委員）（平成24年4月～）

8. 発掘作業及び整理作業参加者

○発掘作業

【田子山遺跡第107地点】

調査担当者 佐々木保俊
調査員 内野美津江
調査補助員 宮川幸佳
発掘協力員 高杉朝子・成田しのぶ・二階堂美知子
重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）

【新邸遺跡第10地点】

調査担当者 佐々木保俊
調査員 内野美津江
調査補助員 宮川幸佳
発掘協力員 高杉朝子・成田しのぶ・二階堂美知子
重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）

【西原大塚遺跡第159地点】

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子・内野美津江
調査補助員 青木 修・宮川幸佳
発掘協力員 鈴木浩子・高杉朝子・成田しのぶ・二階堂美知子・星野恵美子・
増田千春・松浦恵子
重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）

○整理作業

調査員 深井恵子・青木 修・内野美津江
調査補助員 星野恵美子・鈴木浩子・宮川幸佳
整理協力員 石川 蒼・江口美千子・大橋康弘・佐藤 海・高杉朝子・
中川幹啓・成田しのぶ・二階堂美知子・林 ゆき子・一二三英文・
廣野 渡・増田千春・松浦恵子・村田浩美

9. 発掘作業及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

江原 順・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・小出輝雄・斉藤 純・齋藤欣延・
斯波 治・鈴木一郎・照林敏郎・中岡貴裕・野沢 均・早坂廣人・堀 善之・
前田秀則・松本富雄・柳井章宏・山本 龍・山田尚友・和田晋治・渡辺邦仁

10. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

田子山遺跡第107地点／平成21年1月16日付け 教生文第5－958号

新邸遺跡第10地点／平成21年6月18日付け 教生文第5－250号

西原大塚遺跡第159地点／平成21年10月19日付け 教生文第5－676号

○埋蔵物の文化財認定について

田子山遺跡第107地点／平成21年3月13日付け 教生文第7－206号

新邸遺跡第10地点／平成21年11月9日付け 教生文第7－80号

西原大塚遺跡第159地点／平成21年12月17日付け 教生文第7－131号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位は cm である。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。

7. 第5図・7図・12図・14図・17図の土層、および第20表の遺構外出土の縄文土器の記述の中で使用した色調は、『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を参考にした。

8. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y = 弥生時代後期～古墳時代初頭 H = 古墳時代前期・後期の住居跡 D = 土坑

M = 溝跡 P = ピット

目 次

巻頭図版

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 平成20・21年度の調査成果	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経緯	10
第2章 田子山遺跡第107地点の調査	12
第1節 遺跡の概要	12
第2節 検出された遺構・遺物	14
第3章 新邸遺跡第10地点の調査	19
第1節 遺跡の概要	19
第2節 検出された遺構・遺物	21
第4章 西原大塚遺跡第159地点の調査	30
第1節 遺跡の概要	30
第2節 検出された遺構・遺物	33
第5章 調査のまとめ	68
第1節 田子山遺跡第107地点	68
第2節 新邸遺跡第10地点	69
第3節 西原大塚遺跡第159地点	69

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と調査地点—平成20年度— (1/20,000)	6
第2図	市域の地形と調査地点—平成21年度— (1/20,000)	7
第3図	田子山遺跡の調査地点 (1/3,000)	13
第4図	遺構分布図 (1/150)	14
第5図	56号住居跡 (1/60)	15
第6図	56号住居跡出土遺物 (1/4)	15
第7図	71号住居跡 (1/60)	17
第8図	71号住居跡出土遺物 (1/4)	17
第9図	遺構外出土遺物 (1/3)	18
第10図	新邸遺跡の調査地点 (1/3,000)	19
第11図	遺構分布図 (1/200)	20
第12図	11号住居跡・遺物出土状態 (1/60・1/8)	22
第13図	11号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	23
第14図	12・13号住居跡 (1/60)	26
第15図	12号住居跡・遺物出土状態 (1/60・1/8)	26
第16図	12号住居跡出土遺物 (1/4)	27
第17図	5号溝跡 (1/60)	28
第18図	遺構外出土遺物 (1/3)	29
第19図	西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)	31
第20図	遺構分布図 (1/150)	32
第21図	611・612号土坑・611号土坑出土遺物 (1/60・1/3)	34
第22図	552号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	35
第23図	552号住居跡出土遺物 (1/3)	35
第24図	553号住居跡 (1/60)	37
第25図	553号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	37
第26図	554号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	39
第27図	554号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	39
第28図	555号住居跡 (1/60)	40
第29図	556号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	41
第30図	557号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	42
第31図	557号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)	43
第32図	557号住居跡出土遺物2 (1/3)	44
第33図	558号住居跡 (1/60)	45
第34図	558号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/8)	46
第35図	558号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	47
第36図	559号住居跡 (1/60)	48
第37図	559号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/8)	49
第38図	559号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	50

第39図	3号ピット・出土遺物（1／60・1／4・1／3）	51
第40図	22号住居跡・出土状態（1／60）	52
第41図	22号住居跡出土遺物（1／4）	52
第42図	土坑（1／60）	54
第43図	48号溝跡（1／60）	56
第44図	1号・4号ピット出土銭貨（1／1）	57
第45図	遺構外出土遺物1（1／3）	59
第46図	遺構外出土遺物2（1／4・1／3）	60
第47図	西原大塚遺跡における縄文時代前期の遺構・遺物検出地点	71

表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	平成20年度調査地点一覧	2
第3表	平成21年度調査地点一覧	2
第4表	56号住居跡出土土器一覧	16
第5表	71号住居跡出土土器一覧	17
第6表	11号住居跡出土土器一覧	24
第7表	12号住居跡出土土器一覧	27
第8表	5号溝跡出土の陶磁器一覧	28
第9表	西原大塚遺跡第159地点の発掘調査工程表	30
第10表	552号住居跡出土土器一覧	61
第11表	553号住居跡出土土器一覧	61
第12表	554号住居跡出土土器一覧	61
第13表	556号住居跡出土土器一覧	61
第14表	557号住居跡出土土器一覧	62
第15表	558号住居跡出土土器一覧	63
第16表	559号住居跡出土土器一覧（1）	64
	559号住居跡出土土器一覧（2）	65
第17表	3号ピット出土土器一覧	65
第18表	22号住居跡出土土器一覧	65
第19表	遺構外出土の石器一覧	66
第20表	遺構外出土の縄文土器一覧（1）	66
	遺構外出土の縄文土器一覧（2）	66
第21表	遺構外出土の弥生～平安時代の土器一覧	67

図版目次

- 図版1 田子山遺跡第107地点
1. 調査区近景 2. 表土剥ぎ風景 3. 発掘風景 4. 56号住居跡
5. 56号住居跡遺物出土状態 6. 71号住居跡 7. 71号住居跡掘り方 8. 測量風景
- 図版2 田子山遺跡第107地点
1. 56号住居跡出土遺物 2. 71号住居跡出土遺物 3. 遺構外出土遺物
- 図版3 新邸遺跡第10地点
1. 調査区近景 2・3. 11号住居跡遺物出土状態 4. 11号住居跡
5. 12号住居跡遺物出土状態 6. 12号住居跡 7. 13号住居跡 8. 5号溝跡
- 図版4 新邸遺跡第10地点
1. 11号住居跡出土遺物 2. 12号住居跡出土遺物
- 図版5 新邸遺跡第10地点
1. 5号溝跡出土遺物 2. 遺構外出土遺物 3. 器面にみられる調整技法
- 図版6 西原大塚遺跡第159地点
1. 調査区近景 2. 表土剥ぎ風景 3. 調査区整備風景 4. 611号土坑 5. 612号土坑
6. 612号土坑・6号ピット 7. 5号ピット 8. 6号ピット
- 図版7 西原大塚遺跡第159地点
1. 552号住居跡 2. 552号住居跡炉跡 3. 552号住居跡赤色砂利層検出状態
4. 553号住居跡 5・6. 554号住居跡遺物出土状態 7. 554号住居跡炉跡
8. 554・555号住居跡
- 図版8 西原大塚遺跡第159地点
1・2. 555号住居跡 3. 556号住居跡 4. 556号住居跡貯蔵穴
5～7. 557号住居跡遺物出土状態 8. 557号住居跡
- 図版9 西原大塚遺跡第159地点
1. 558号住居跡 2. 558号住居跡遺物出土状態 3. 558号住居跡貯蔵穴A
4. 558号住居跡貯蔵穴B 5. 558号住居跡入口梯子穴付近 6. 558号住居跡炉跡
7・8. 559号住居跡遺物出土状態
- 図版10 西原大塚遺跡第159地点
1. 559号住居跡遺物出土状態 2. 559号住居跡赤色砂利層検出状態
3. 559号住居跡貯蔵穴 4. 559号住居跡凸堤 5. 559号住居跡入口梯子穴
6. 559号住居跡炉跡 7. 559号住居跡 8. 3号ピット
- 図版11 西原大塚遺跡第159地点
1・2. 22号住居跡遺物出土状態 3. 22号住居跡 4. 調査風景 5. 605～607号土坑
6. 605号土坑 7. 606号土坑 8. 607号土坑
- 図版12 西原大塚遺跡第159地点
1. 608号土坑 2. 609号土坑 3. 609号土坑工具痕 4. 610号土坑
5・6. 48号溝跡 7. 1号ピット 8. 4号ピット

図版13 西原大塚遺跡第159地点

1. 土坑出土遺物
2. 552号住居跡出土遺物
3. 553号住居跡出土遺物
4. 556号住居跡出土遺物
5. 554号住居跡出土遺物
6. 557号住居跡出土遺物 1

図版14 西原大塚遺跡第159地点

1. 557号住居跡出土遺物 2
2. 558号住居跡出土遺物

図版15 西原大塚遺跡第159地点

1. 559号住居跡出土遺物
2. 3号ピット出土遺物
3. 22号住居跡出土遺物

図版16 西原大塚遺跡第159地点

1. 606号土坑・48号溝跡出土遺物
2. 1・4号ピット出土遺物
3. 遺構外出土遺物 1

図版17 西原大塚遺跡第159地点

遺構外出土遺物 2

図版18 参考資料

西原大塚遺跡の遺構外出土黒浜式土器

第1章 平成20・21年度の調査成果

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約7万2千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,370㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,280㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	50,500㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳？	古墳？	古墳？	なし
7	西原大塚	163,930㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100㎡	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700㎡	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
合計		481,860㎡					

平成24年12月28日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

（2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7年（1995）度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13（2001）年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2007）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡（諸磯式期）が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行3c式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が590軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。この

ことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げるることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20～21（2008～2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶^{ふじゆしんぼう}が2枚出土しており、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵

庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『たてむらきゆうき館村旧記』^(註1)にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『かいこくざつき廻国雑記』^(註2)に登場する「おおいしなののかみのやかた大石信濃守館」が「おおつかじゆうぎよくぼう柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また、平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状態で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、よろい さね鎧の札である鉄製品1点と鉄鍬1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「しょうりんざんかんのんじだいじゆいん松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

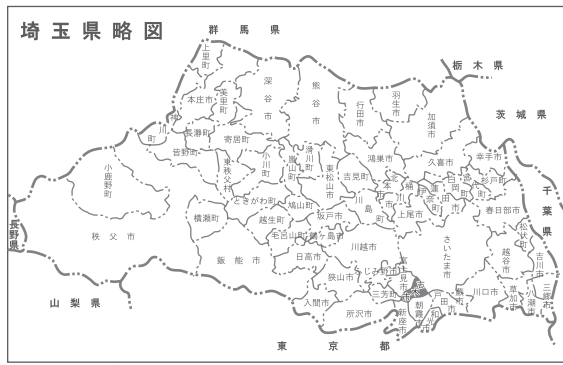
7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。



第1図 市域の地形と調査地点—平成20年度— (1/20,000)



第2図 市域の地形と調査地点—平成21年度— (1/20,000)

第1章 平成20・21年度の調査成果

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積 (㎡)	確認調査日	発掘期間	備考
1	中野遺跡 第70地点	柏町1丁目1468-1	共同住宅建設	83.00	4.21		出入口部分 全体449㎡
2	田子山遺跡 第103地点	本町2丁目1698-12	個人住宅建設	64.98	6.10		盛土保存適用
3	西原大塚 第157地点	幸町3丁目7281・7282	個人住宅建設	165.06	8.4		盛土保存適用
4	田子山遺跡 第104地点	本町2丁目1731-12の一部	個人住宅建設	72.68	8.19		
5	田子山遺跡 第105地点	本町2丁目1731-1・12・13の一部	個人住宅建設	73.00	9.25		
6	城山遺跡 第62地点	柏町3丁目2663-3・9・10・12・13	分譲住宅建設	516.49	10.29・30	11.17～ 12.26	第62-1地点 発掘調査125.35㎡(道路部分) 盛土保存適用391.14㎡(宅地部分)
		柏町3丁目2663-1・5～8・11・14～17	分譲住宅建設	1,076.95	12.18・19	H21.2.2 ～6.17	第62-2地点 発掘調査435.89㎡(道路部分) 盛土保存適用641.06㎡(宅地部分)
7	田子山遺跡 第106地点	本町2丁目1736-13・14	個人住宅建設	120.17	11.6		盛土保存適用
8	中野遺跡 第71地点	柏町1丁目1513-1	(仮)志木市埋蔵文化財センター建設	634.87	11.14	11.18～ 12.15	発掘調査201.40㎡ 埋戻し12月16日
9	田子山遺跡 第107地点	本町2丁目1731-1	個人住宅建設	105.78	12.19	H21.2.5 ～2.10	埋戻しH21.2月10日
10	田子山遺跡 第108地点	本町2丁目1731-19	個人住宅建設	71.08	H21.1.19		盛土保存適用
11	田子山遺跡 第109地点	本町2丁目1694-8	分譲住宅建設	61.90	1.26		盛土保存適用
12	田子山遺跡 第110地点	本町2丁目1731-1	個人住宅建設	62.74	2.5		
13	西原大塚 第108地点	幸町3丁目7531・7532	生涯学習センター建設	(2,071.73)	H16.10.21 ～10.25	—	計画変更
			(仮称)西原ふれあいコミュニティセンター建設	684.60	—	H21.2.23 ～4.14	盛土保存適用1,467.13㎡ 発掘調査684.60㎡ 埋戻しも含め4月14日完了 民間調査組織による支援委託
合 計				3,793.30			

第2表 平成20年度調査地点一覧

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積 (㎡)	確認調査日	発掘期間	備考
1	西原大塚遺跡 第108地点	幸町3丁目7531・7532	(仮称)西原ふれあいコミュニティセンター建設	684.60	H16.10.21 ～10.25	H21.2.23 ～4.14	盛土保存適用1,467.13㎡ 発掘調査684.60㎡ 埋戻しも含め4月14日完了 民間調査組織による支援委託
2	城山遺跡 第62地点	柏町3丁目2663-1・5～8・11・14～17	分譲住宅建設	1,076.95	H20.12.18 ～12.19	H21.2.2 ～6.17	第62-2地点 発掘調査435.89㎡(道路部分) 盛土保存適用641.06㎡(宅地部分)
3		柏町3丁目2663-20	分譲住宅建設	(100.20)			第62②地点 盛土保存適用
4		柏町3丁目2663-11	個人住宅建設	(100.24)		11.4～ 11.10	第62③地点 埋戻し11月13・16日
5		柏町3丁目2663-12	分譲住宅建設	(100.23)			第62④地点 盛土保存適用
6		柏町3丁目2663-19	分譲住宅建設	(91.75)			第62⑤地点 盛土保存適用

第3表 平成21年度調査地点一覧(1)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積 (㎡)	確認調査日	発掘期間	備考
7	城山遺跡 第62地点	柏町3丁目2663-3	個人住宅建設	(112.63)		9.3~9.9	第62⑥地点 埋戻し9月10日
8		柏町3丁目2663-18	個人住宅建設	(116.72)		11.9~ 11.13	第62⑦地点 発掘調査43.93㎡ 埋戻し11月16日
9		柏町3丁目2663-15	個人住宅建設	(91.12)		H22.1.22 ~1.28	第62⑩地点 埋戻しH22年2月5日
10	田子山遺跡 第111地点	本町2丁目1707-26	分譲住宅建設	59.61	4.20		
11	中野遺跡 第72地点	柏町1丁目1514-2	個人住宅建設	136.29	5.1		盛土保存適用
12	新邸遺跡 第10地点	柏町5丁目3021-9、 3022-2	個人住宅建設	83.92	5.22	6.3~6.5	埋戻し6月9日
13	田子山遺跡 第112地点	本町2丁目1728-8	個人住宅建設	55.06	6.8		
14	田子山遺跡 第113地点	本町2丁目1732-2	分譲住宅建設	78.46	6.8		盛土保存適用
15	新邸遺跡 第11地点	柏町5丁目2996-2	個人住宅建設	138.31	6.9		
16	西原大塚遺跡 第158地点	幸町4丁目8138	個人住宅建設	100.10	6.29		
17	中道遺跡 第67地点	柏町5丁目2971-8	個人住宅建設	118.00	8.18		盛土保存適用
18	西原大塚遺跡 第159地点	幸町3丁目7370	個人住宅建設	208.27	9.14	9.30~ 10.28	埋戻し10月29・30日
19	田子山遺跡 第114地点	本町3丁目1828-12	個人住宅建設	55.65	9.17		遺跡外
20	西原大塚遺跡 第160地点	幸町3丁目7294~7296	駐車場	472.22	9.24~25		盛土保存適用
21	西原大塚遺跡 第161地点	幸町3丁目7210	個人住宅建設	185.52	10.14		盛土保存適用
22	西原大塚遺跡 第162地点	幸町2丁目7445-1・2、 7446-1~4	分譲住宅建設	513.92	10.19		盛土保存適用
			個人住宅建設	137.85			盛土保存適用
23	西原大塚遺跡 第153地点	幸町2丁目6199	個人住宅建設	(325.94)	H20.2.29		確認調査は区画整理に伴う宅 地造成として実施 盛土保存適用
24	市場裏遺跡 第13地点	本町1丁目1576-1	分譲住宅建設	462.65	12.3~4	H22 1.18~22	発掘調査面積104.67㎡ 盛土保存適用357.98㎡ 埋戻しH22年1月23日
25	西原大塚遺跡 第163地点	幸町2丁目6210、6211	個人住宅建設	58.53	12.80		盛土保存適用
26	城山遺跡 第63地点	柏町3丁目2655-4、-5	共同住宅建設	974.89	H22.1.26 ~1.27	H22 3.8~5.7	発掘調査面積638㎡ 盛土保存適用336.89㎡ 民間調査組織による支援委託
27	城山遺跡 第64地点	柏町3丁目2665-1、 -8、-9	分譲住宅建設	387.11	H22.1.28	H22.2.22 ~3.30	発掘調査面積79.00㎡ 盛土保存適用308.11㎡
28	城山遺跡 第65地点	柏町3丁目1139-5、-6	市営墓地内道路 の舗装及び給排水 設備工事	1,725.32	—		盛土保存適用
29	西原大塚遺跡 第165地点	幸町3丁目7486	個人住宅建設	146.00	H22.3.30	H22 4.14~26	発掘調査面積110.38㎡ 盛土保存適用35.62㎡
30	西原大塚遺跡 第166地点	幸町3丁目7487	個人住宅建設	166.00	H22.3.30	H22 4.14~26	発掘調査面積126.63㎡ 盛土保存適用39.37㎡
合 計				6,263.68			

第3表 平成21年度調査地点一覧(2)

第2節 調査に至る経緯

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木―池袋駅間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要があった。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数は逆に過去最高の9件のほり増加したという現象が生じた。これは、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したものと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性がある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用するに至っている。

平成10年度以降は、西原大塚遺跡内における個人住宅建設を中心とした各種開発が著しい増大を見せている。これは、平成5年度以降、西原大塚遺跡内では土地区画整理事業が開始され、これに伴い発掘調査が実施されているが、工事の完了後に周辺地域の開発が始まったためと考えられる。今後は、この地域の開発については、市内の他地域よりも増大することが予想されるため、埋蔵文化財保存事業についても充分留意しなくてはならないであろう。

なお、教育委員会は、2003（平成15）年1月、今までに集積された調査データに基づいて、遺跡の存否及び範囲について大々的に修正を行った。これにより、市場遺跡・氷川前遺跡の2遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新邸・田子山・富士前・市場裏遺跡の8遺跡の一部範囲が縮小され、市内遺跡総数は14遺跡に変更されることになった。同時にこれは、手続き上に係る事務量の削減と確認調査に使用する重機のコスト削減を目的とし、効率的な事業の運営を図ったものであった。

平成20年度以降は、今まで実施してきた「遺跡調査会方式」を廃止し、新規事業から「市直営方式」の導入を開始した。つまり、志木市では、個人及び民間による各種開発に伴う発掘調査（個人住宅建設を除く）については、今まで志木市遺跡調査会を発足させ、実施してきたが、職員の派遣や手続法などによる問題点を考慮し、平成20年度以降の新規事業からは、市直営による受託事業として実施することになった。

最後に本報告で掲載する平成20・21年度の調査内訳について以下にまとめることにする。

平成20年度は、13件の確認調査を実施した。発掘調査を実施した件数は4件で、盛土保存を適用したのは7件であった。工事内容の内訳件数は、個人専用住宅8件、分譲住宅2件、公共施設2件、共同住宅1件である。

平成21年度は、19件の確認調査を実施した。発掘調査を実施した件数は5件で、盛土保存を適用したのは13件であった。工事内容の内訳件数については、前年度に実施した確認調査1件分が数棟の開発事業として申請されたため、結果、個人専用住宅13件、分譲住宅8件、共同住宅2件、駐車場1件、市営墓地関連1件と確認調査の19件を超える25件であった。

[註]

註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

[引用文献]

神山健吉 1988 「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第2章 田子山遺跡第107地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3kmに位置している。遺跡は、新河岸川右岸の台地上に立地しており、北西―南東方向に約500m、北東―南西方向に約150mの広がりを持ち、面積は65,000㎡である。遺跡の標高は約15m、低地との比高差は約10mである。

遺跡の周辺を眺めてみると、敷島神社・御嶽神社・細田学園などの比較的に目立つ対象物が存在するが、この地区は個人住宅を中心とする住宅密集地と言えるであろう。

本遺跡は、今までの調査から、旧石器時代、縄文時代早期～晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世・近代の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成20年12月19日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、現況地表面から深さ60cmほど掘り下げた位置で、調査区全体にローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土が確認できた。同時に古墳時代後期の土師器小破片が数点出土したため、確認できた黒褐色土は住居跡の覆土として考えられる。

そのため、開発行為にあたっては、遺構に影響を及ぼす可能性が大きく、何らかの保存措置を講じる必要があるため、開発当事者に調査内容を説明し、協議を行った。その結果、現況地表面に盛土を施すことで、埋蔵文化財を盛土保存することに決定したため、教育委員会では、計画変更後の設計図の提出及び工事立会の日程などの連絡を待つことにした。

しかし、その後、計画が変更となり、盛土保存での対応は不可能である回答を得たため、発掘調査を実施することに決定した。

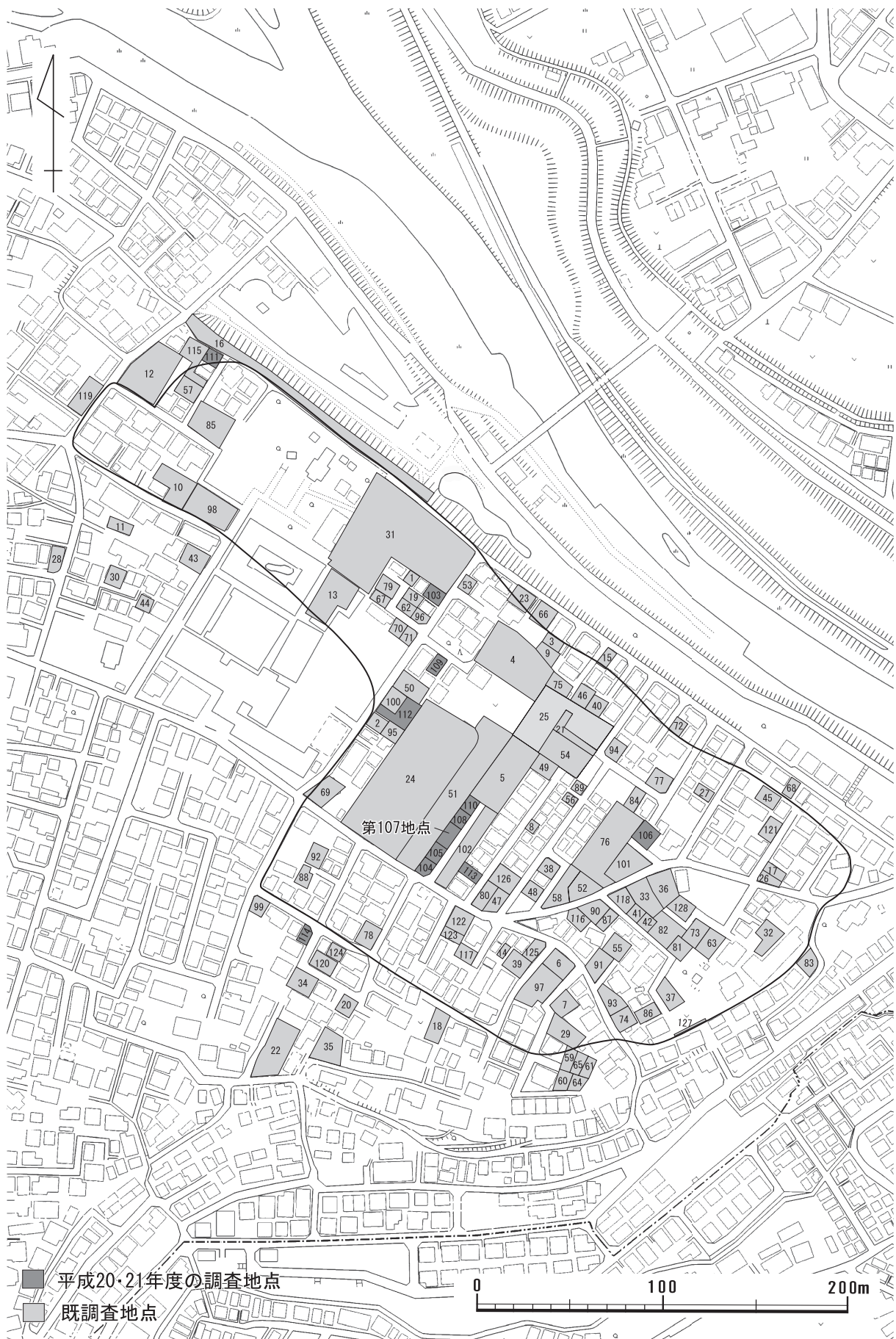
以下、発掘調査の大まかな経過を説明することとする。

平成21年

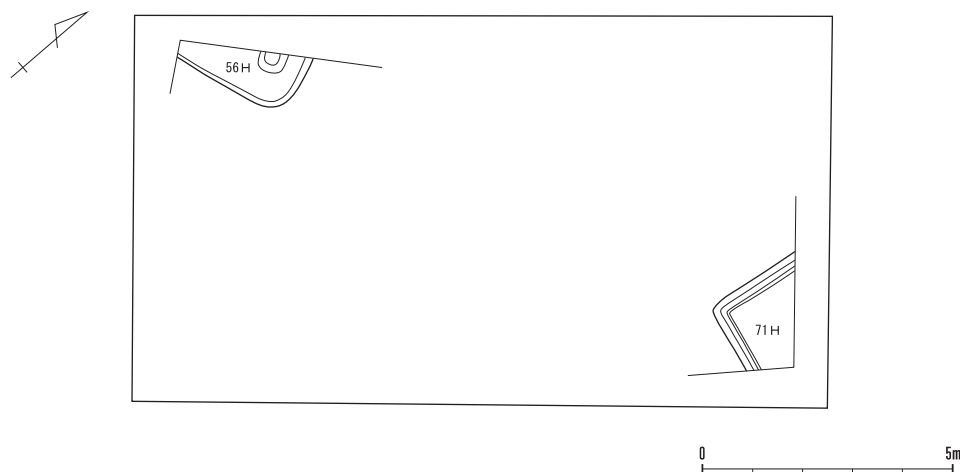
2月5日 午後から重機による表土剥ぎ作業を開始し、同時に遺構確認作業を行うが、確認調査で確認できた黒褐色土は住居跡の直接的な覆土ではないことが判明した。その後、細かな遺構確認作業を行った結果、調査区の南西隅から古墳時代後期の住居跡1軒(56H)と北東隅から平安時代の住居跡1軒(71H)が検出された。残土については、検出された遺構がそれぞれ住居跡のコーナーの一部であり、調査区内には延びてこないことから、搬出作業を行わずに調査区内で処理することにした。

2月6日 人員導入による発掘調査を開始する。午前内に器材を搬入し、午後から調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った。その後、56Hと71Hの精査を開始する。

9日 56Hについては、覆土中に焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を多く含むことから、焼失



第3図 田子山遺跡の調査地点 (1/3,000)



第4図 遺構分布図 (1 / 150)

住居と考えられる。住居南東隅から貯蔵穴を確認した。遺物としては、土師器坏・甑・甕が出土しており、その特徴から7世紀末葉のものと考えられる。71Hについては、床面を確認し、壁溝を掘る。遺物としては、土師器・須恵器の破片が出土しており、その特徴から9世紀中葉のものと考えられる。

- 10日 午前中に56H・71Hの精査・実測をすべて終了し、午後から器材の片付けを行い、器材搬出作業を終了する。同時に午後から埋戻し作業を開始し、本日中にその作業を終了した。

第2節 検出された遺構・遺物

(1) 概要

本地点から検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡1軒(56H)と平安時代の住居跡1軒(71H)である。いずれも調査区隔からの検出であり、住居構造等の詳細内容は不明と言える。それぞれの住居跡の時期については、出土土器の特徴から、56Hは7世紀末葉、71Hは9世紀中葉に位置付けられる。

なお、56Hについては、本地点に隣接する、第51地点から検出された住居跡と同一住居と考えられることから、同一遺構名として取り扱った。

遺構外出土遺物としては、後世の住居跡の覆土中から、縄文時代早期後葉の条痕文系土器4点が出土している。

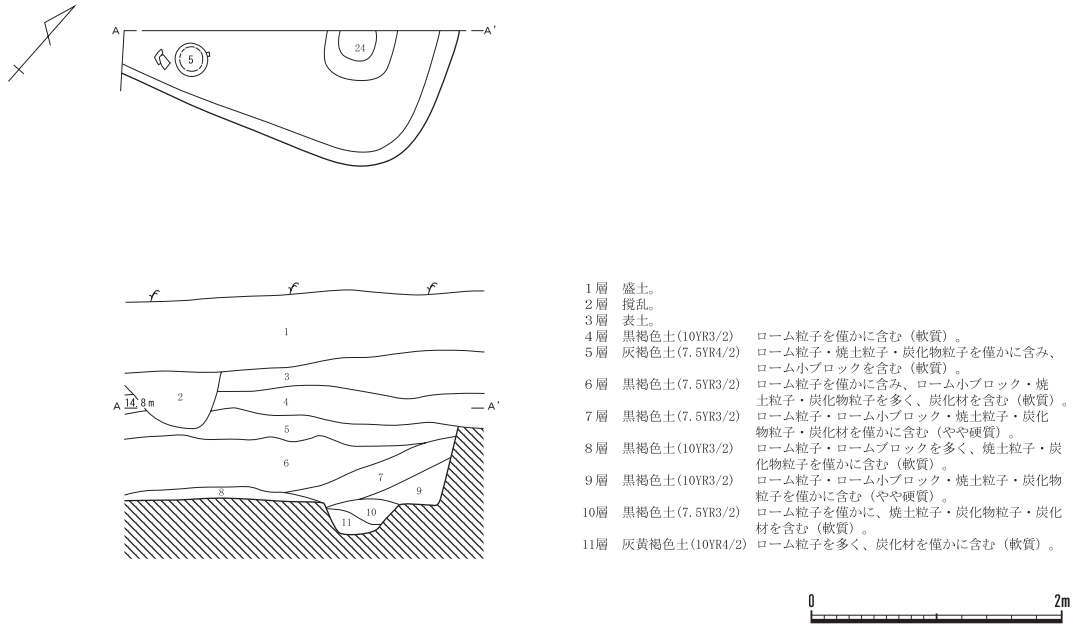
(2) 住居跡

56号住居跡

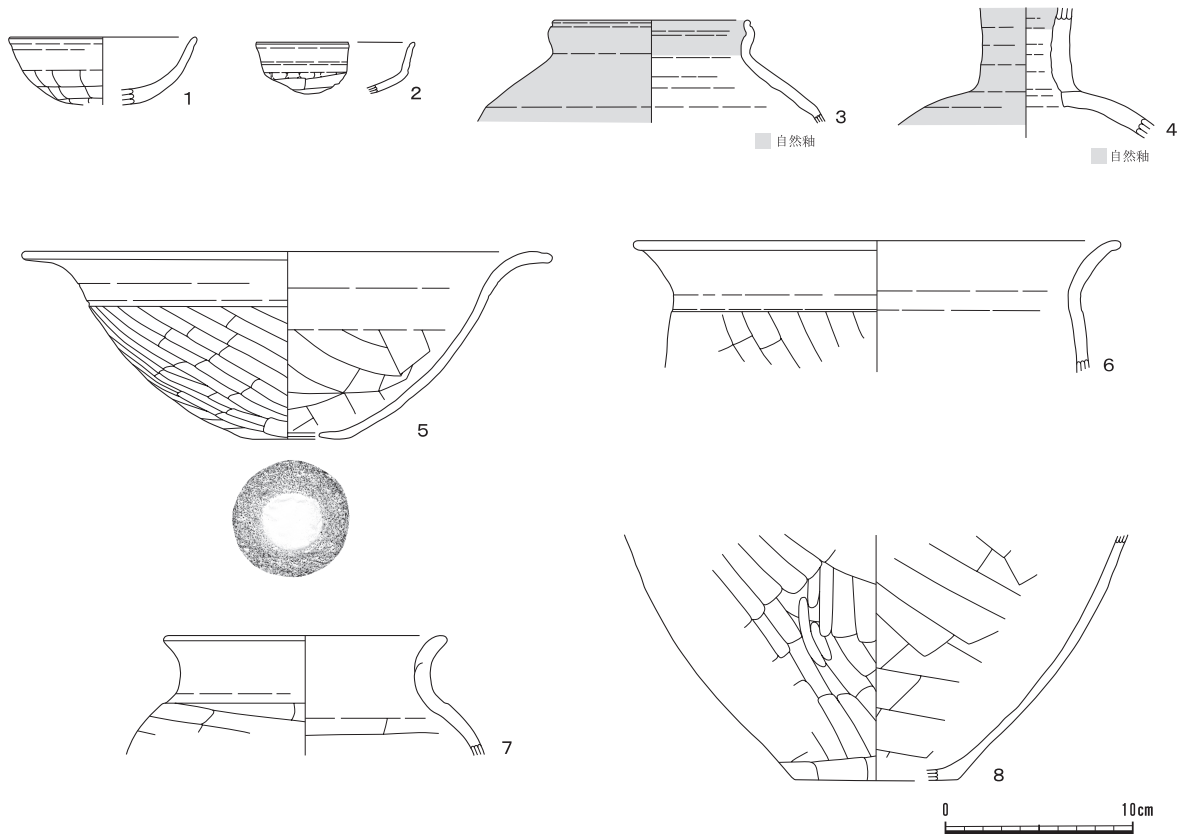
遺構 (第5図)

[検出状況] 北東コーナーのみの検出であるが、平成10年度に発掘調査をした第51地点56号住居跡(未報告)の一部と考えられる。

[構造] 平面形：長方形か。規模：長軸不明／短軸不明／確認面からの深さ60cm前後。壁：ほぼ垂



第5図 56号住居跡 (1/60)



第6図 56号住居跡出土遺物 (1/4)

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第6図1	土師器 環	(3.6)	(9.9)	—	口縁部はやや外傾する ／口縁部と底部との境 に弱い段をもつ／丸底 ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多 く、金雲 母を含む	内面：横ナデ（回転ナ デ）／外面：口縁部は 横ナデ、以下はヘラ削 り	覆土中	30%
第6図2	土師器 環	(2.7)	—	—	口縁部は外反する／口 唇部内面に幅1mmの沈 線がまわる／口縁部と 底部との境に弱い段を もつ／内外面黒彩／い わゆる北武蔵型環か	胎土の色 調は暗茶 褐色	砂粒を含 み、茶褐 色粒子・ 砂粒を僅 かに含む	内面：横ナデ／外面： 口縁部は横ナデ、以下 はヘラ削り	覆土中	口縁部～底 部小破片
第6図3	須恵器 壺	(6.8)	(10.4)	—	短頸壺か／口縁部は短 く直立気味で、途中外 面に幅3mm程のやや太 めの沈線がまわる／外 面及び口頸部内面に自 然釉がかかる／湖西製 品か	胎土の色 調は灰白 色を基調	黒色粒子 を僅かに 含む	ロクロ成形	覆土中	口縁部～体 部上半20%
第6図4	須恵器 壺	(7.0)	—	—	長頸壺／頸部は細長く 直立する／肩部は緩や かなカーブをもち大き く張る／外面及び頸部 上端に自然釉がかかる ／湖西製品か	胎土の色 調は灰白 色を基調	黒色粒子 を僅かに 含む	ロクロ成形／ロクロ回 転は右回転	覆土中	頸部～肩部 破片
第6図5	土師器 甑	9.9	28.0	5.7	浅鉢タイプ／口縁部は 大きく外販する／底部 は穿孔／穿孔は円形で 径3.0cm／底部外面は 摩耗している／在地系 土師器	明橙色を 基調	金雲母・ 砂粒をや や多く、 小石を僅 かに含む	内面：口縁部は横ナ デ、以下はヘラナデ／ 外面：口縁部は横ナ デ、以下はヘラ削り	住居西側の床 面上	完形品
第6図6	土師器 甕	(7.0)	(25.8)	—	長甕／口縁部は「く」 の字状に屈曲する／口 唇部は丸い／最大径は 口縁部／在地系土師器	内面：明 橙色／外 面：暗橙 色	砂粒を多 く、角閃 石・石英 ・金雲母 を僅かに 含む	内面：口縁部は横ナ デ、以下はヘラナデ／ 外面：口縁部は横ナ デ、以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～胴 部上半20%
第6図7	土師器 甕	(6.4)	(15.0)	—	小型丸甕か／口縁部は 「コ」の字状を呈する ／胴部は肩を張り球胴 になるものであろう／ 外面及び口縁部内面は 煤けている／在地系土 師器	淡茶褐色	石英・砂 粒を含む	内面：口縁部は横ナ デ、以下はヘラナデ／ 外面：口縁部は横ナ デ、以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～胴 部上半30%
第6図8	土師器 甕	(13.0)	—	(8.6)	大型丸甕／胴部は球胴 状を呈する／底部は平 底／在地系土師器	内面：明 橙色／外 面：淡茶 褐色	砂粒をや や多く、 角閃石・ 金雲母を 僅かに含 む	内面：ヘラナデ／外 面：ヘラ削り後ヘラナ デ	覆土中	胴部下半～ 底部20% 以下

第4表 56号住居跡出土遺物一覧

直に立ち上がる。主軸方位：N-25°-W。壁溝：確認されなかった。床面：硬化した面は確認できな
かった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：北東コーナー付近の掘り込みが貯蔵穴と思われるが、半
分ほどの検出である。平面形は隅丸方形と思われ、長軸不明／短軸 55cm／深さ 24cm。覆土は2層に分
層され、炭化材を含む。柱穴：検出されなかった。

〔覆 土〕 7層に分層でき、黒褐色土を基調とする。全体的に焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺 物〕 南壁寄りの床面上から完形の土師器甑形土器が出土し、覆土中から土師器環・甕形土器、
須恵器壺形土器が出土した。

〔時 期〕 古墳時代後期（7世紀末葉）。

〔所 見〕 第51地点では壁溝が確認されていたが、本地点ではなく、床面の高さが10cm程低かった。
これについては、セクション図の8層上面が第51地点の床面レベルに近いことと、分層線が平行に近い
ことから、8層は貼床と考えられる。発掘面積が狭く、床が軟弱であったため床面を掘りすぎた可能
性があり、壁溝は巡らされていたと思われる。

遺 物 (第6図、第4表)

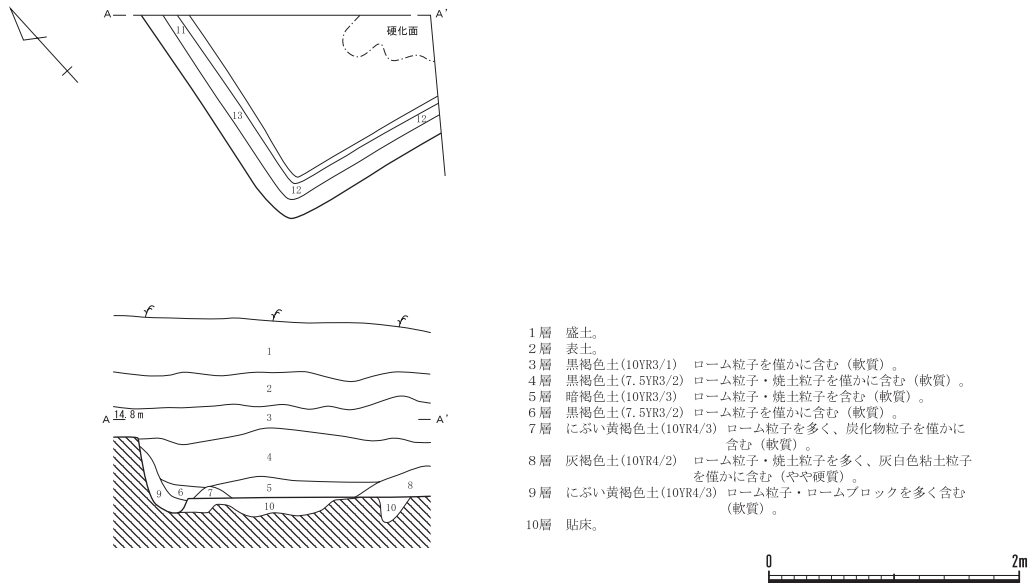
[土 器] (第6図、第4表)

1・2は土師器坏形土器、3・4は須恵器壺形土器、5は土師器甑形土器、6～8は土師器甕形土器である。

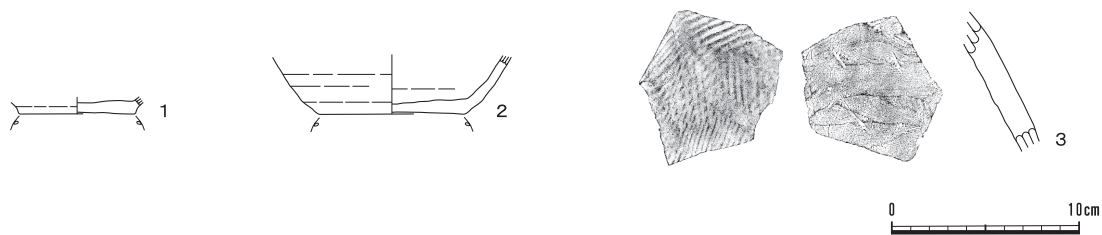
71号住居跡

遺 構 (第7図)

[検出状況] 西コーナーのみの検出であるため、詳細は不明である。



第7図 71号住居跡 (1/60)



第8図 71号住居跡出土遺物 (1/4)

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第8図1	須恵器 坏	(0.9)	—	6.2	底部/内面の底部中央はやや窪む/鳩山製品	灰褐色	白色針状物質を多く、砂粒を僅かに含む	ロクロ成形/底部に回転糸切り痕が残る	覆土中	底部のみ100%
第8図2	須恵器 坏	(3.2)	—	7.6	酸化炎焼成/産地不明	淡黄褐色	砂粒・小石をやや多く含む	ロクロ回転は右回転/底部に回転糸切り痕が残る	覆土中	底部下半~底部40%
第8図3	須恵器 甕	—	—	—	胴部破片/厚さ1.0~1.3センチ/産地不明	灰褐色	石英・砂粒を僅かに含む	内面: 抉るようなヘラ削りが施されるが、僅かに当て道具痕が観察される/外面: 平行叩き目痕が残る	覆土中	胴部破片

(単位: cm)

第5表 71号住居跡出土遺物一覧

[構造] 平面形：方形。規模：長軸不明／短軸不明／確認面からの深さ41～46cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲では巡らされていた。上幅27～31cm／下幅9～11cm／深さ11～13cm。床面：一部硬化した面が確認できた。貼床は5～20cmの厚さで施されていた。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。入口施設：検出されなかった。

[覆土] 6層に分層できた。

[遺物] 須恵器坏・甕形土器が出土した。

[時期] 平安時代（9世紀中葉）。

遺物（第8図、第5表）

[土器]（第8図、第5表）

1・2は須恵器坏形土器、3は須恵器甕形土器である。

（3）遺構外出土遺物（第9図）

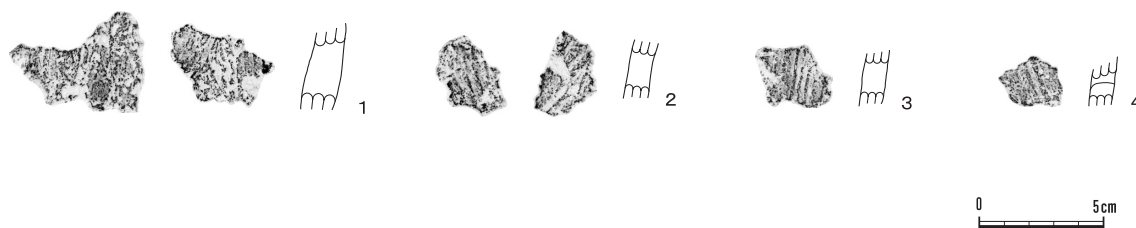
通常、表土および攪乱中から出土した遺物に加えて、後世の遺構への混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱っている。今回の調査で遺構外出土遺物として該当するものは縄文時代のものに限られ、土器片が5点出土している。ここではそのうち4点を図示する。出土状況は、いわゆる縄文時代の遺物包含層からではなく、全て後世の住居跡の覆土から出土したものである。いずれも早期後葉の条痕文系土器の胴部小破片で、表面には貝殻条痕文が施文されている。

1は内面にも条痕文を持つ。色調は赤褐色（5YR4/6）を基調とし、胎土には砂粒・繊維を含む。

2は内面にも条痕文を持つ。色調は明赤褐色（5YR5/6）を基調とし、胎土にはやや粗い砂粒・角閃石・繊維を含むが繊維の混入は僅かである。

3の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を基調とし、胎土には砂粒・角閃石・繊維を含むが繊維の混入は僅かである。

4の色調は黒褐色（10YR3/2）を基調とし、胎土には砂粒・繊維を含むが、繊維の混入は僅かである。



第9図 遺構外出土遺物（1／3）

第3章 新邸遺跡第10地点の調査

第1節 遺跡の概要

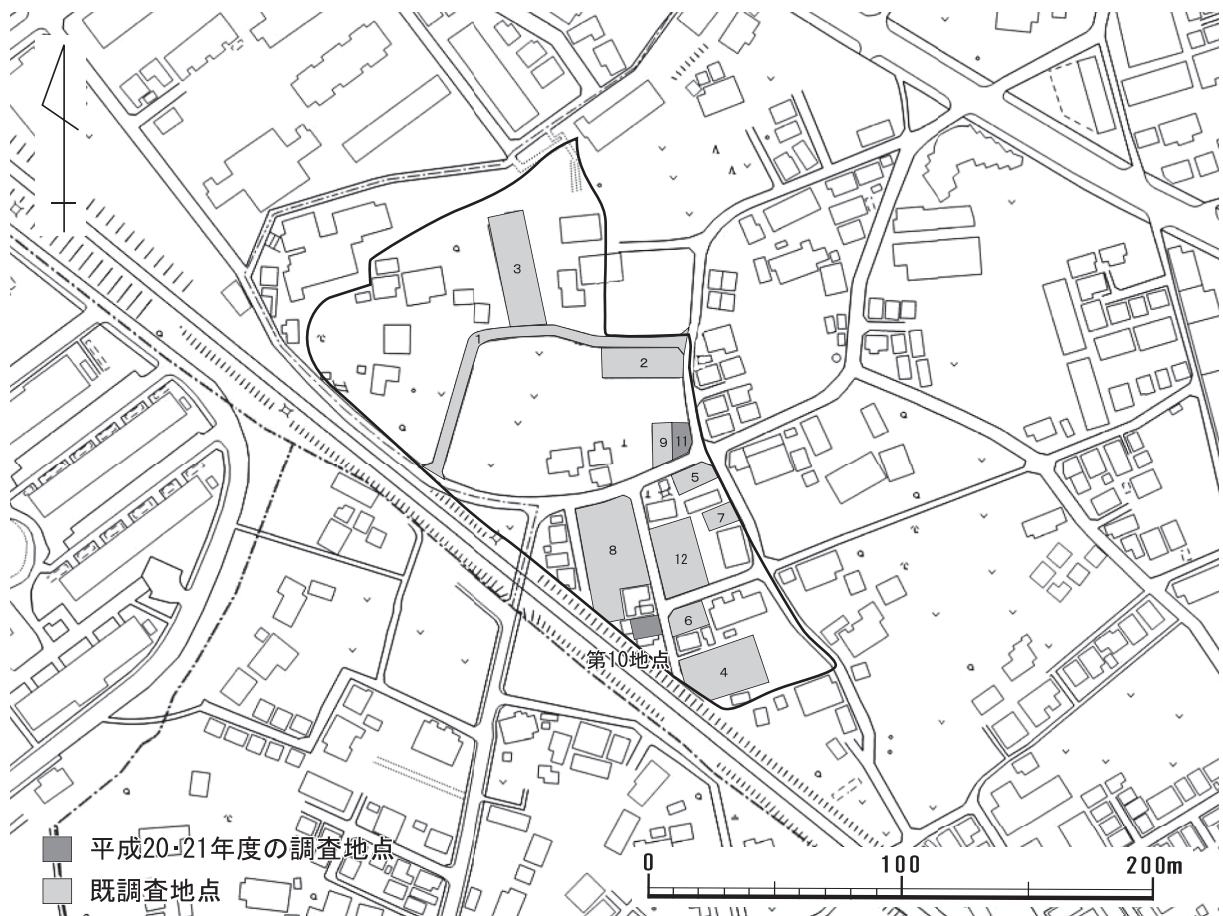
(1) 立地と環境

新邸遺跡は、志木市柏町5丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.0kmに位置している。遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約14m、低地との比高差は約7mである。遺跡の周辺を眺めてみると、昭和62(1987)年にユリノキ通り(当時は都市計画道路富士見・大原線)建設工事に伴う発掘調査が実施されており、以後、ユリノキ通りの開通により、現在では各種開発が盛んに進行している地区と言える。

本遺跡は、今までの調査から、旧石器時代、縄文時代前期・中期、古墳時代前期、中・近世、近代の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成21年5月22日に実施した。調査区に合わせ2本のトレンチを設定し、バックホー



第10図 新邸遺跡の調査地点 (1/3,000)

を使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、現況地表面から深さ30～40cmほど掘り下げた位置で、住居跡と思われる遺構1基を確認した。

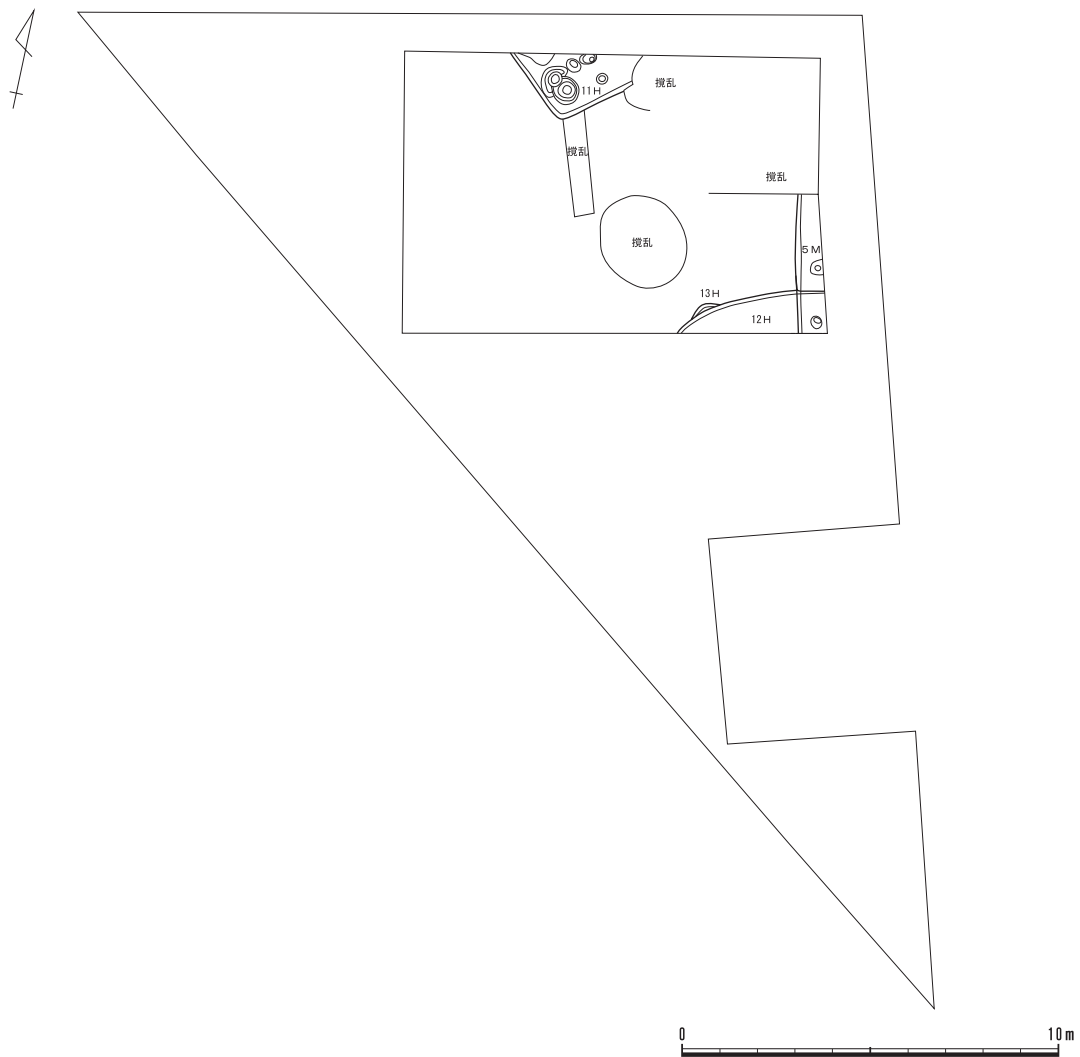
そのため、開発行為にあたっては、遺構に影響を及ぼす可能性が大きく、何らかの保存措置を講じる必要があるため、開発当事者に調査内容を説明し、協議を行った。その結果、地盤調査後の結果により検討することになり、教育委員会では、その連絡を待つことにした。

その後、耐震強度に問題があることから、盛土保存での対応は不可能である回答を得たため、発掘調査を実施することに決定した。

以下、発掘調査の大まかな経過を説明することとする。

6月1日 重機による表土剥ぎ作業を開始し、残土置場は調査区南側を当てることにした。また、同時に遺構確認作業を行った結果、古墳時代前期の住居跡2軒（11・12H）と近代のものと思われる溝跡1本（5M）が検出された。5Mについては、本地点の北側に位置する第8地点で検出された溝跡と同一のものと考えられることから、同一遺構として取り扱うことにした。

3日 人員導入による発掘調査を開始する。まず、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行



第11図 遺構分布図 (1/200)

い、その後、11・12 Hと5 Mの精査を開始する。

- 4日 11・12 Hについては、遺物出土状態の写真撮影及び平板測量を行う。11 Hの南西隅から凸堤を伴う貯蔵穴を検出した。また、12 Hの精査中に新たに住居跡が検出されたため、13 Hとして精査を開始する。5 Mについては、新たにピット1本が検出されたが本遺構に伴うかは不明である。5 Mは完掘終了。
- 5日 11・12 Hの床面からはそれぞれ柱穴1本が検出された。これらの柱穴は支柱穴の1本と考えられる。その後、11・12 Hの完掘を終了し、5 Mを含め写真撮影・実測を終了し、すべての調査を完了する。
- 8日 午前中に器材の片付けを行い、器材搬出作業を終了する。
- 9日 午後から埋戻し作業を開始し、本日中に終了した。

第2節 検出された遺構・遺物

(1) 概要

本地点から検出された遺構は、古墳時代前期の住居跡3軒(11～13 H)と近代の溝跡1本(5 M)である。いずれも調査区隔からの一部検出であり、構造等の全容については不明と言える。

古墳時代前期の住居跡では、11 Hから出土した土器が比較的に良好な内容であり、埴・壺・甕などがまとまって出土しており、S字甕が含まれている。

また、近代の遺構として、溝跡1本(5 M)が検出された。この5 Mに関しては、すでに本地点の北側の第8地点で報告されている溝跡と同一遺構と判断し、命名したものである。今回の調査では、一部分での確認に終わってしまったが、第8地点と同様に「野火止用水跡」と考えられる遺構であろう。

(2) 住居跡

11号住居跡

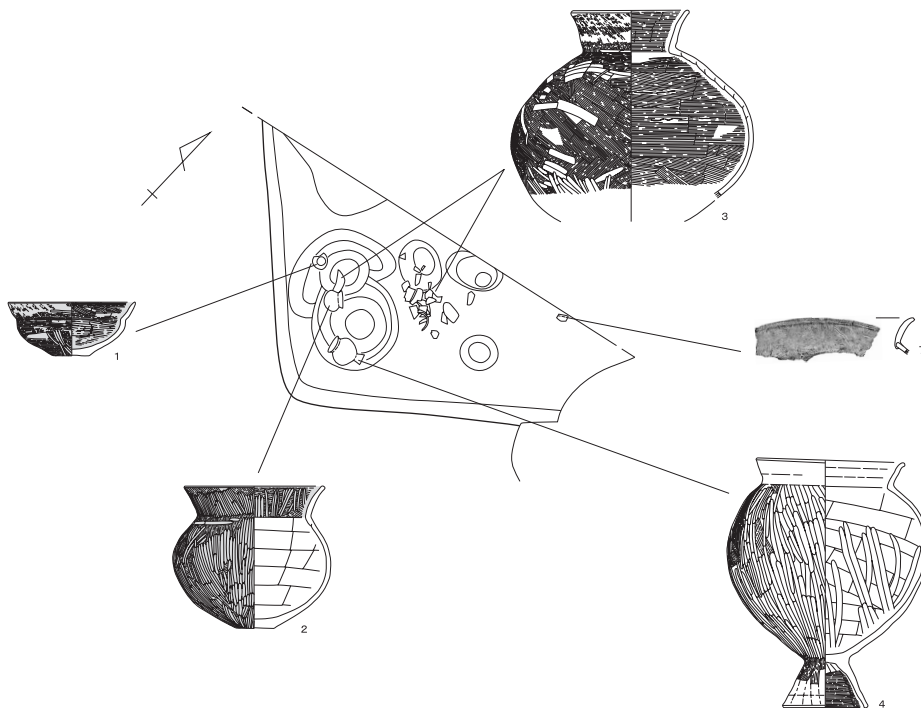
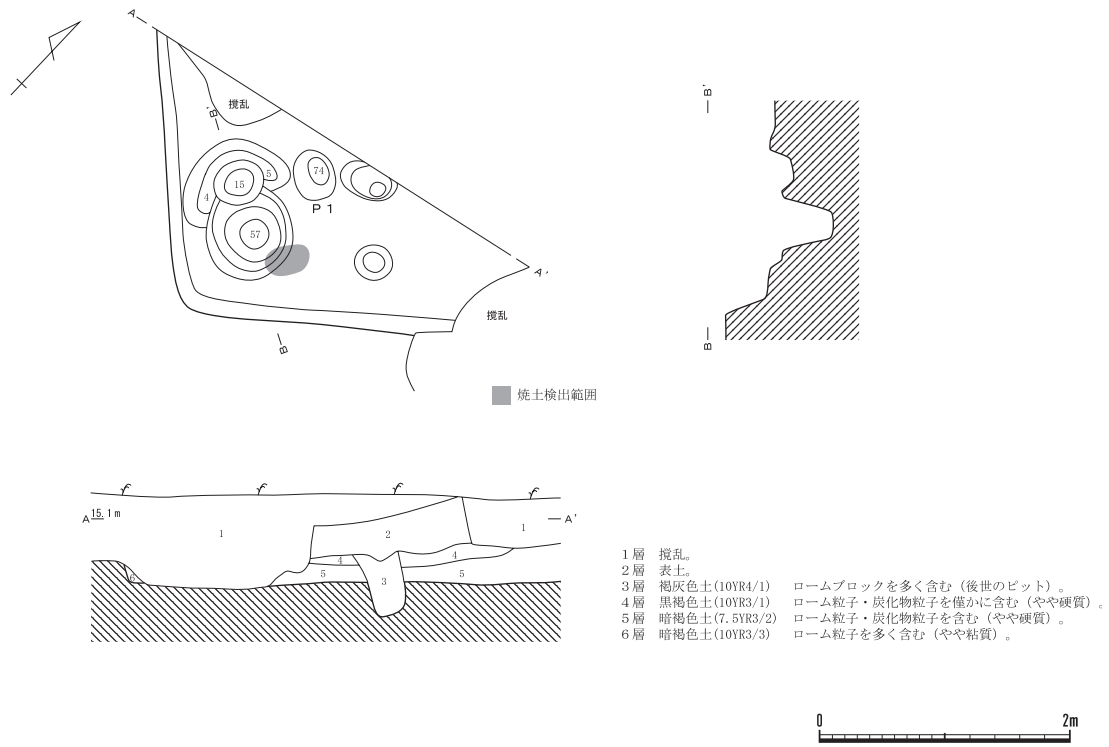
遺 構 (第12図)

[検出状況] 南コーナーのみの検出であり、さらに東側は浄化槽により壊されているため、詳細は不明である。床直上から炭化材や焼土が検出されていることから、焼失住居の可能性はある。

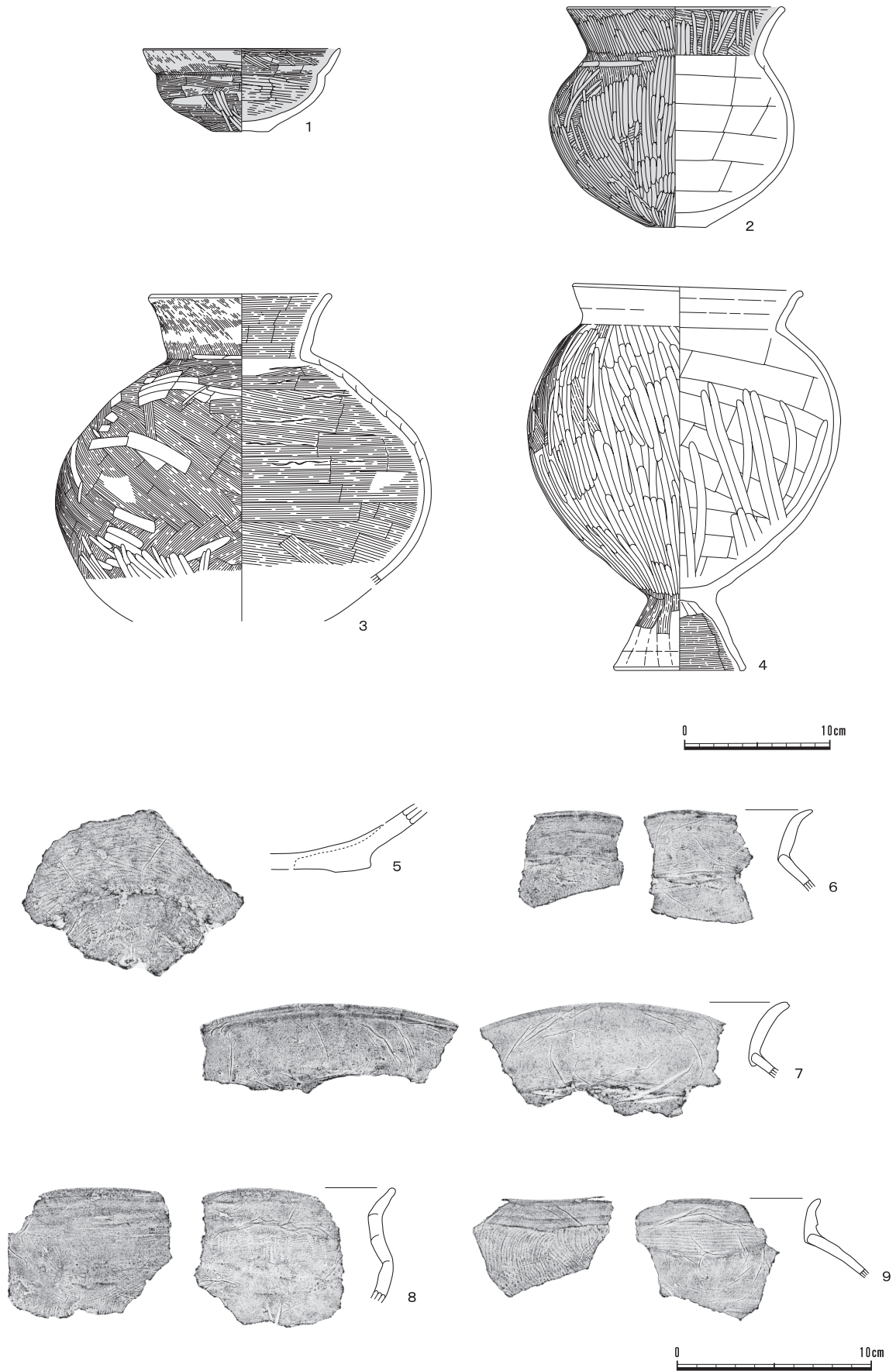
[構 造] 平面形：方形。規模：長軸不明／短軸不明／確認面からの深さ30～35 cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。床面：硬化した面は確認できなかった。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：南コーナーのものが貯蔵穴と考えられる。周囲は76×68 cmの楕円形で深さ10 cm・幅10 cm程のテラス状の段になっており、内側は直径44 cm・深さ57 cmと直径40 cm・深さ15 cmのピット状の掘り込みになっている。西側には高さ5 cm程の凸堤が確認できた。柱穴：深さ74 cmのP1が住居に伴う可能性がある。

[覆 土] 黒褐色土と暗褐色土を基調とし、5層は炭化材を含む。貯蔵穴の東側からは8 cmの厚さで、焼土が検出された。

[遺 物] 貯蔵穴付近の床直上から、土師器埴・壺・甕形土器が出土している。



第12図 11号住居跡・遺物出土状態 (1/60・1/8)



第13図 11号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第13図1	土師器 埴	5.7	13.4	3.7	浅鉢タイプ/口縁部はやや内湾気味に開き、体部上半は膨らみをもつ/底部は平底/内外面は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・小石を僅かに含む	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整/ヘラ磨き調整は外面より内面の方がていねいに施される	凸堤のほぼ上面	ほぼ完形品
第13図2	土師器 壺	15.1	14.9	4.0	口縁部は外反する/最大径は胴部中位にもつ/底部は平底/外面及び内面口縁部は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く、砂粒・小石を含む	内面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整/外面：口縁部はハケ目調整後ヘラ磨き調整、胴部は横方向のヘラナデ	貯蔵穴上層(床面レベル)	完形品
第13図3	土師器 壺	(22.3)	12.5	-	口縁部は外傾する/胴部は算盤玉状を呈し、最大径は胴部中位にもつ	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：横方向のハケ目調整/デ/外面：ハケ目調整を基本とするが、口縁部には軽い横ナデ、胴部にはヘラナデが施される	貯蔵穴の北側の床面上及び貯蔵穴	口縁部～胴部下半70%
第13図4	土師器 甕	26.4	15.7	9.0	台付甕/「く」の字口縁/最大径は胴部上半にもつ/脚台部は「ハ」の字状/器面全体が黒く煤けている	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ後縦方向の粗いヘラ磨き調整、脚台部はハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整後縦方向のヘラ磨き調整、脚台部はハケ目調整、裾部は横ナデ	貯蔵穴上層(床面レベル)	ほぼ完形品
第13図5	土師器 壺	(3.0)	-	-	底部/底部は1.5cmの幅で周辺が高くなっており、中央がやや窪んでいる/外面に赤彩の可能性	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・雲母・砂粒を含む	内面：ハケ目調整/外面：横方向のヘラ磨き調整	覆土中	胴部下半～底部20%
第13図6	土師器 甕	(4.0)	-	-	「く」の字口縁/口縁部は外反する	暗茶褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子をやや多く、角閃石・砂粒を僅かに含む	内面：横方向のハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、以下は縦方向のハケ目調整	覆土中	口縁部～体部下半20%
第13図7	土師器 甕	(3.9)	-	-	「く」の字口縁/口縁部は外反する/口唇部は平坦に面取りされるが、中央はやや沈線状を呈する	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部上半はヘラ削り/外面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、縦方向のハケ目調整	住居南コーナーからやや北東寄りの覆土中(床上5cm)	口縁部破片
第13図8	土師器 甕	(5.8)	-	-	口縁部は一度内傾し、受口状に開く/胴部上半に稜をもつ	暗黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・雲母を含む	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整後部分的に粗いヘラ磨き調整	覆土中	口縁部破片
第13図9	土師器 甕	(4.0)	-	-	いわゆるS字甕か/口縁部は短く外反するが、途中稜をもつ	明茶褐色を基調	黄褐色粒子・雲母・砂粒を僅かに含む	内面：口縁部はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、胴部はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整/外面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目	覆土中	口縁部～胴部上半破片

(単位：cm)

第6表 11号住居跡出土遺物一覧

[時期] 古墳時代前期。

[遺物] (第13図、第6表)

[土器] (第13図、第6表)

1は土師器埴形土器、2・3・5は土師器壺形土器、4・6～9は土師器甕形土器である。

12号住居跡

[遺構] (第14・15図)

[検出状況] 住居跡北壁付近の一部のみの検出である。13号住居跡を切り、5号溝跡に切られる。

[構造] 平面形：楕円形か。規模：長軸不明／短軸不明／確認面からの深さ39～41cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。床面：壁際を除き硬化した面が確認できた。カマド：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：深さ82cmのものが検出されたが本住居跡に伴うかは不明である。覆土はローム粒子・ロームブロックを多く、炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。入口施設：確認できなかった。

[覆土] 4層に分層できた。

[遺物] 土師器高坏・鉢・壺・甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代前期。

遺物 (第16図、第7表)

[土器] (第16図、第7表)

1は土師器高坏形土器、2は土師器鉢形土器、3・4は土師器壺形土器、5・6は土師器甕形土器である。

13号住居跡

遺構 (第14図)

[検出状況] ごく一部のみの検出であるため詳細は不明である。12号住居跡に切られる。

[構造] 平面形：方形か。規模：長軸不明／短軸不明／確認面からの深さ32cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 古墳時代前期か。

(3) 溝跡

5号溝跡

遺構 (第17図)

[検出状況] 北側は攪乱を受けており、さらに南・東側は調査区域外であるため、詳細は不明である。12Hを切る。

[構造] 規模：確認できた長さは3.70m。深さ25～28cm。走行方位：N-12°-W。

[覆土] ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 陶磁器の破片が出土した。

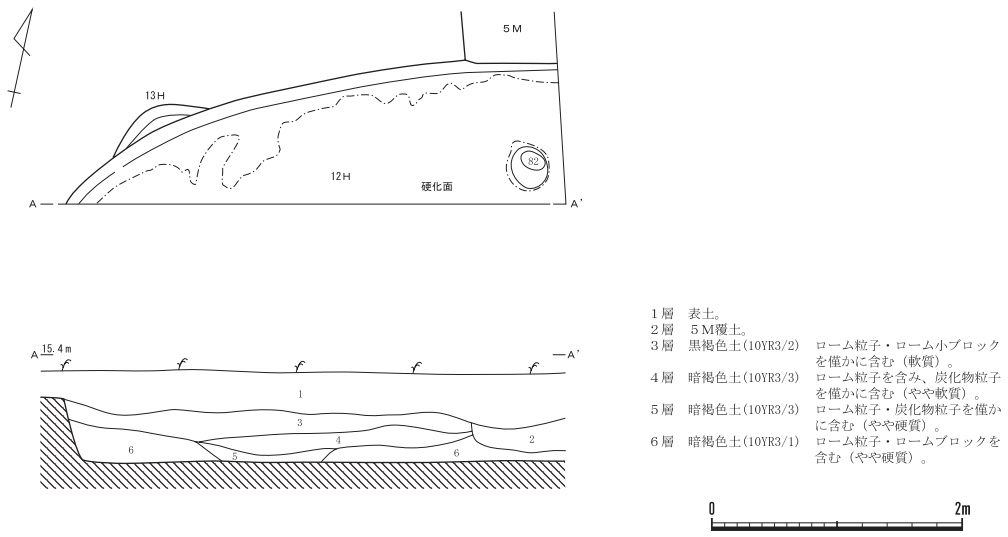
[時期] 近世～近代。

[所見] 本地点の北側の第8地点で報告されている5Mと位置関係で同一遺構と判断した。本遺構は、野火止用水跡と考えられる。

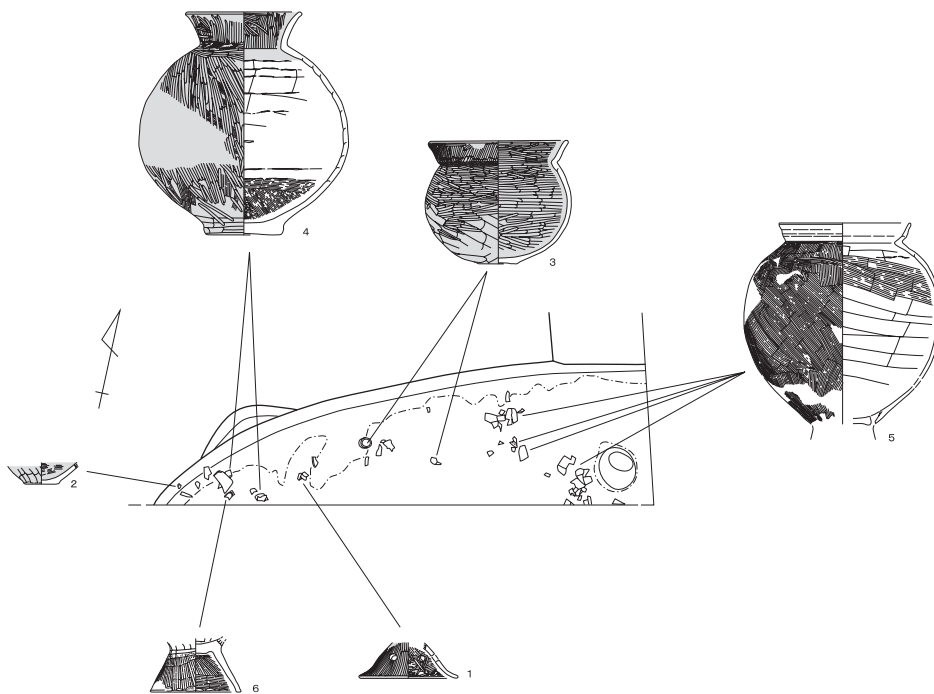
遺物 (図版5-1)

[陶磁器] (図版5-1、第8表)

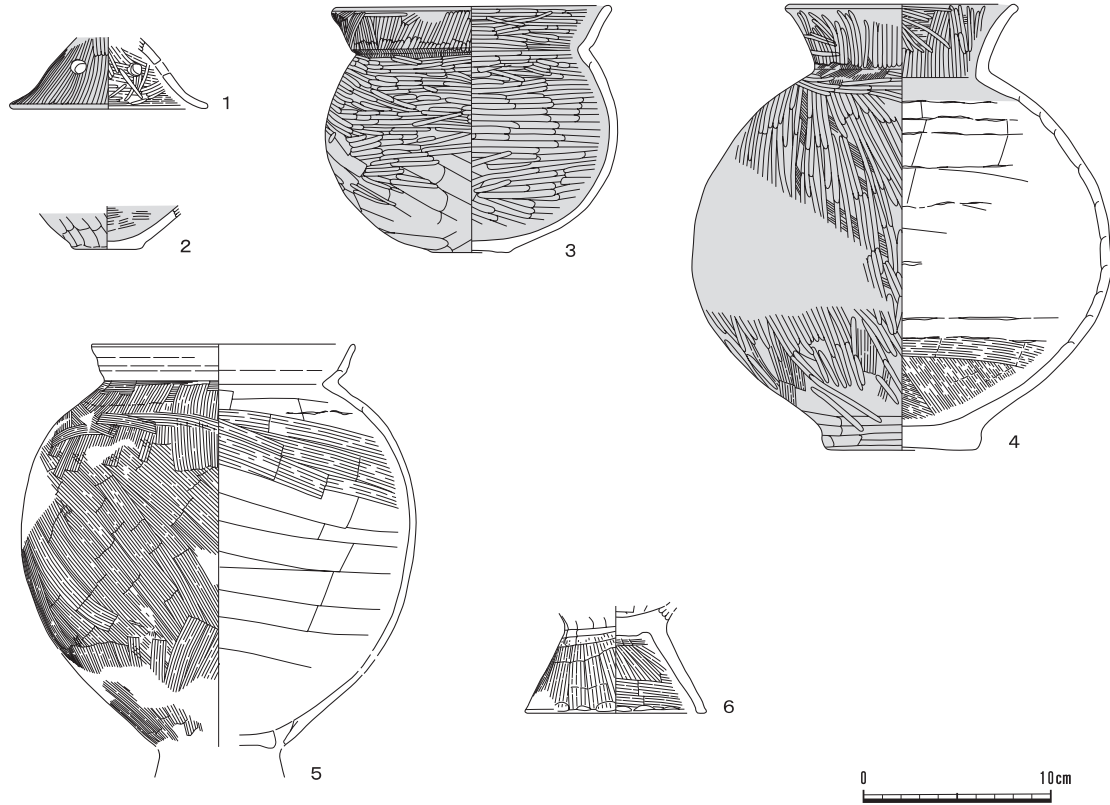
1は磁器、2～8は陶器である。



第14図 12・13号住居跡 (1/60)



第15図 12号住居跡・遺物出土状態 (1/60・1/8)



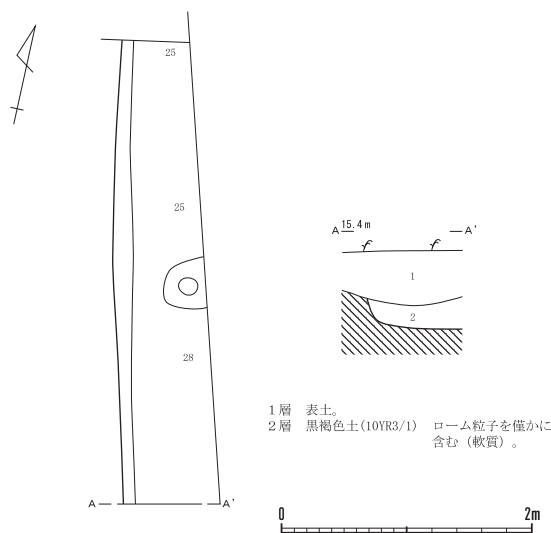
第16図 12号住居跡出土遺物 (1/4)

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第16図1	土師器高坏	(3.8)	—	(10.5)	裾部は大きく外反する／薄手で精巧に作られている／外面は赤彩／途中に1孔が穿たれている／人間系土師器の胎土に類似	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石を僅かに含む	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面のヘラ磨き調整はていねいに施され、ハケ目痕をほとんど残さない	北壁近くの覆土中 (床上5cm)	脚台部のみ40%
第16図2	土師器鉢	(2.3)	—	3.8	小型鉢か／底部は平底／内外面赤彩であるため重ではないと思われる	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子を多く含む	内面：ヘラ磨き調整／外面：縦方向のヘラ削りか	北西コーナーの覆土中 (床上33cm)	胴部下半～底部60%
第16図3	土師器壺	13.1	14.8	4.0	口縁部は外傾する。最大径は口縁部にもつ／胴部は球形を呈し、最大径は中位にもつ／底部は基筒底／内外面は赤彩／人間系土師器の胎土に類似	胎土は暗赤褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	内面：横方向のヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面頸部の屈曲部にはハケ目痕が、頸部胴部下半にはヘラ削り痕が残る	北壁近くの床面上	ほぼ完形品
第16図4	土師器壺	23.6	12.4	7.8	口縁部は外反する／最大径は胴部中位にもつ／底部は平底／外面及び内面口縁部から胴部上半は赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：口縁部はハケ目調整後ヘラ磨き調整、胴部は上半から中位がヘラナデ、下半はハケ目調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整、底部付近はヘラ削り痕が僅かに残る	北西コーナーの覆土中 (床上33cm)	50%
第16図5	土師器甕	(18.9)	(14.0)	—	台付甕／いわゆるS字甕／口縁部は下半で屈曲し外傾する／最大径は胴部中位にもつ／器厚は3mm程度と薄手で精巧な作り／器面全体が黒く焼けている	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、胴部は上半がハケ目調整、中位以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整	北壁近くの床面上	口縁部～胴部下半60%／脚台部を欠損
第16図6	土師器甕	(5.7)	—	(9.6)	台付甕の脚台部／「ハ」の字状を呈する／裾端部は平坦	暗橙色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：ハケ目調整／外面：上半はヘラ削り後横方向の粗いヘラ磨き調整、中位以下はハケ目調整か	北西コーナーの覆土中 (床上33cm)	脚台部のみ50%

(単位：cm)

第7表 12号住居跡出土遺物一覧



第17図 5号溝跡 (1/60)

図版番号	種別	器種	製作の特徴等	推定産地	時期
図版5-1-1	磁器	直口	口縁部小破片/染付/内面:口縁部に圈線あり	肥前系	18世紀
図版5-1-2	陶器	鉢	小鉢/口縁部~体部小破片/釉薬は外面底部を除き透明釉/胎土の色調は灰褐色	瀬戸系	18世紀前半
図版5-1-3	陶器	碗	体部小破片/釉薬は内外面に灰釉/胎土の色調は灰褐色	唐津	17世紀後半
図版5-1-4	陶器	徳利	体部下小破片/釉薬は外面に鉄釉/胎土の色調は暗茶褐色	唐津	17世紀前半
図版5-1-5	陶器	碗	黄瀬戸/体部下小破片/釉薬は内外面に灰釉/胎土の色調は暗黄褐色	瀬戸系	18世紀
図版5-1-6	陶器	徳利	黄瀬戸/体部破片/ロクロ成形/釉薬は内外面に灰釉/胎土の色調は暗黄褐色を基調	瀬戸系	17~18世紀
図版5-1-7	陶器	徳利	体部破片/ロクロ成形/釉薬は外面に灰釉/胎土の色調は暗黄褐色を基調	瀬戸系	17~18世紀
図版5-1-8	陶器	鉢	現器高1.9cm/底径4.5cm/底部破片/ロクロ成形/削りだし高台/高台部目痕/胎土の色調は淡黄褐色/釉薬は底部を除き内外面に灰釉	瀬戸系	18世紀中

第8表 5号溝跡出土の陶磁器一覧

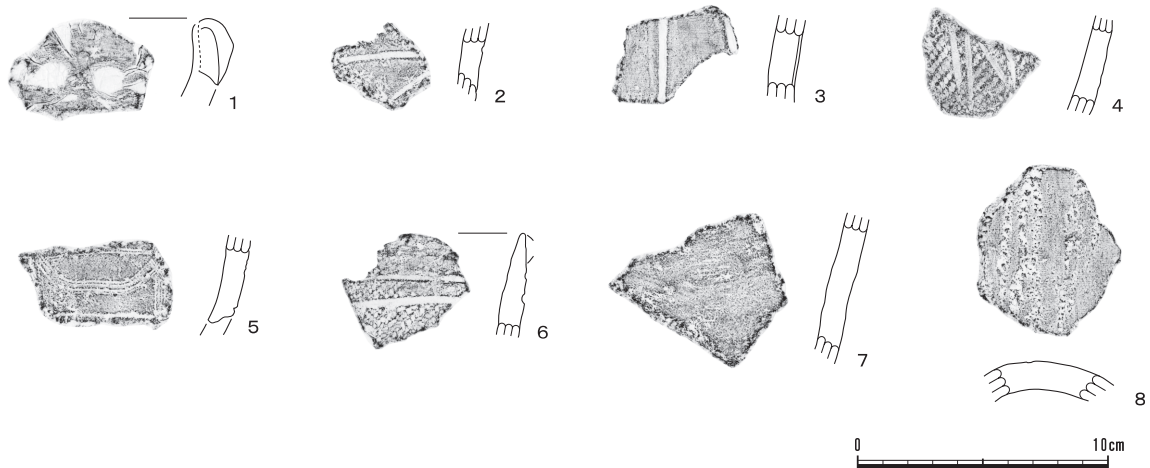
(4) 遺構外出土遺物

ここでは、表土および攪乱中から出土した遺物に加えて、混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱う。今回の遺構外出土遺物は、縄文時代の土器7点と中世以降の遺物(瓦)1点である。他に弥生時代・平安時代・中近世の遺物が出土しているが極めて小破片で図示できなかった。

1. 縄文時代の遺物 (第18図1~7)

縄文時代の遺物として土器片が出土しているが、いわゆる縄文時代の遺物包含層は認められず、全てが後世の遺構への混入品として出土したものである。

1は口縁の小突起部の破片で、口縁には沈線を巡らせ、小突起には円形の刺突文を持つ。内面は剥離している。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を基調とし、胎土には砂粒・角閃石を含む。堀之内1式。



第18図 遺構外出土遺物（1／3）

2は胴上部の破片で、沈線によって横位及び斜行する区画を施文する。区画内には縄文が施文されていると思われるが、磨滅・欠損が著しく、原体の撚りなどは読みとれない。色調は橙色（5YR6/6）を基調とし、胎土には砂粒を含む。堀之内2式。

3は胴の括れ部分に近い破片。沈線による懸垂文を施文している。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を基調とし、胎土には砂粒・細礫・角閃石を含む。堀之内式。

4は胴部の破片で、LRの縄文を地文として沈線による懸垂文が施文される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を基調とし、胎土には砂粒を含む。堀之内1式か？

5は胴部の破片。半裁竹管の並行沈線によって文様が描かれる。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を基調とし、胎土には石英質の砂粒を含む。堀之内1式の、懸垂文の間を横位の直線及び弧線文で連絡する類か。あるいは、諸磯式のいわゆる肋骨文の範疇に入るものであろうか。

6は口縁部の破片で、口唇部外面は剥落しており隆帯が有ったと思われる。また、外面は磨滅が著しい。LRの縄文を地文として、並行した沈線による横帯文を巡らせる。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を基調とし、胎土には砂粒を含む。内面には赤褐色の付着物が見られ、赤彩されていた可能性がある。堀之内2式。

7は胴部の破片。無文で、主に横方向の調整痕のみ見られる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を基調とし、内面は黒褐色。胎土には砂粒を含む。後期の粗製土器。

2. 中世以降の遺物（第18図8）

8は中世以降の丸瓦と思われる。現存長7.5cm程の破片のため全体の詳細は不明である。内径9.0cm、厚み1.0cm。色調は被熱により全体に赤茶褐色を呈する。

第4章 西原大塚遺跡第159地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町2～4丁目に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約1kmに位置している。遺跡の大きさは、北東－南西方向に約700m、北西－南東方向に約150mの広がりを持ち、遺跡面積163,930㎡を測る市内最大規模の遺跡である。

この遺跡では、平成5年度以降に西原特定土地区画整理事業に伴う道路部分の発掘調査が本格的に実施され、平成18年度に完了している。しかし、現在では、その後の道路の完成に伴い、個人住宅・分譲住宅建設などを中心とした小・中規模開発が急増している。これにより、本遺跡の調査件数は、平成24年11月時点で、188地点にのぼり、市内最多の調査件数になっている。

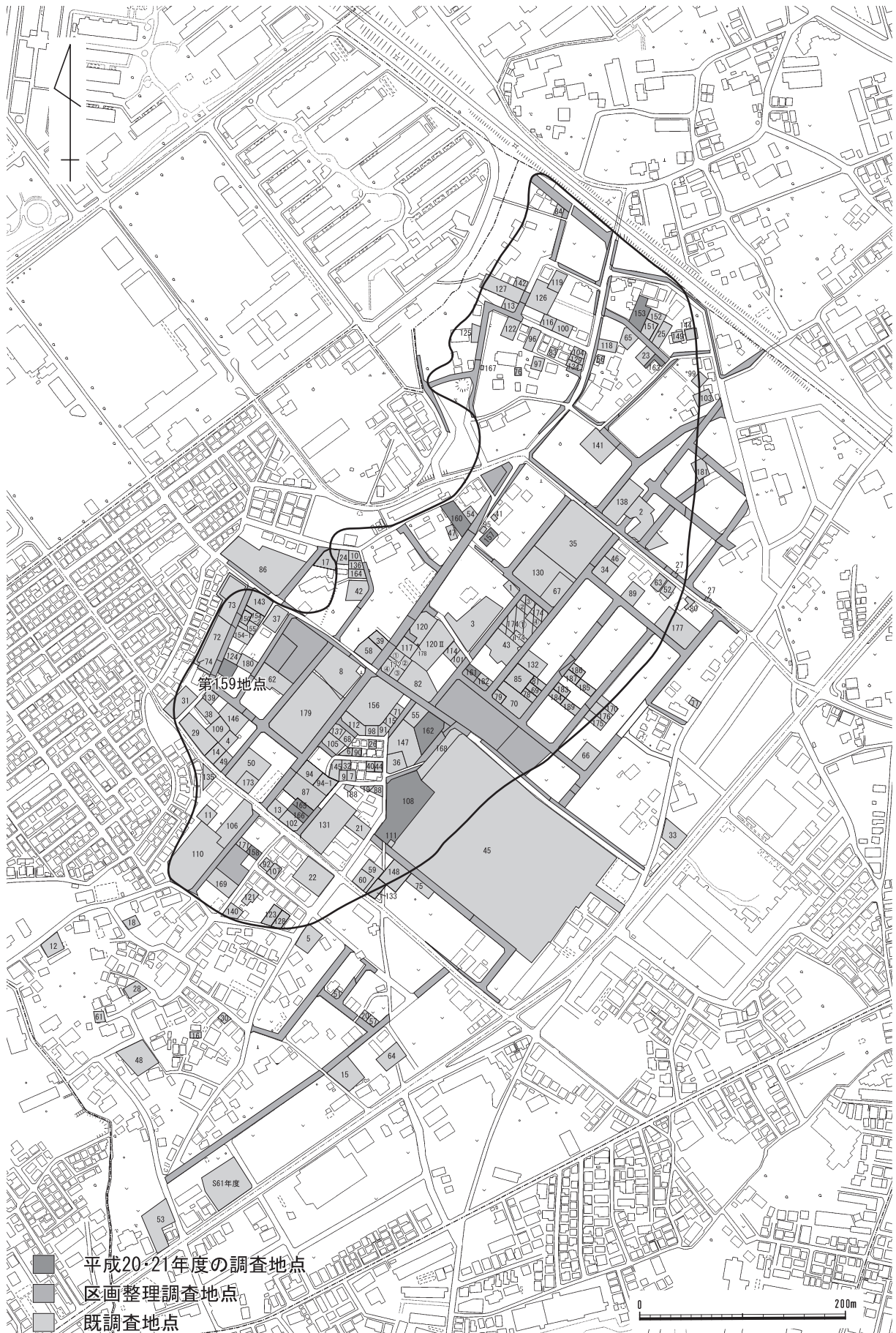
本遺跡は、1983（昭和48）年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器時代、縄文時代前～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成21年9月14日に実施した。調査区内のほぼ南北方向に3本のトレンチを設定し、

	平成21年9月		10月					
	25日	30日	5日	10日	15日	20日	25日	30日
表土剥ぎ作業		9.30						
48 M		10.1						
605 D		10.1		10.13				
606 D		10.1						
607 D				10.13				
608 D				10.13				
609 D					10.14			
610 D						10.19		
611 D							10.23	
612 D							10.23	
22 H			10.9					
552 Y		10.1						
553 Y			10.9					
554 Y				10.14				
555 Y				10.14				
556 Y					10.16			
557 Y						10.19		
558 Y						10.19		
559 Y						10.19		
器材片付け作業							10.28	
埋戻し作業								10.29

第9表 西原大塚遺跡第159地点の発掘調査工程表



第19図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)

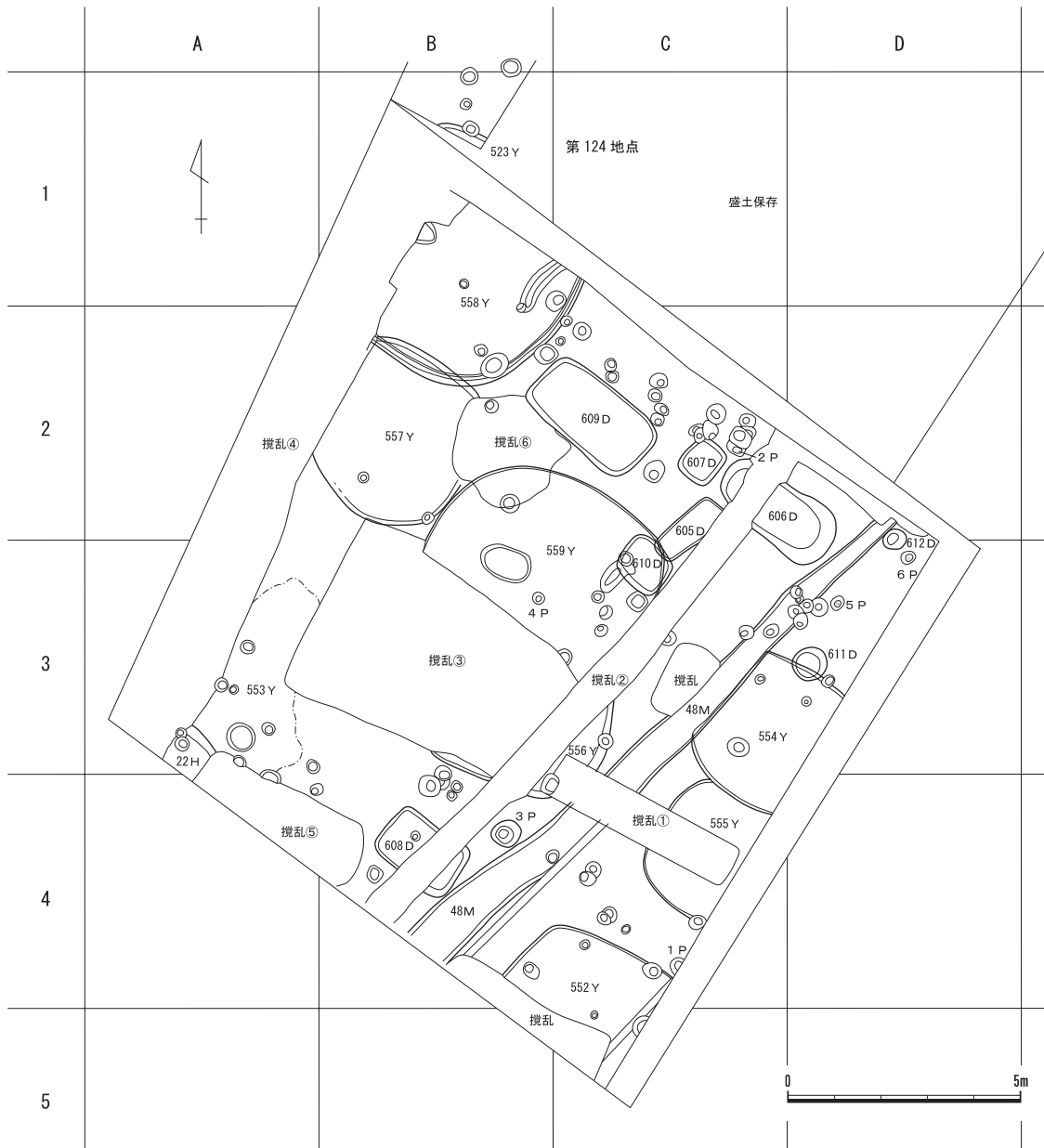
平成24年12月28日現在

バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡と思われる遺構7基を調査区ほぼ全面から確認した。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存対策について検討を依頼したが、今回の開発計画では地盤の表層改良（現況GLから深さ約1 m）を行う計画であることから、保護層を確保することは難しく、盛土保存は不可能であるという回答を得た。そのため、平成21年9月30日から発掘調査を実施することに決定した。

以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第9表の発掘調査工程表に示した。

9月30日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。今回は調査区内に残土置場を確保できないため、午後からは表土剥ぎ作業に併行して残土搬出作業を開始する。

10月1日 表土剥ぎ・残土搬出作業に併行して、人員導入による発掘作業を開始する。調査前の準



第20図 遺構分布図 (1 / 150)

備として、器材をトラックに積載し、現地に搬入する。その後、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った結果、調査区内には弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 8 軒（552～559 Y）が調査区全面に分布していることが判明した。また、近世以降の遺構として溝跡（48M）・土坑（605・606 D）が分布していることが判明した。午後から、48Mと605・606 D、552 Yの精査を開始する。また、調査区内には大きな攪乱が4箇所ほど存在し、遺構は著しく破壊されている状況であるが、遺構の精査と併行し、攪乱部分も掘り下げることにした。

- 10月2日 雨天であったが、重機による表土剥ぎ・残土搬出作業のみを行い、本日中に作業を完了した。
- 10月上旬 台風18号の影響により、作業が中止の日が続く。近世以降の遺構では、溝跡（48M）の実測・写真撮影を終了した。また、弥生時代後期～古墳前期の住居跡（552 Y）の精査を終了した。
- 10月中旬 新たに近世以降の土坑（607～610 D）の精査を開始し、605～608 Dの精査・実測を終了した。弥生時代後期～古墳前期の住居跡（553～556 Y）の精査を開始する。調査区南西隅からは検出された住居跡（22 H）は、出土遺物から古墳時代後期（6世紀初頭）であることが判明した。
- 10月下旬 近世以降の土坑（609・610 D）の実測・写真撮影を終了し、新たに弥生時代後期～古墳前期の住居跡（557～559 Y）の精査を開始する。また、縄文時代のものと思われる土坑（611・612 D）の精査を開始する。
- 27日 611・612 D、558・559 Yの実測・写真撮影を終了し、すべての調査を完了する。
- 28日 午前中に器材の片付けを行い、搬出作業を終了する。
- 10月29日 埋戻し作業を開始する。29・30日の2日間で完了する。

第2節 検出された遺構・遺物

（1）概要

本地点からは、狭小な面積の中でありながら、縄文時代・弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期・中世以降の遺構が密集して検出された。

縄文時代の遺構として、土坑2基（611・612 D）、ピット2本（5P・6P）が検出された。いずれも覆土の観察から縄文時代の遺構と判断したが、詳細な時期を判断し得る遺物は出土しなかった。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構については、住居跡8軒（552～559 Y）と比較的に多く密集して検出され、遺物としても土器が多く出土し、今回の調査の中心となるものである。また、調査区内からはピットが検出されているが、そのうち3Pからは、土器が比較的に安定して出土していることから、当該期のものと判断した。

古墳時代後期の遺構は、調査区西端から住居跡1軒（22 H）が検出された。住居跡は大部分が調査区外にあり、調査区内では住居東壁に相当する部分のみの検出と思われる。時期は出土した土師器杯・高杯の特徴から6世紀初頭に比定される。

中世以降の遺構として、土坑6基(605～610 D)・溝跡1本(48 M)が検出された。土坑の時期設定については、606 Dから陶器小破片1点が出土するのみで、出土遺物が極めて少なかったが、ここでは覆土の観察から中世以降のものと判断した。その他としては、ピットが検出されているが、1 Pから磁器1点と銭貨(寛永通宝)1点、4 Pから銭貨(明道元宝)1点が出土している。

(2) 縄文時代

1. 土坑

611号土坑

遺 構 (第21図)

[位 置] (D-3) グリッド。

[検出状況] 554 Yに切られる。

[構 造] 平面形：開口部は楕円形で坑底面はほぼ円形。断面形：皿状で坑底は平坦。壁面は長軸側約60°、短軸側約70°で立ち上がる。規模：長軸径75cm/短軸径70cm/深さ22cm。長軸方位：N-45°-E

[覆 土] 3層に分層された。

[遺 物] 土器小破片が出土した。

[時 期] 縄文時代前期か。

遺 物 (第21図)

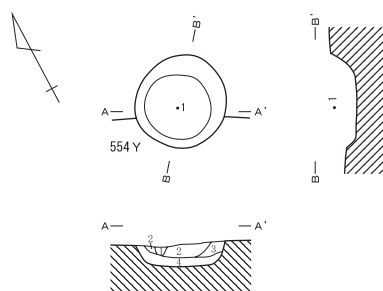
[土 器] (第21図)

1は前期羽状縄文系の土器で、無節Lの縄文を施文する胴部小破片である。色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)を呈し、胎土は砂粒・繊維を含む。

612号土坑

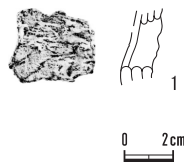
遺 構 (第21図)

[位 置] (D-2・3) グリッド。

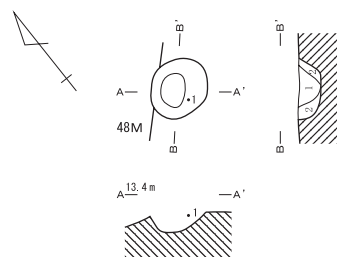


- 1層 擾乱。
- 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 明茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含み、炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

611号土坑



611号土坑出土遺物



- 1層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

612号土坑



第21図 611・612号土坑・611号土坑出土遺物(1/60・1/3)

[検出状況] 48 Mに切られる。

[構造] 平面形：不整な楕円形。断面形：坑底面は丸く、壁面の角度は一定せず40°～70°程で立ち上がる。規模：長軸径0.52 m／短軸径0.40 m／深さ15 cm。長軸方位：N－75°－E

[覆土] 2層に分層された。

[遺物] 土器小破片が出土した。

[時期] 縄文時代中期前半か。

遺物 (図版13－1)

土器 (図版13－1)

1は器面の劣化が激しく文様等は判然としないが、中期前半の所産と思われる土器底部片。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土は粗めの石英・雲母片・砂粒を含む。

2. ピット

5号ピット

遺構 (第20図)

[位置] (D－3) グリッド。

[構造] 平面形：不整な楕円形。規模：長軸35 cm／短軸25 cm／深さ50 cm。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から縄文時代と考えられる。

6号ピット

遺構 (第20図)

[位置] (D－3) グリッド。

[構造] 平面形：不整な楕円形。規模：長軸32 cm／短軸27 cm／深さ31 cm。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から縄文時代と考えられる。

(3) 弥生時代後期～古墳時代前期

1. 住居跡

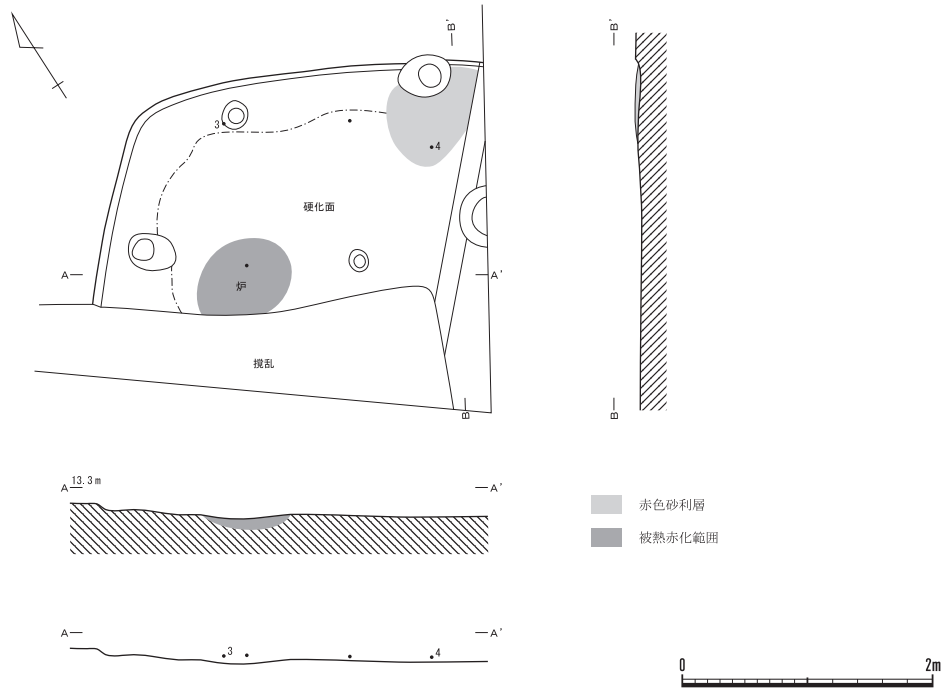
552号住居跡

遺構 (第22図)

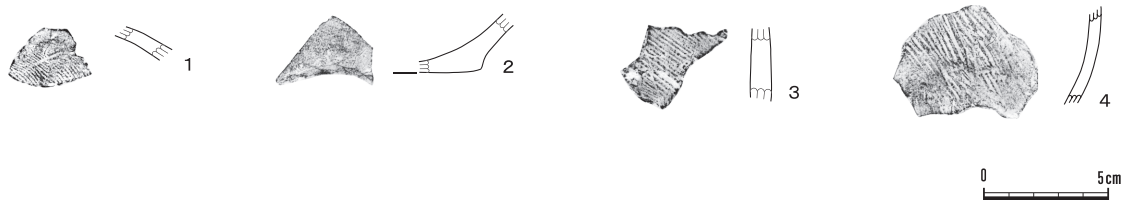
[位置] (B・C－4) グリッド。

[検出状況] 北コーナー付近のみの検出で、南側は調査区域外であり、さらに攪乱を受けている。

[構造] 平面形：方形。規模：長軸不明／短軸不明／遺構確認面からの深さ3～9 cm。壁：遺存状態が悪いため詳細は不明であるが、確認できた部分では35°程の角度で緩やかに立ち上がっている。主軸方位：不明。壁溝：確認できなかった。床面：壁際を除き硬化した面が確認できた。炉：北西壁から70 cm程離れて位置する。西側は一部壊されている。82×65 cmの楕円形を呈する地床炉で、掘り込み



第22図 552号住居跡・遺物出土状態 (1/60)



第23図 552号住居跡出土遺物 (1/3)

は無く、9cm程の厚さで被熱赤化していた。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：本住居に伴うものは検出されなかった。赤色砂利層：後世のピットと耕作により一部壊されていたが、北東壁際の床面直上に90×65cmの範囲で確認できた。砂粒・小石を含む淡褐色土で層厚は4cm程。入口施設：確認できなかった。

[覆 土] ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺 物] 壺・甕形土器の破片が出土した。

[時 期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

[遺 物] (第23図、第10表)

[土 器] (第23図、第10表)

1～3は壺形土器、4は甕形土器である。

553号住居跡

[遺 構] (第24図)

[位 置] (A-3) グリッド。

[検出状況] ほぼ床面のみの検出であり、さらに攪乱を多く受けているため、住居の範囲は確認できなかった。22Hに切られる。



第24図 553号住居跡 (1/60)



第25図 553号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

[構造] 平面形：不明。規模：長軸不明／短軸不明／深さ不明。壁：確認できなかった。主軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。床面：硬化した面を確認した。炉：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：P1・2としたものが本住居に伴う可能性がある。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含み、炭化材を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 埴・甕形土器の破片が出土した。

[時期] 弥生時代後期～古墳時代前期。

遺物 (第25図、第11表)

[土器] (第25図、第11表)

1は埴形土器、2・3は甕形土器である。

554号住居跡

遺構 (第26図)

[位置] (C・D-3) グリッド。

[検出状況] 南東側は調査区域外である。48Mに切られ、555Y・611Dを切る。

[構造] 平面形：隅丸方形か。規模：長軸3.20m／短軸不明／遺構確認面からの深さ7～12cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-55°-E。壁溝：検出されなかった。床面：壁際を除いて硬化した面が確認された。貼床は4～10cmの厚さで施されていた。炉：住居東側の壁から70cm程離れて位置する地床炉である。7cmの掘り込みを持つ。炉床は、中央付近の一部に被熱による硬化が認められたのみである。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：主柱穴と思われるものは検出できなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：直径20cm、深さ18cmのものが入口梯子穴と考えられる。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 高坏・壺・甕形土器の破片が出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺物 (第27図、第12表)

[土器] (第27図、第12表)

1は高坏形土器、2は壺形土器、3・4は甕形土器である。

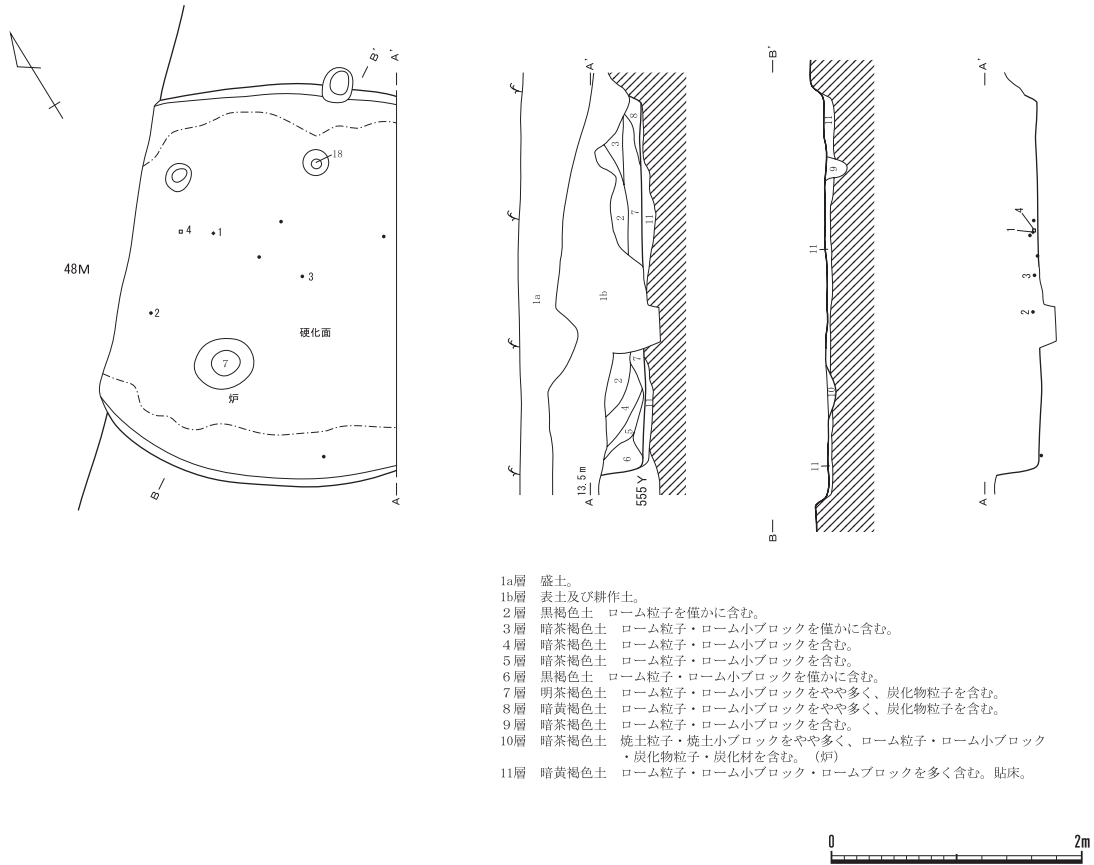
555号住居跡

遺構 (第28図)

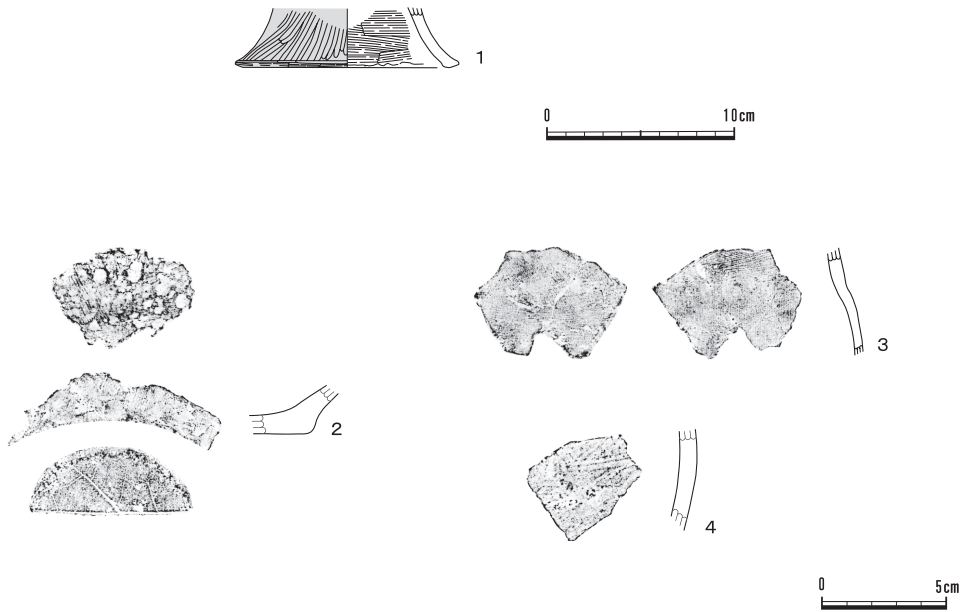
[位置] (C-4) グリッド。

[検出状況] 南西側は調査区域外である。1/3程は溝状に深く壊されている。554Yに切られる。

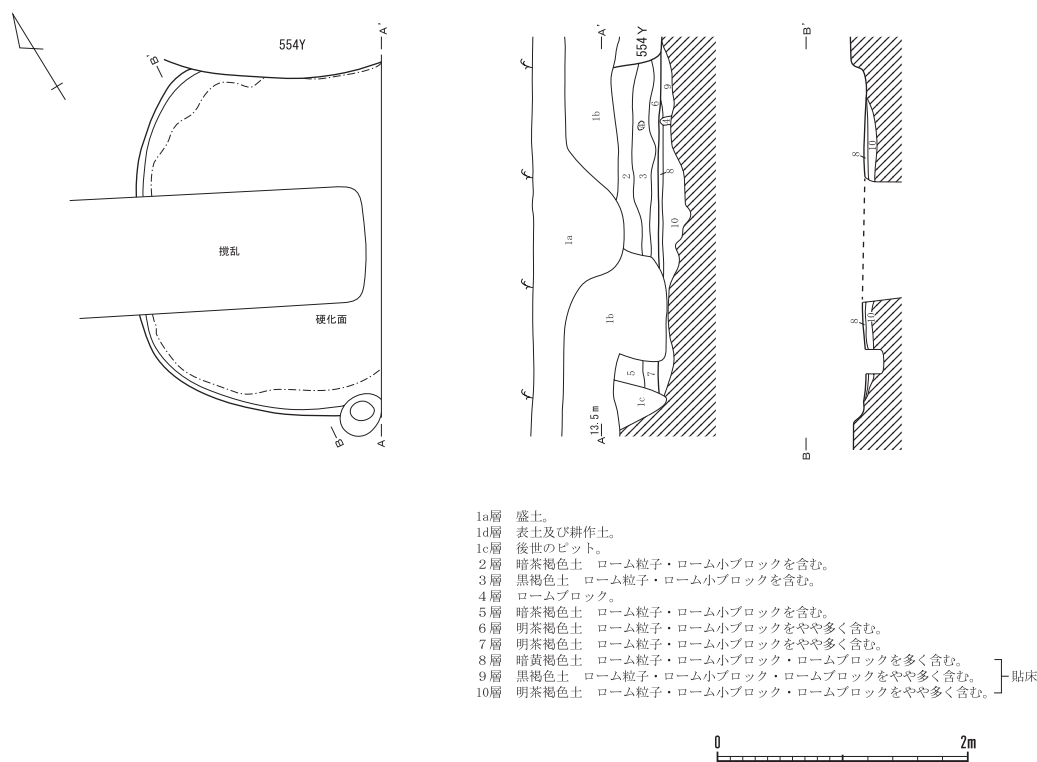
[構造] 平面形：隅丸方形か。規模：長軸不明／短軸不明／遺構確認面からの深さ10cm前後。壁：確認できた部分では緩やかに立ち上がっている。主軸方位：不明。壁溝：確認できなかった。床面：壁際を除き硬化した面が確認できた。貼床は6～22cmの厚さで施されていた。炉：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：検出されなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確



第26図 554号住居跡・遺物出土状態 (1/60)



第27図 554号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第28図 555号住居跡 (1/60)

認できなかった。

[覆 土] 調査区側の土層断面では5層に分層できた。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 弥生時代後期～古墳時代前期。

556号住居跡

遺 構 (第29図)

[位 置] (B・C-3・4) グリッド。

[検出状況] 大半が壊されているため、詳細は不明であり、559 Yとの新旧関係も判らなかった。

[構 造] 平面形：隅丸長方形か。規模：長軸不明／短軸不明／遺構確認面からの深さ6～17cm。

壁：確認できた部分では緩やかに立ち上がっている。主軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。床

面：硬化した面は確認できなかった。炉：確認できなかった。貯蔵穴：南コーナー付近のものが貯蔵穴

と思われる。南東側は壊されており、44×不明cmで方形を呈すると思われる。深さ26cm。覆土はロー

ム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含み、炭化材を僅かに含む黒褐色土を基調とする。柱穴：確

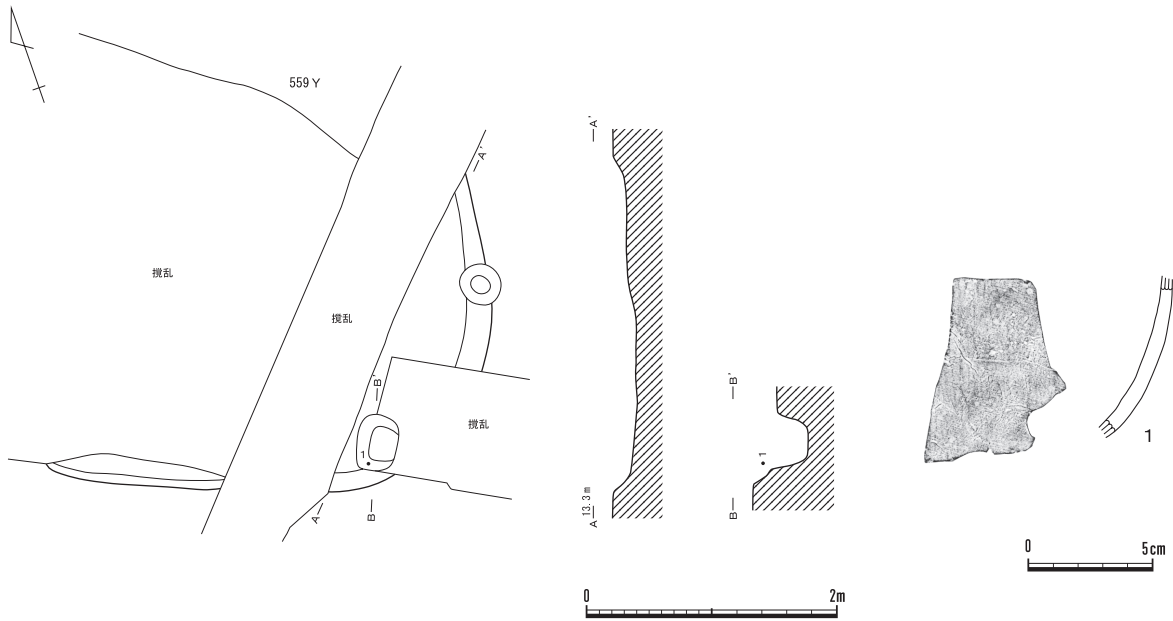
認できなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆 土] ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。南壁近くの覆土には焼土がやや多く含まれていた。

[遺 物] 壺形土器の破片1点が出土した。

[時 期] 弥生時代後期～古墳時代前期。

[所 見] 焼土や炭化材が検出されていることから、焼失住居の可能性はある。



第29図 556号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)

遺物 (第29図、第13表)

[土器] (第29図、第13表)

1は壺形土器である。

557号住居跡

遺構 (第30図)

[位置] (B-2) グリッド。

[検出状況] 東側と西側は攪乱を受けており、遺存状態はあまり良くない。558 Yを切る。

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸3.7m／短軸不明／遺構確認面からの深さ8～16cm。壁：40°程の角度で立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。床面：ほぼ直床であったが、硬化した面は確認できなかった。床直上から焼土が検出され、その下側は被熱により硬化していた。炉：住居中央より東に偏って位置する。80×50cmの焼土付近が地床炉の可能性はあるが、断定するにいたらなかった。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆土] 8層に分層できた。

[遺物] 焼土検出付近から多く出土している。高坏・壺・甕・甑形土器が出土した。

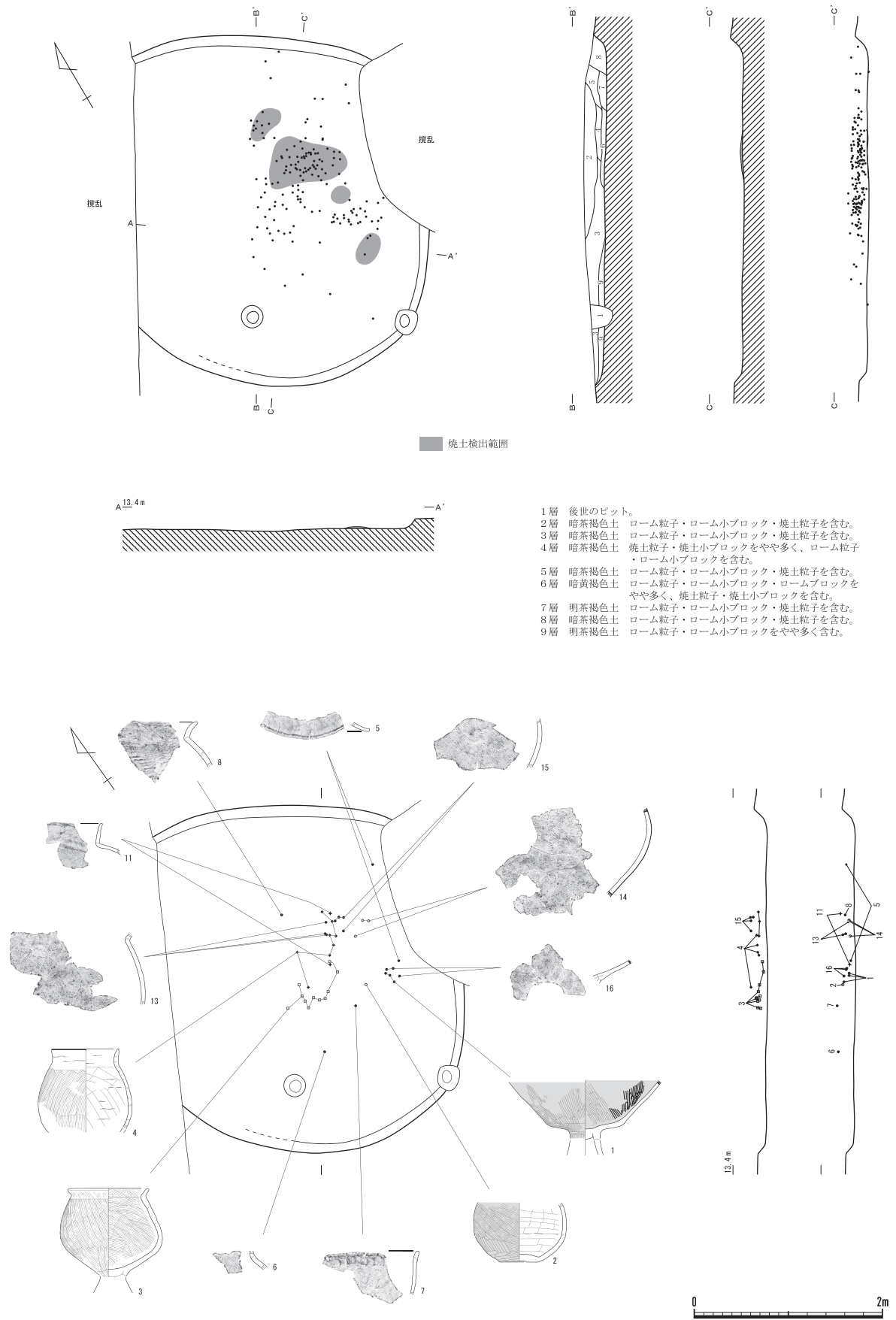
[時期] 古墳時代前期。

[所見] 焼土が多く検出されたことから、焼失住居の可能性はある。

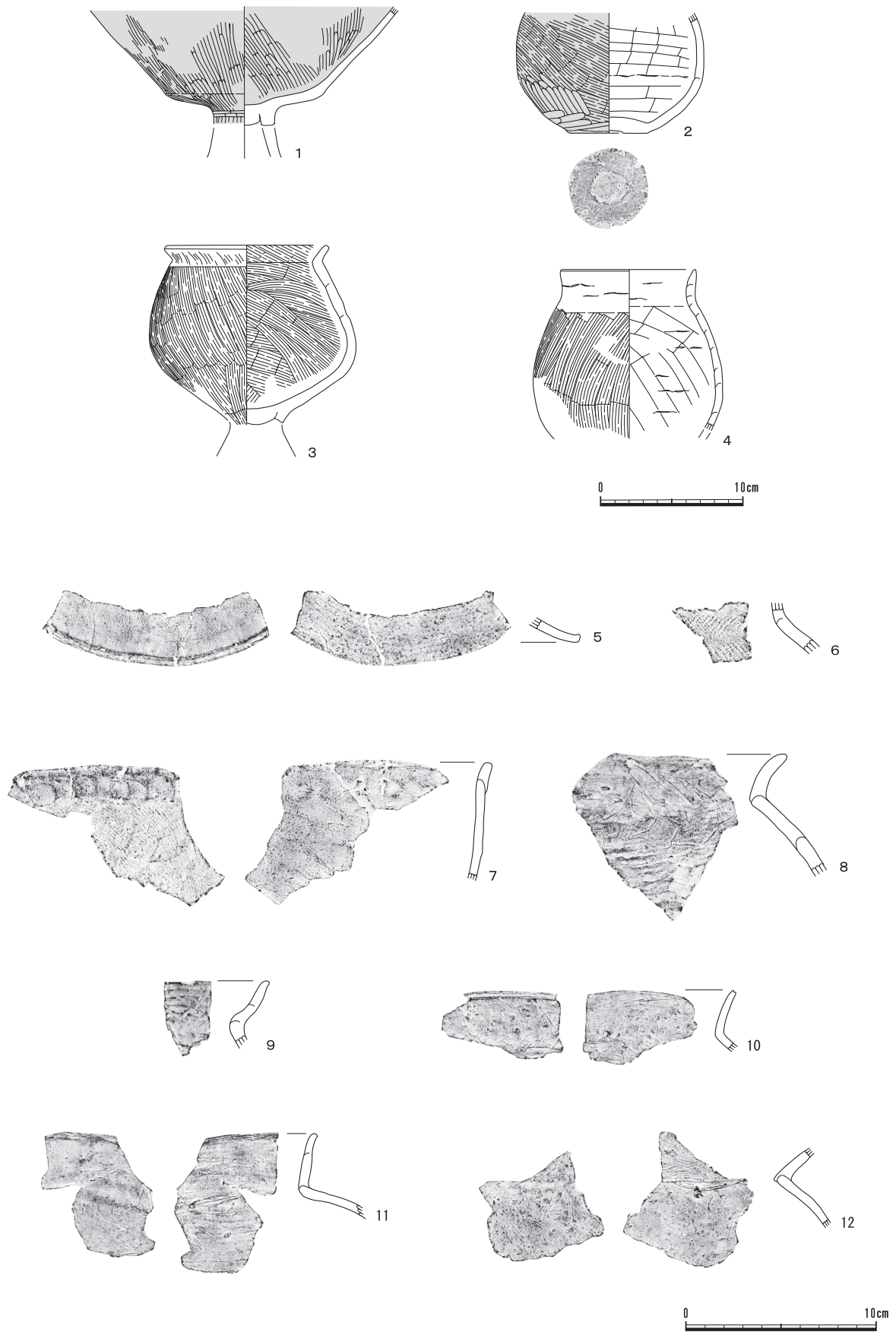
遺物 (第31・32図、第14表)

[土器] (第31・32図、第14表)

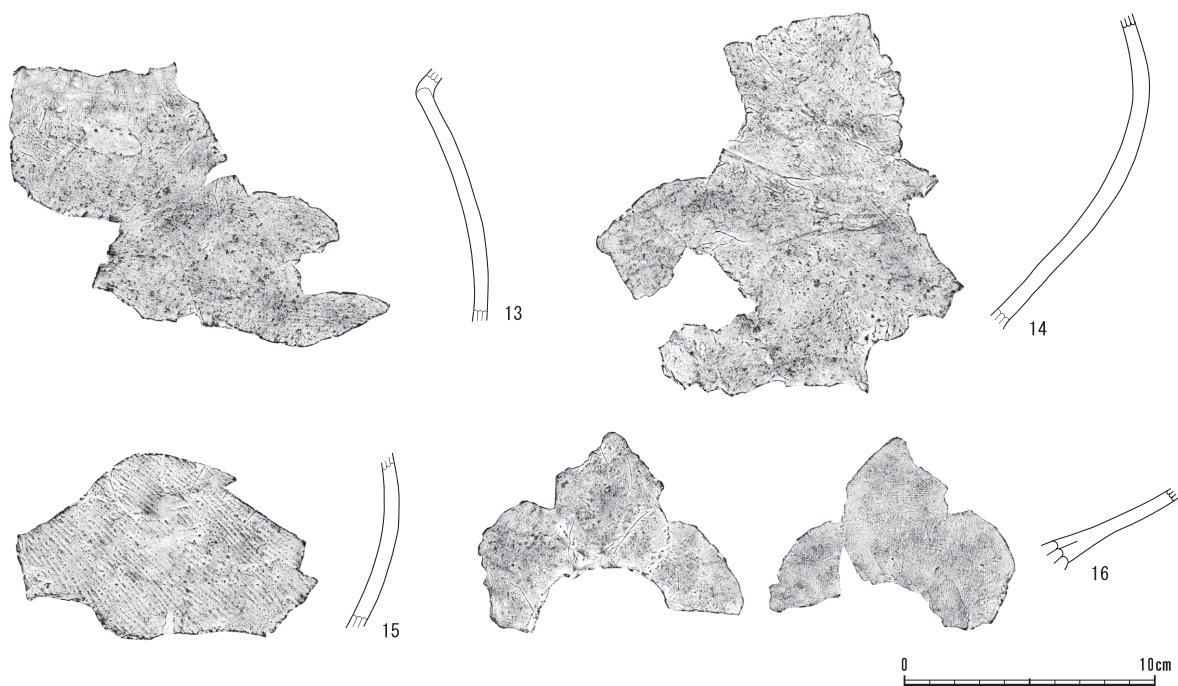
1・5は高坏形土器、2・6は壺形土器、7は甑形土器か、3・4・8～16は甕形土器である。



第30図 557号住居跡・遺物出土状態 (1/60)



第31図 557号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第32図 557号住居跡出土遺物2 (1/3)

558号住居跡

遺 構 (第33・34図)

[位 置] (B-1・2) グリッド。

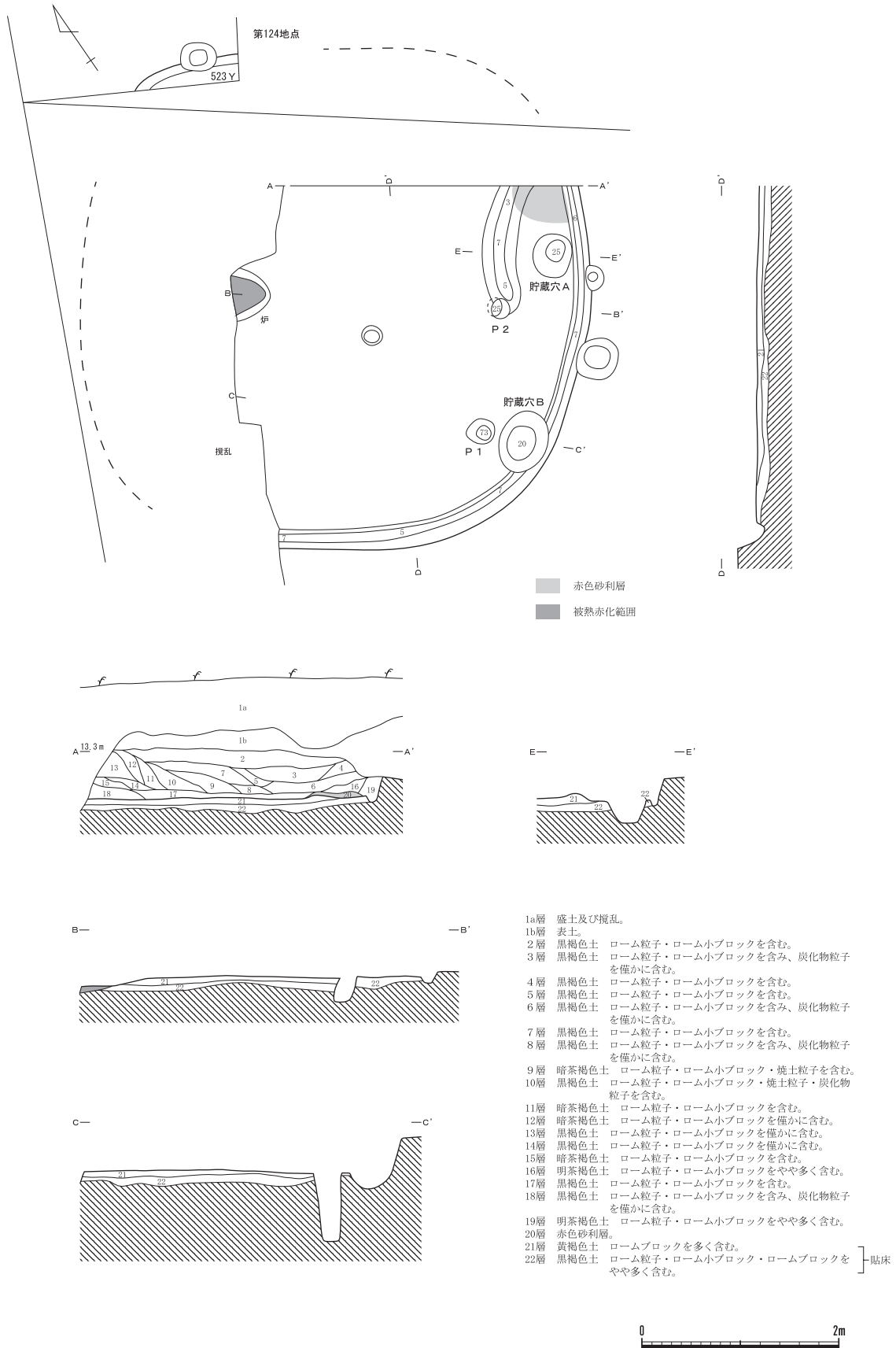
[検出状況] 調査区域外と攪乱により北側は不明であるが、第124地点で検出された523 Yが同一住居と考えられる。557 Yに切られる。

[構 造] 平面形：隅丸方形と思われる。規模：長軸不明／短軸（5 m）／確認面からの深さ20～29 cm。壁：75°程の角度で立ち上がる。主軸方位：N-56°-W。壁溝：124地点では確認されていないが、本地点では巡らされていた。上幅18～24 cm／下幅4～8 cm／深さ5～7 cm。床面：全面硬化していた。貼床は2層に分層でき、3～15 cmの厚さで施されていた。炉：住居の北西側に位置する地床炉であるが、攪乱を受けており詳細は不明である。炉の付近は床面より5 cmほど下がっている。炉床は3 cmほどの掘り込みをもち、被熱により5 cmの厚さで赤化していた。貯蔵穴：〈貯蔵穴A〉南東壁中央よりやや東に偏って位置する。44×37 cmの丸みの強い隅丸方形で、深さ25 cm。覆土は、上層がローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、赤色砂粒を含む明茶褐色土を基調とする。下層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。北東側には幅35 cm・高さ3～7 cmの凸堤が確認できた。〈貯蔵穴B〉南コーナー付近に位置する65×45 cmの楕円形で、深さ20 cm。覆土は上層が暗茶褐色土、下層が明茶褐色土を基調とし、ローム粒子・ローム小ブロックを含む。柱穴：貯穴Bの北側に位置するP1が主柱穴と思われる。深さ73 cm。赤色砂利層：貯蔵穴Aの東側で確認できた。層厚は6 cm。入口施設：P2が入口梯子穴と思われる。深さ25 cm。

[覆 土] 18層に分層できた。

[遺 物] 埴・高坏・壺・甕形土器が出土した。

[時 期] 古墳時代前期。



第33図 558号住居跡 (1/60)



第34図 558号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/8)

遺物 (第35図、第15表)

[土器] (第35図、第15表)

1は坩形土器、3は高坏形土器、4～12は壺形土器、2・13～17は甕形土器である。なお、523 Y出土の18は甕形土器である。

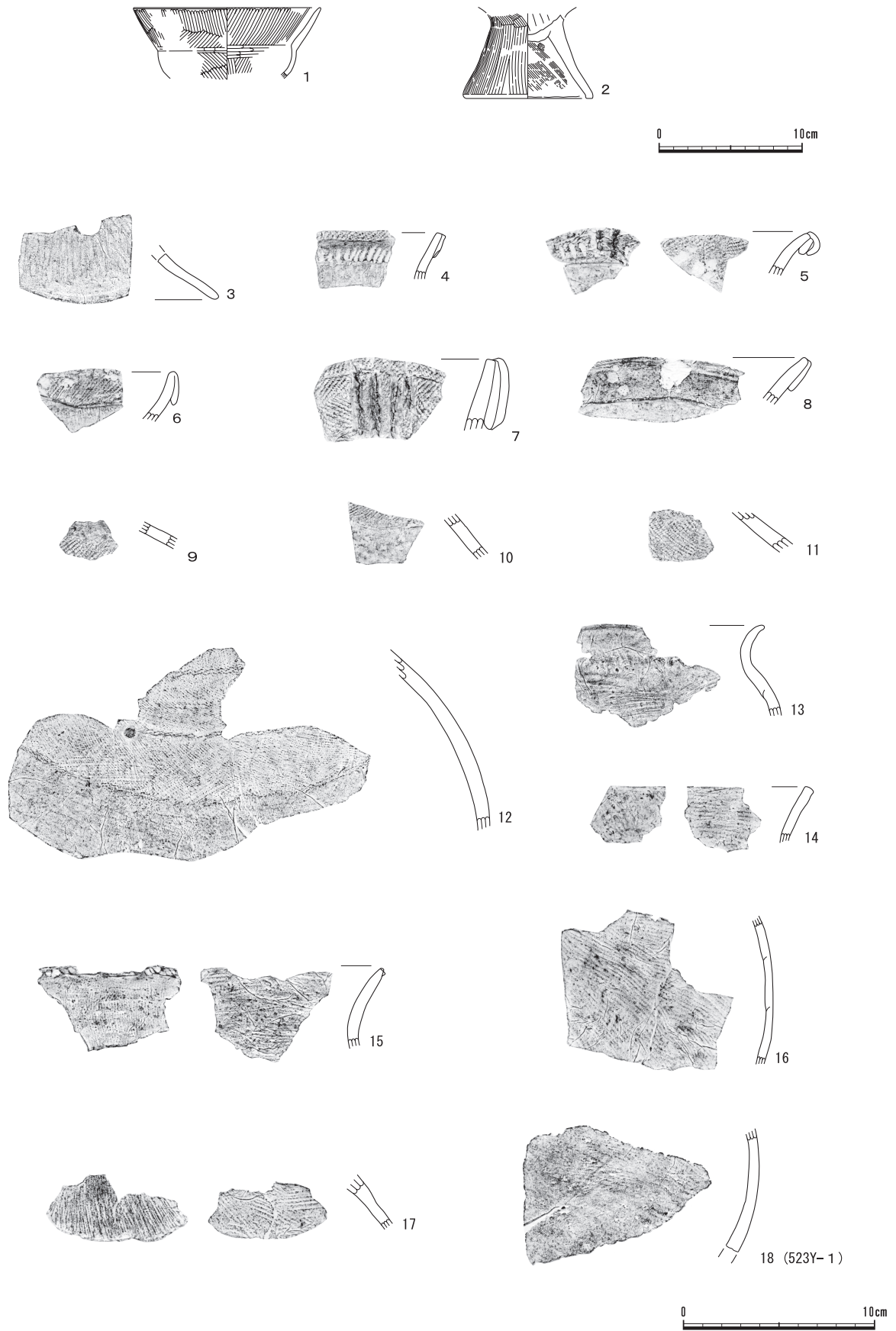
559号住居跡

遺構 (第36・37図)

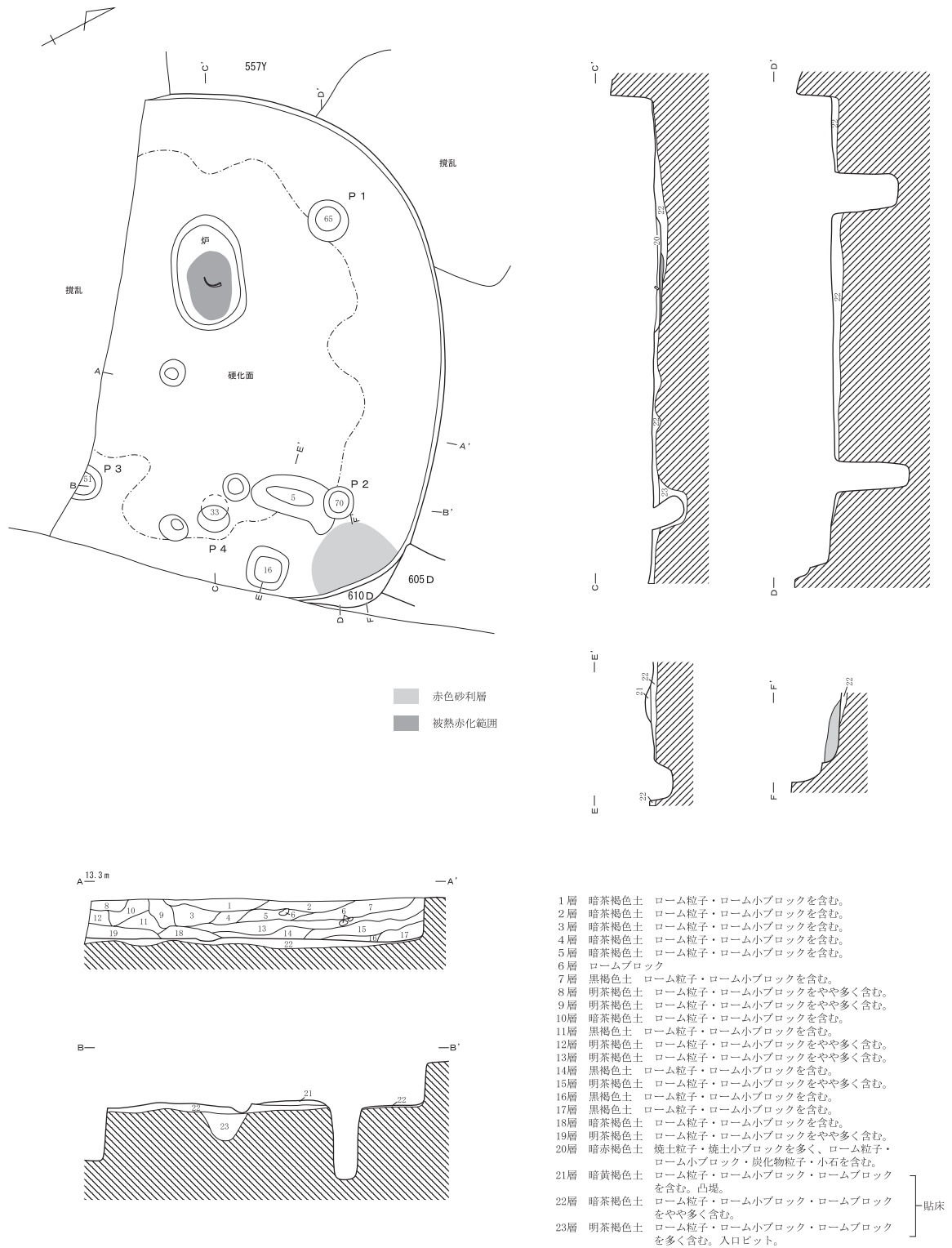
[位置] (B・C-2・3) グリッド。

[検出状況] 南半分は攪乱を受けており不明である。605・610 Dに切られる。

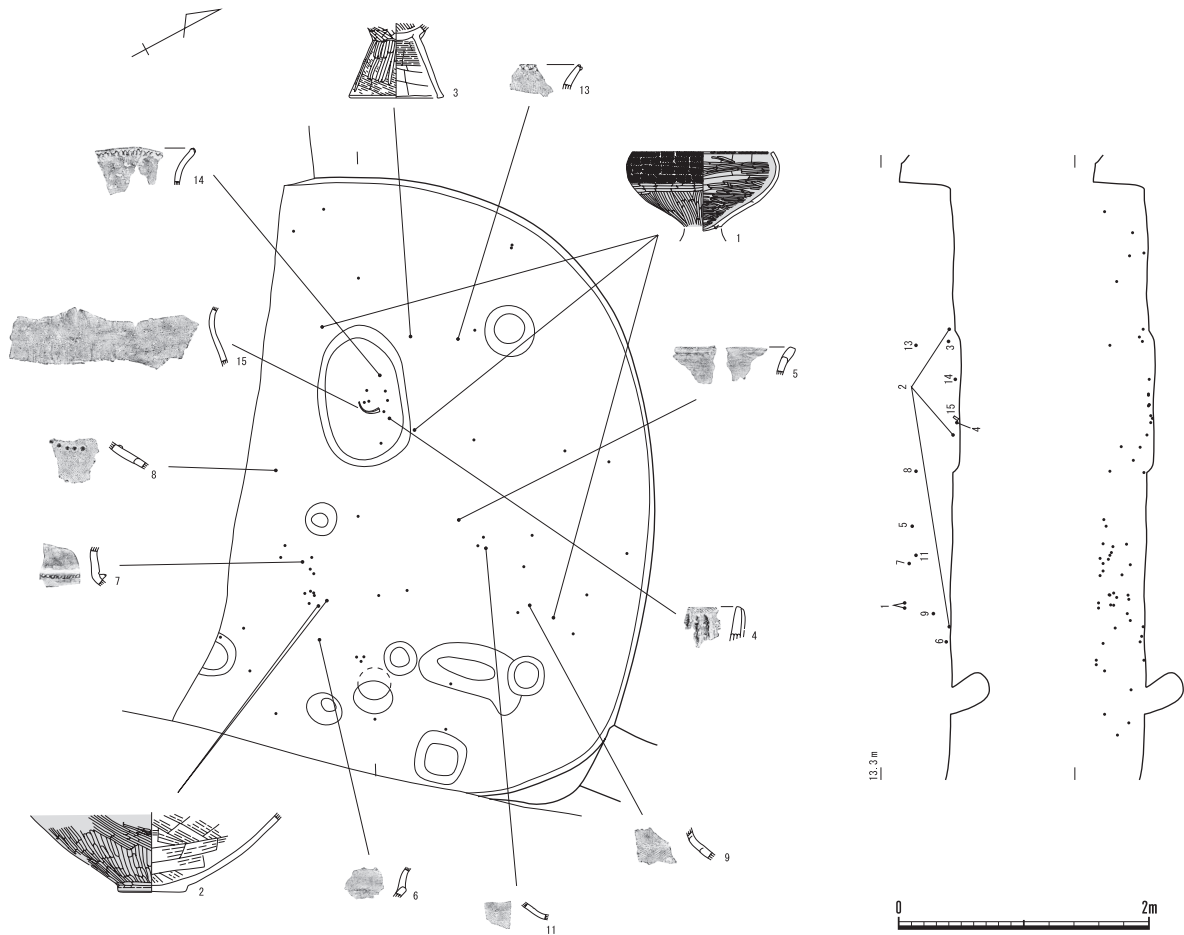
[構造] 平面形：隅丸方形か。規模：長軸4.9m／短軸不明／遺構確認面からの深さ40～45cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-65°-W。壁溝：検出されなかった。床面：壁より0.7m程内側に硬化した面が確認できた。炉：住居中央よりやや北西に偏って位置する地床炉である。112×70cmの楕円形を呈し、4cm程の掘り込みを持つ。中央付近には1/3程の甕の頸部が埋められており、その周辺は範囲67×43cm・層厚3cmで被熱赤化していた。貯蔵穴：南東壁の東コーナーよりに位置する。40×40cmの隅丸方形を呈し、深さ16cm。覆土はローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、赤色砂粒を含む明茶褐色土を基調とする。北西側30cm程離れた所に高さ5cmの凸堤が確認できた。柱穴：主柱穴は4本と思われるが、検出されたのはP1～P3の3本である。深さ65・70・51cm。赤色砂利層：東コーナーから層厚10cmで検出された。最下層には小石が多く含まれていた。入口施設：P4が入口梯子穴と思われる。深さ33cm。



第35図 558号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第36図 559号住居跡 (1/60)



第37図 559号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/8)

[覆 土] 19層に分層できたが、レンズ状の堆積を示さずロームブロックも多く含まれているため、人為的に埋め戻された可能性がある。

[遺 物] 高坏・壺・甕形土器が出土した。

[時 期] 弥生時代後期後葉。

遺 物 (第38図、第16表)

[土 器] (第38図、第16表)

1は高坏形土器、2・4～11は壺形土器、3・12～17は甕形土器である。

2. ピット

今回の調査では、ピットが数本検出されているが、大部分のピットは近世以降のものと思われる。そのうちの3Pからは、壺・甕形土器の小破片が出土したため、ここでは当該期のものと取り扱った。

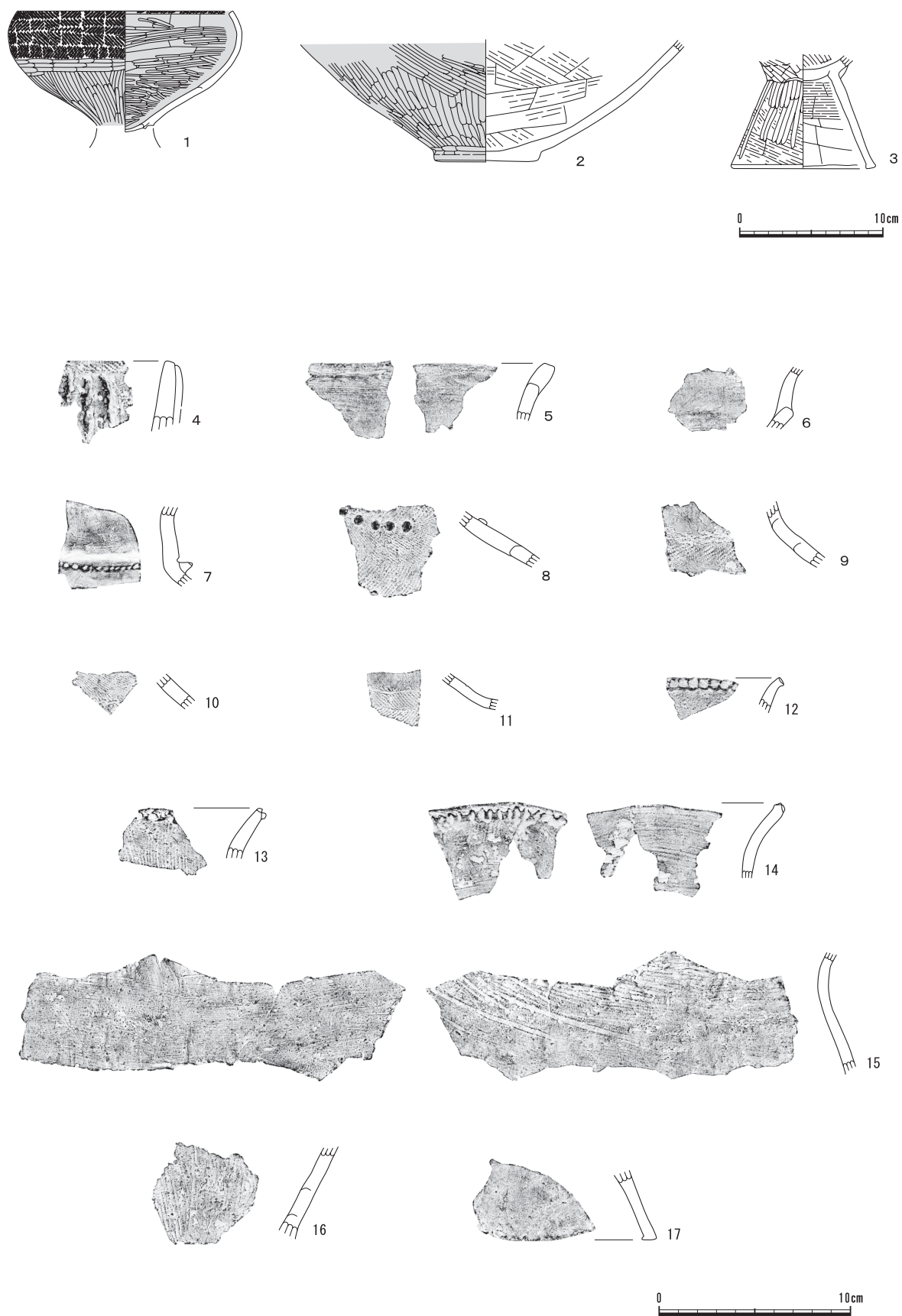
3号ピット

遺 構 (第39図)

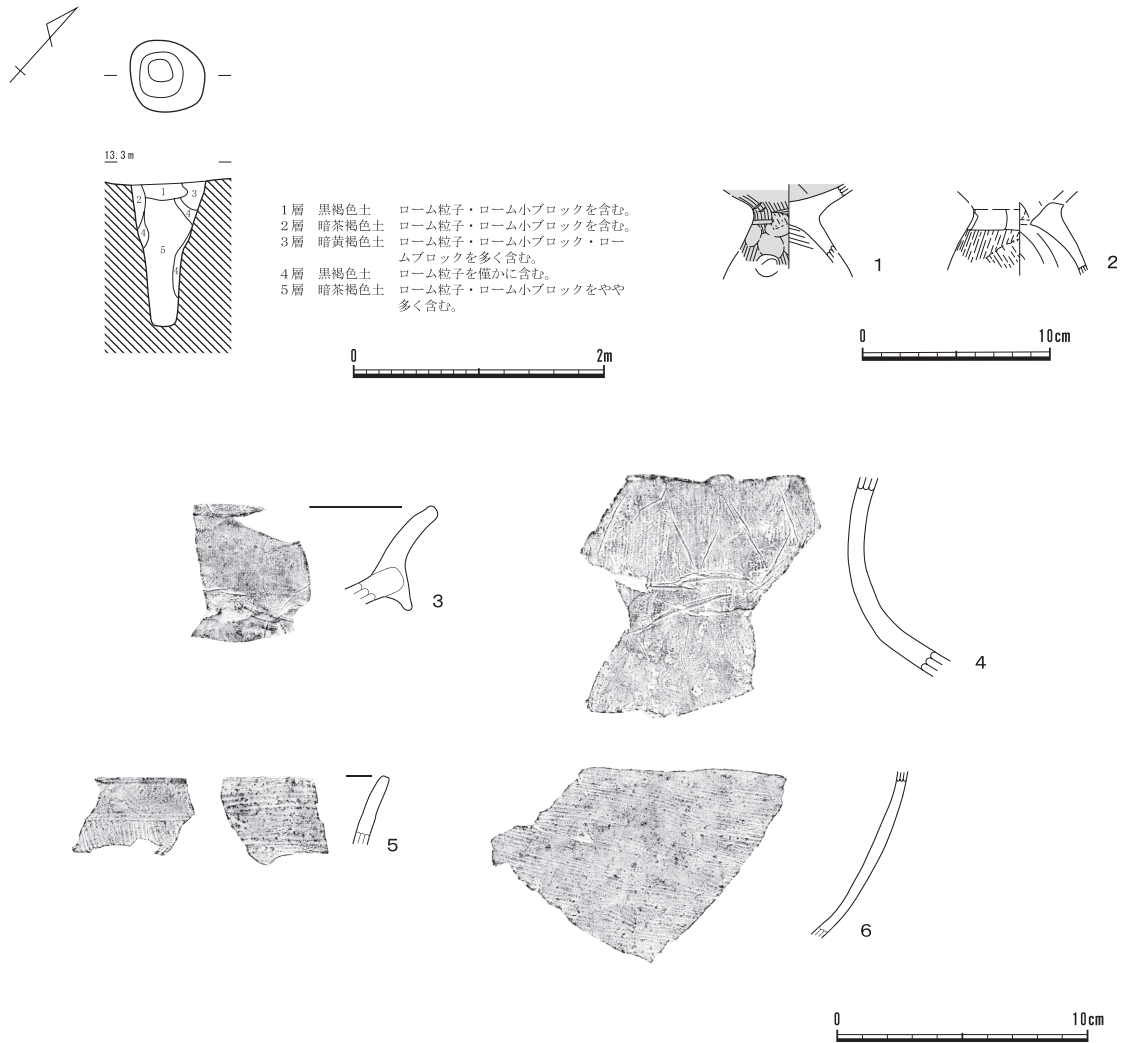
[位 置] (B-4) グリッド。

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸60cm/短軸56cm/確認面からの深さ116cm。

[覆 土] 5層に分層できた。



第38図 559号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第39図 3号ピット・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)

[遺物] 高坏・壺・甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代前期。

[所見] 1本のみを検出のため詳細は不明であるが、遺物から判断して、当該期とした。

遺物 (第39図、第17表)

[土器] (第39図、第17表)

1は高坏形土器、3・4は壺形土器、2・5・6は甕形土器である。

(4) 古墳時代後期

1. 住居跡

22号住居跡

遺構 (第40図)

[位置] (A-3・4) グリッド。

[検出状況] 南西側が調査区域外であり、さらに東・西側は攪乱を受けているため、確認できたのは東壁のごく一部のみである。553 Yを切る。

[構造] 平面形：不明。規模：長軸不明／短軸不明／確認面（553 Y床面）からの深さ39cm。壁：65°程の角度で立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：確認できなかった。床面：硬化した面は確認できなかった。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：確認できなかった。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色を基調とする。

[遺物] 土師器坏・高坏形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期（6世紀初頭）。

遺物（第41図、第18表）

土器（第41図、第18表）

1は土師器坏形土器、2・3は土師器高坏形土器である。

（5）中世以降

1. 土坑

605号土坑

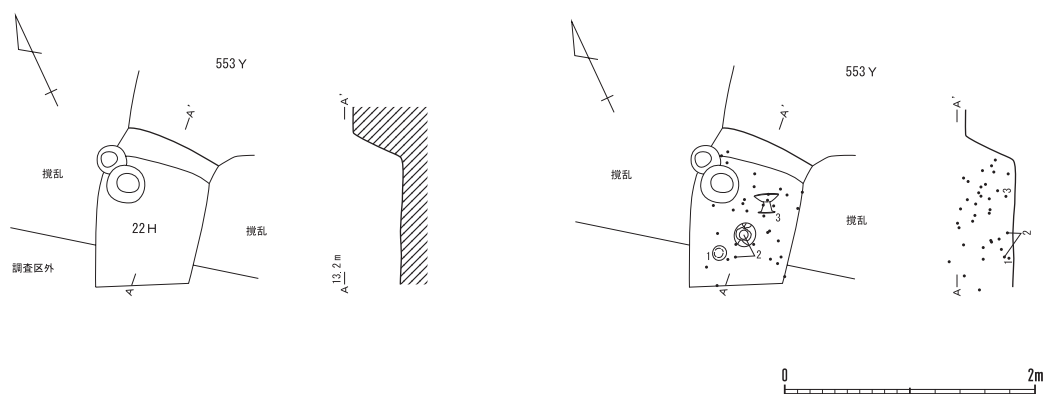
遺構（第42図）

[位置]（C-2・3）グリッド。

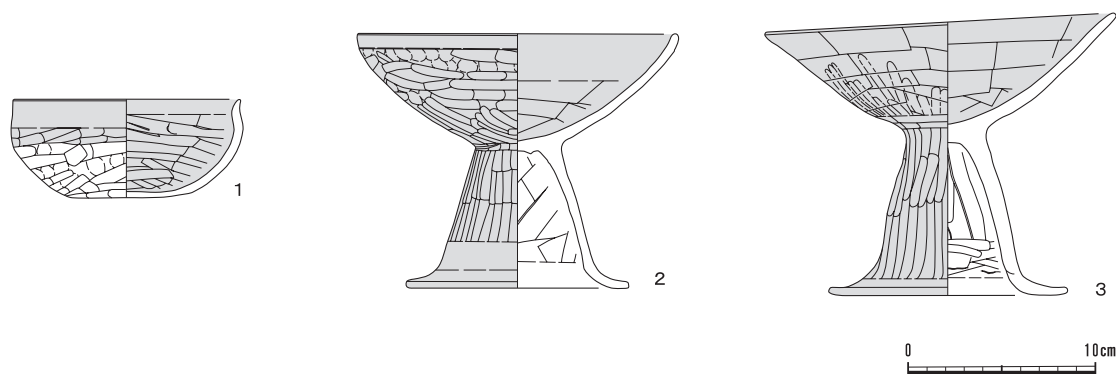
[検出状況] 東側の一部は攪乱を受けている。559 Y・610 Dを切る。

[構造] 平面形：不整な長方形。規模：長軸1.55m／短軸0.68m／深さ10cm。壁：傾斜角度68°。長軸方位：N-46°-E。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。



第40図 22号住居跡・出土状態（1／60）



第41図 22号住居跡出土遺物（1／4）

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

606号土坑

遺構 (第42図)

[位置] (C・D-2・3) グリッド。

[検出状況] 一部溝状に攪乱を受けている。

[構造] 平面形：丸みの強い隅丸長方形。規模：長軸2.74m／短軸1.30m／深さ46cm。壁：傾斜角度50～70°。長軸方位：N-51°-W。

[覆土] 5層に分層できた。

[遺物] 陶器の小破片1点が出土した。

[時期] 中世（15世紀末葉～16世紀中葉）。

遺物 (図版16-1-1)

1は陶器で、志野皿である。器高3.3cm。底部は削り出し高台。胎土の色調は白色で、全面に長石釉がかけられている。瀬戸・美濃系。時期は15世紀末葉～16世紀中葉と思われる。

607号土坑

遺構 (第42図)

[位置] (C-2) グリッド。

[構造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸0.95m／短軸0.82m／深さ15cm。壁：傾斜角度約50°。長軸方位：N-39°-E。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

608号土坑

遺構 (第42図)

[位置] (B-4) グリッド。

[検出状況] 一部溝状に攪乱を受けている。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸1.85m／短軸1.30m／深さ20cm。壁：傾斜角度62°。長軸方位：N-54°-W。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む黒褐色土を基調とする。

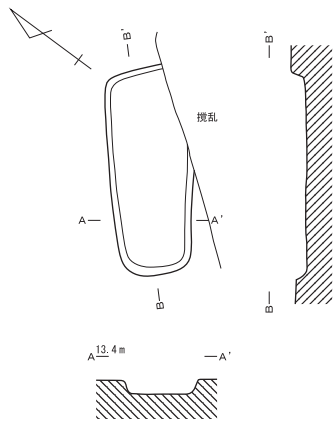
[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

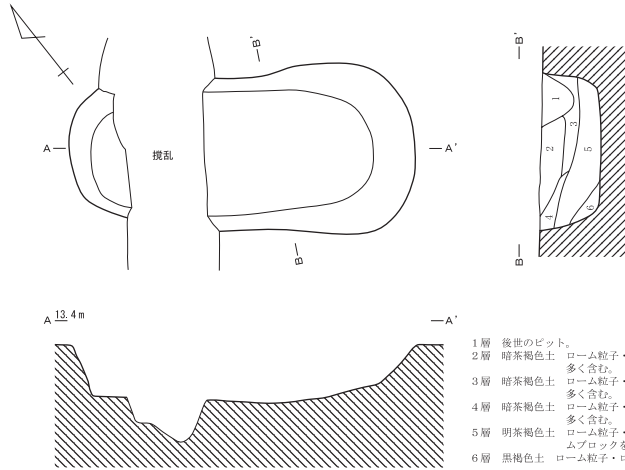
609号土坑

遺構 (第42図)

[位置] (B・C-2) グリッド。

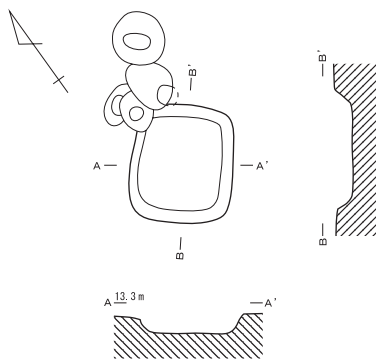


605号土坑

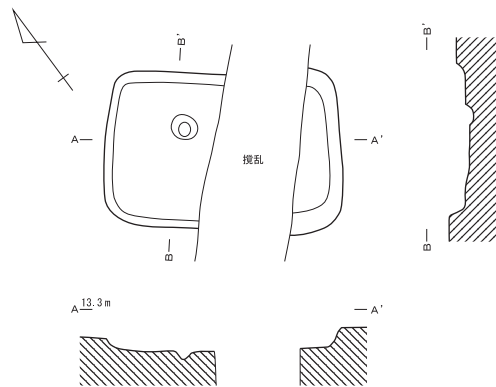


606号土坑

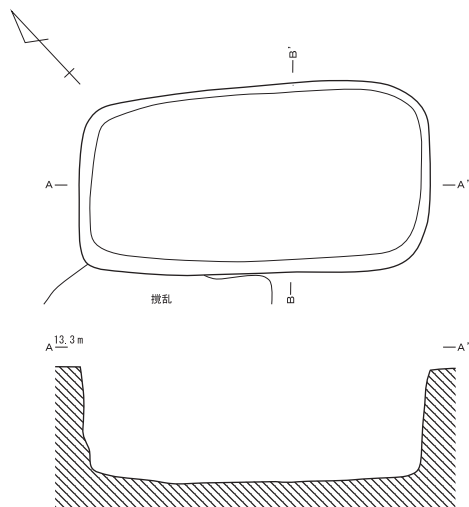
- 1層 後世のピット
- 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 3層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 4層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 5層 明茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 6層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。



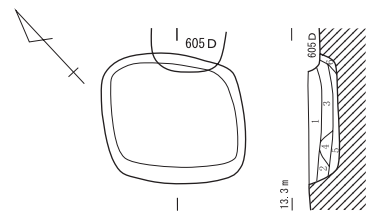
607号土坑



608号土坑



609号土坑



- 1層 黒色土 ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 2層 黒色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 3層 黒色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 5層 黒色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 6層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

610号土坑



[構造] 平面形：長方形。規模：長軸2.80m／短軸1.50m／深さ93cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N－46°－W。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

610号土坑

遺構 (第42図)

[位置] (C－3) グリッド。

[検出状況] 559 Yを切り、605 Dに切られる。

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸1.12m／短軸1.04m／深さ25cm。壁：傾斜角度約60°。長軸方位：N－47°－W。

[覆土] 6層に分層できた。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

2. 溝跡

48号溝跡

遺構 (第43図)

[位置] (B～D－3・4) グリッド。

[検出状況] 554 Y・612 Dを切る。部分的に攪乱を受けている。

[構造] 規模：調査区内での全長は13.75m。溝幅は東側では細く、上幅40cm・下幅28cm・確認面からの深さ11cm。中程では、上幅78cm・下幅64cm・確認面からの深さ11cm。西側では上幅105cm・下幅87cm・確認面からの深さ15cm。走向方位：N－45°－E。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 磁器・土器の破片が出土した。

[時期] 近世(18世紀代)。

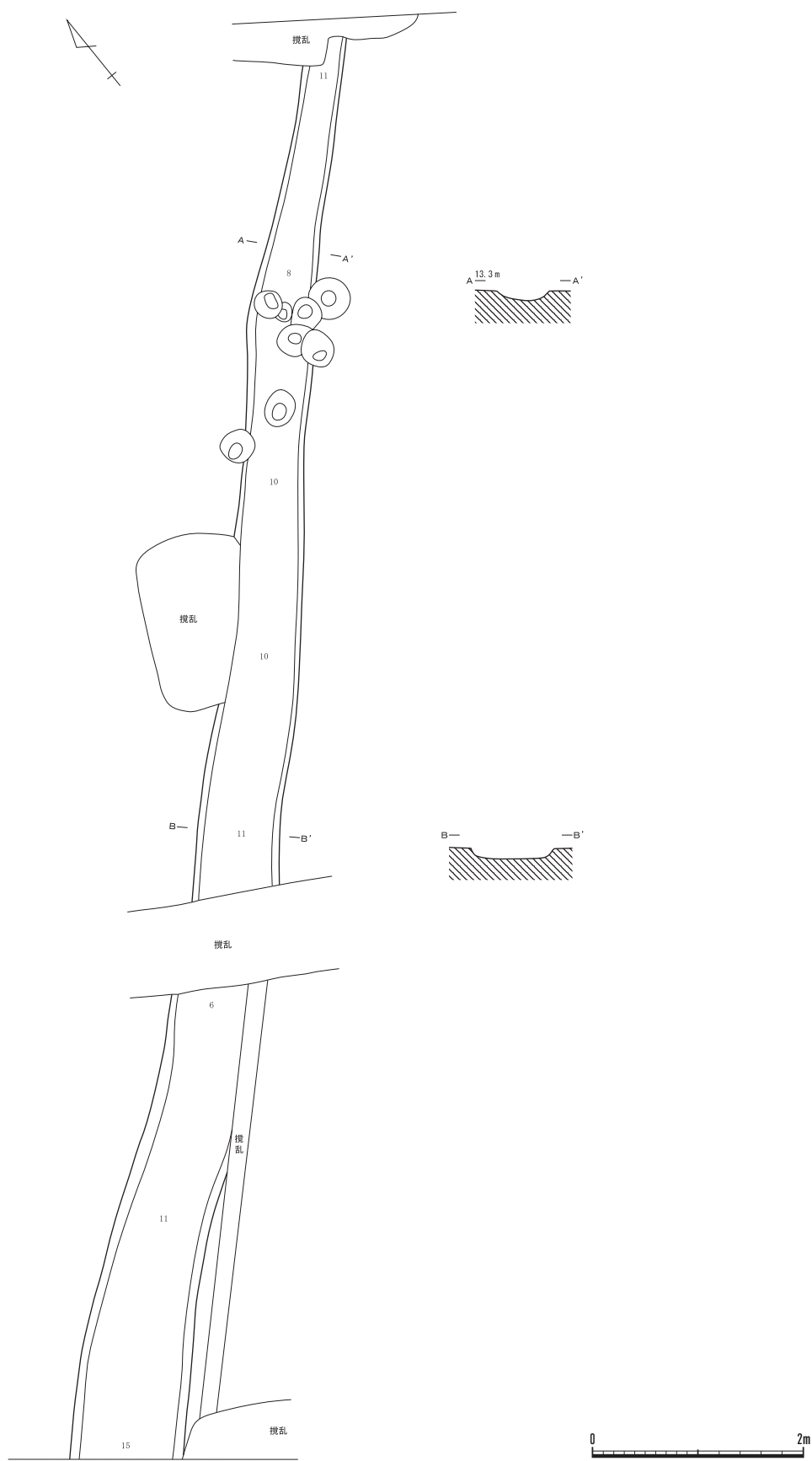
遺物 (第16－1図1・2)

1は磁器で、染付碗の底部破片である。現器高は1.8cm、高台の高さは6.0mm。胎土の色調は灰白色で、釉薬は透明釉。外面に文様あり。高台に二重圏線がまわる。高台内は福の異体字か。産地は肥前系と思われる、時期は18世紀代。

2は土器(焙烙)で、焙烙の底部小破片である。胎土の色調は白色で、表面は暗茶褐色である。産地は在地系と思われるが、時期は不詳である。

3. ピット

今回の調査では、ピットが数本検出されている。すべてのピットの時期の比定は困難であるが、3Pを除き、中世以降のものと思われる。ここでは、そのうちの1・2・4～6Pについて、以下にまとめることにする。



第43図 48号溝跡 (1/60)

1号ピット

遺 構 (第20図)

[位 置] (C-4) グリッド。

[検出状況] 半分は調査区域外である。

[構 造] 平面形：円形か。規模：長軸38cm／短軸不明／深さ67cm。

[遺 物] 陶器の小破片1点、銭貨1点が出土した。

[時 期] 近世(17世紀)。

遺 物 (図版16-2、第44図2)

1は陶器で、蛇の目皿の小破片と思われる。胎土の色調は灰白色で、釉薬は外面は透明釉、内面に緑色の釉である。産地は唐津と思われ、時期は17世紀である。

2は銭貨(寛永通宝)である。外径2.4cm・重さ1.4g。遺存度は50%である。

2号ピット

遺 構 (第20図)

[位 置] (C-2) グリッド。

[検出状況] 北東側は他のピットと重複している。

[構 造] 平面形：隅丸方形か。規模：長軸42cm／短軸不明／深さ36cm。

[覆 土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

[遺 物] 図示できるものはなかった。

[時 期] 覆土の観察から近世以降と考えられる。

4号ピット

遺 構 (第20図)

[位 置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 559 Yを切る。

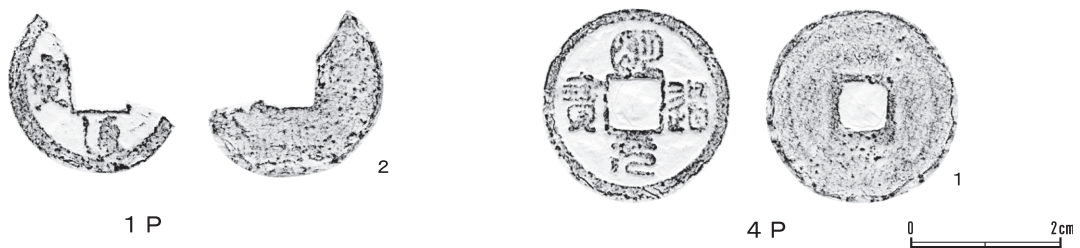
[構 造] 平面形：円形。規模：径26cm／559 Y床面からの深さ16cm。

[覆 土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

[遺 物] 銭貨(明道元宝)1点が出土した。

[時 期] 中世。

遺 物 (第44図1)



第44図 1号・4号ピット出土銭貨(1/1)

1は銭貨で、明道元宝である。外径2.5cm・重さ3.2g。広郭篆書。初鑄1032年。

(6) 遺構外出土遺物

ここでは、表土および攪乱中から出土した遺物に加えて、混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱う。今回の遺構外出土遺物は、旧石器時代の石器、縄文時代の遺物（石器・土器）、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土器、平安時代の土器、近世以降の遺物に分類ができた。

1. 旧石器時代の遺物（第45図1）

旧石器時代の遺物としては、石器1点が出土した。

[石器]（第45図1、第19表）

1は不規則剥離のある剥片である。長さ52.1mm・幅27.6mm・厚さ8.6mm・重量11.0g。石材はチャート。558Yからの出土である。

2. 縄文時代の遺物（第45図2～36）

縄文時代の遺構に伴わない縄文時代の遺物は、石器1点と土器96点が出土している。土器の内訳は早期撚糸文系7点、前期羽状縄文系24点、前期諸磯式12点、前期末～中期初頭11点、中期加曾利E式24点、後期5点、時期不明13点であった。本調査地点では全体に出土数が少ないながら、西原大塚遺跡ではあまり例の無い早期撚糸文系の土器が出土し、前期の土器も小破片ながらやや多く見られた。

[石器]（第45図2、第19表）

2は打製石斧である。基部は欠損している。長さ73.7mm・幅52.2mm・厚さ15.7mm・重量81.8g。石材はホルンフェルス。606Dへの混入品として出土した。

[土器]（第45図3～36、第20表）

3～5は早期撚糸文系土器の破片である。3・4は文様や胎土の特徴から同一個体の可能性がある。

6～12は前期羽状縄文系土器の破片で、6は竹管による平行沈線、10は連続爪形が施文され、他は縄文施文部分の破片である。黒浜式であろう。

13～20は前期の諸磯式土器で、19が平行沈線文の胴部片、20が底部片でその他は結節浮線文を施文する破片である。

21～24は小破片で型式を特定するには至らないものが多いが、前期末から中期初頭の所産と思われる土器で21～23は細い平行沈線文の土器。24は地文に縄文を持つ細い浮線文の土器。

25～32は中期の土器片で、25は五領ヶ台式、26～31は加曾利E式土器、32は連弧文土器である。

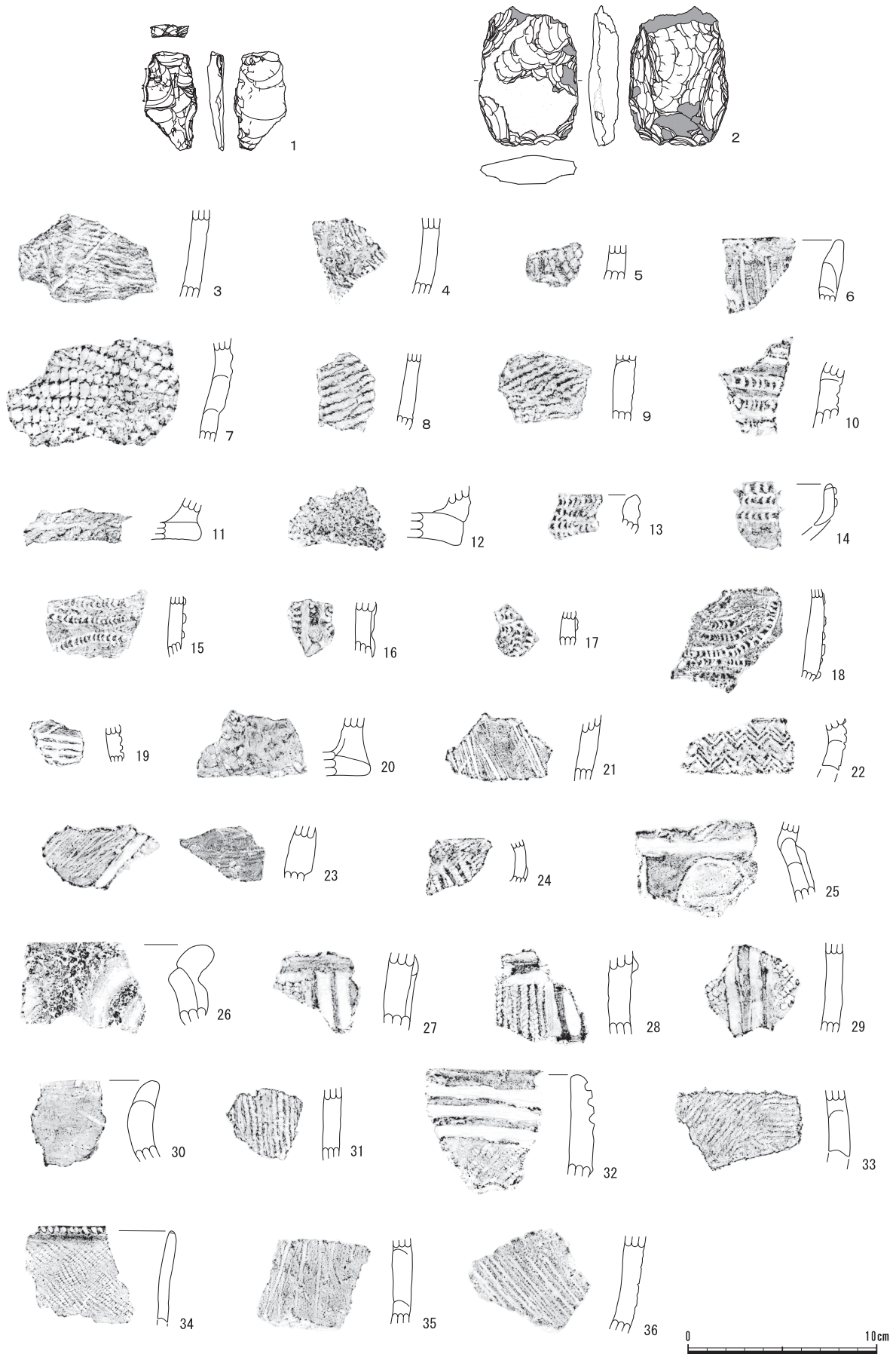
33は縄文のみの土器片で中期後葉から後期前葉の所産と思われる。型式は不明。

34～36は後期の土器で、34は加曾利B式土器の口縁部片。35・36は粗製土器である。

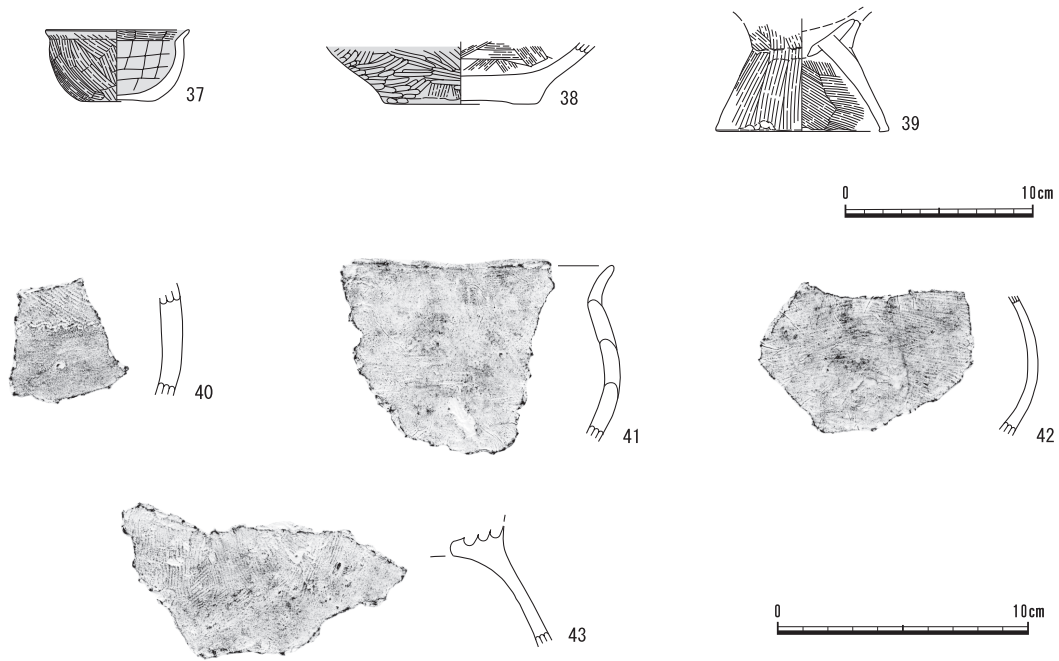
3. 弥生時代後期～古墳時代前期の土器（第46図37～43）

[土器]（第46図37～43、第21表）

37は小型碗形土器、38・40・42は壺形土器、39・41・43は台付甕形土器である。



第45図 遺構外出土遺物1 (1/3)



第46図 遺構外出土遺物2 (1/4・1/3)

4. 古墳時代後期の土器 (図版17-44~46)

[土器] (図版17-44~46、第21表)

44・45は土師器坏形土器、46は土師器甕形土器である。

5. 平安時代の土器 (図版17-47)

[土器] (図版17-47、第21表)

47は須恵器坏土器である。

6. 近世以降の遺物 (図版17-48~50)

[陶磁器] (図版17-48~49、第21表)

48は磁器の小破片である。色調は外面が青白色、内面が白色。出土位置は557 Y覆土中である。肥前系と思われるが、時期は不詳である。

49は陶器の小破片である。色調は暗茶褐色を基調とする。出土位置は遺構外である。産地・時期ともに不明である。

[その他] (図版17-50)

50は鉄滓 (スラッグ) である。重さは56.5 g。表面は酸化し、茶褐色に錆付いている。

第2節 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第23図1	壺	—	—	—	肩部に文様帯あり／文様は横位のR.L単節斜縄文／文様部直下に赤彩が施される	胎土は暗茶褐色	茶褐色粒子を含む	内面：ヘラナデ、指頭押捺による指紋が観察される／外面：文様部以外は横位のヘラ磨き調整	覆土中	肩部小破片
第23図2	壺	(2.2)	—	—	底部は平底／外面は赤彩か	胎土は淡茶褐色	石英・角閃石・砂粒・小石を含む	内面：ヘラナデ／外面：縦方向のヘラ磨き調整	覆土中	底部小破片
第23図3	甗	—	—	—	ハケ甗／正確な部位は不明	明茶褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・小石を含む	内面：ハケ目調整後、斜方向のヘラ磨き調整／外面：斜方向のハケ目調整	北コーナーほぼ床面上	胴部小破片
第23図4	甗	—	—	—	ハケ甗	内面：暗茶褐色／外面：黒褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：粗いハケ目調整（ヘラ削りか）後、部分的に粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	赤砂利層直上	胴部中位～下半破片

(単位：cm)

第10表 552号住居跡出土遺物一覧

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第25図1	埴	(2.7)	—	—	口縁部は外傾する／頸部は「く」の字状に屈曲するものと思われる／内外面赤彩か	淡赤褐色を基調	黄褐色粒子・角閃石・砂粒を含む	内外面：横ナデ／器面は摩耗しており遺存状態は悪い	覆土中	口縁部小破片
第25図2	甗	—	—	—	ハケ甗／口唇部に刻み目なし／口縁部直下を欠損するが、口縁部は「く」の字口縁を呈するものと思われる／口縁部は外反する	暗茶褐色	砂粒を僅かに含む	内面：ハケ目調整後横ナデ／外面：横ナデ	覆土中	口縁部小破片
第25図3	甗	—	—	—	ハケ甗／頸部は屈曲する	淡茶褐色を基調／内部黒色のサンドイッチ構造	雲母・砂粒・小石を僅かに含む	内面：ナデ／外面：ハケ目調整	覆土中	頸部～胴部上半小破片

(単位：cm)

第11表 553号住居跡出土遺物一覧

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第27図1	高坏	(3.2)	—	(11.8)	「ハ」の字状の器形／裾端部は平坦／外面は赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・片岩を含む	内面：ハケ目調整／外面：ヘラ磨き調整	住居中央よりやや北寄りの覆土中（床土7cm）	脚台部の裾部20%
第27図2	壺	(1.8)	(6.7)	—	平底／底部には木葉痕あり	暗茶褐色	黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面：ハケ目調整／外面：粗いヘラ磨き調整	住居中央より西寄りの覆土中（床土5cm）	底部40%
第27図3	甗	—	—	—	ハケ甗／胴部上半から頸部への移行はややくびれをもつ	明茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：頸部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整	住居中央の覆土中（床土5cm）	頸部～胴部上半破片
第27図4	甗	—	—	—	ハケ甗か	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整	住居中央よりやや北寄りのほぼ床面上	胴部破片

(単位：cm)

第12表 554号住居跡出土遺物一覧

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第29図1	壺	—	—	—	胴部小破片／正確な部位は不明／外面赤彩	内部：灰褐色／内面：暗褐色	黄褐色粒子・暗茶褐色粒子を含む	内面：摩耗が著しいが、ヘラナデと思われる／外面：縦方向のヘラ磨き調整	貯蔵穴上層	胴部小破片

(単位：cm)

第13表 556号住居跡出土遺物一覧

第4章 西原大塚遺跡第159地点の調査

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第31図1	高坏	(8.4)	—	—	坏部下半に稜をもつ／脚台部は長脚タイプと思われる／脚台部内面を除き赤彩／胎土は入間系土師器に類似	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を含む	内外面：脚台部内面を除き、ていねいにヘラ磨き調整／脚台部内面はヘラ削り	住居中央よりやや東寄りの覆土中(床上5～10cm)	坏部～脚台部 40%／口縁部・脚台部上半以下を欠損
第31図2	壺	(8.3)	—	(5.5)	最大径は胴部中位にもつ／底部は1.7cmの幅で周辺が高くなっており、中央が窪んでいる／外面は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒・小石をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：胴部上半から中位はハケ目調整、胴部下半は粗いヘラ磨き調整	住居中央よりやや東寄りの覆土中(床上12cm)	胴部上半～底部 70%
第31図3	甗	(12.5)	11.5	—	小型台付甗／「く」の字口縁／口唇部には刻みなし／最大径は胴部下半にもつ／胎土は入間系土師器に類似	胎土は暗赤褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：ハケ目調整／外面：ハケ目調整、口縁部はその後軽い横ナデ	住居中央付近の覆土中(床上2～12cm)	脚台部を除き 60%
第31図4	甗	(11.8)	9.5	—	小型甗／口縁部は直立気味にやや外反する／口唇部には刻みなし／最大径は胴部下半にもつ／胴部は卵形／輪積痕が顕著に残る	淡茶褐色	黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いハケ目調整	住居中央付近の覆土中(床上7～16cm)	口縁部～胴部下半分 60%
第31図5	高坏	—	—	—	脚台部の裾部は大きく外反する／内外面赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒・茶褐色粒子を僅かに含む	内外面：ハケ目調整後、裾部は横ナデ	住居東コーナー付近の床面及び覆土中(床上5cm)	脚台部の裾部破片
第31図6	壺	—	—	—	文様は単節斜縄文を上下羽状に施す／内面赤彩が	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：ヘラナデ／外面：頸部無文部は縦方向のヘラ磨き調整	住居中央よりやや南寄りの覆土中(床上16cm)	頸部～胴部上半小破片
第31図7	甗	(6.7)	—	—	小型甗になるものか／複合口縁を呈する	淡茶褐色	砂粒・小石をやや多く含む	内面：指頭押捺による成形痕が残る／外面：複合部は指頭押捺による成形、以下はハケ目調整／成形痕には指紋が観察できる	住居中央よりやや南寄りの覆土中(床上17cm)	口縁部～胴部上半破片
第31図8	甗	(7.0)	—	—	口唇部には刻み目なし／頸部は「く」の字状に屈曲する／外面は黒く燥けている	淡茶褐色	茶褐色粒子・小石をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は目の粗いハケ目調整	住居中央よりやや北寄りの覆土中(床上9cm)	口縁部～胴部上半破片
第31図9	甗	—	—	—	口縁部は途中「く」の字状に屈曲する／いわゆるS字甗か	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整か／外面：横ナデか	覆土中	口縁部小破片
第31図10	甗	—	—	—	口唇部には刻み目なし／頸部は「く」の字状に屈曲する	暗茶褐色を基調とする	黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面：口縁部はハケ目調整後、横ナデ、以下はヘラナデ／外面：ハケ目調整、口縁部はその後横ナデ	覆土中	口縁部～胴部上半破片
第31図11	甗	(4.8)	—	—	口唇部には刻み目なし／頸部は「く」の字状に屈曲する	内面：淡茶褐色／外面：黒色	黄褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部はハケ目調整後、横ナデ、以下はヘラ磨き調整	住居中央付近の覆土中(床上4・14cm)	口縁部～胴部上半破片
第31図12	甗	—	—	—	壺か／頸部は「く」の字状に屈曲する／内外面赤彩か	胎土は暗橙色を基調	橙色粒子・茶褐色粒子を含む	内面：頸部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整、頸部はその後横ナデ	覆土中	頸部～胴部上半
第32図13	甗	(9.5)	—	—	頸部は「く」の字状に屈曲する／外面は黒く燥けている	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子を含み、角閃石を僅かに含む	内面：頸部はハケ目調整後横ナデ、胴部はヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整／外面頸部に未調整部分があり、指頭による押捺痕が観察できる	住居中央付近の覆土中(床上6～11cm)	頸部～胴部中位破片
第32図14	甗	(12.5)	—	—	胴部下半に脚台部への移行カーブがあるため台付甗と思われる	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	住居中央よりやや東寄りの床面上	胴部中位～胴部下半 20%以下
第32図15	甗	(6.8)	—	—	胴部破片／最大径は胴部中位にもつ	暗橙色	砂粒をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：斜方向のハケ目調整	住居中央よりやや東寄りの覆土中(床上13～16cm)	胴部中位破片
第32図16	甗	(4.2)	—	—	台付甗／脚台部の剥離痕が残る	茶褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面：ハケ目調整／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	住居中央よりやや東寄りの覆土中(床上6～9cm)	胴部下半破片

(単位：cm)

第14表 557号住居跡出土遺物一覧

第2節 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第35図1	埴	(5.0)	(13.0)	—	口縁部はやや内湾気味に外傾する／体部は丸みをもつ	淡黄褐色	砂粒を僅かに含む／胎土は精練されている	内外面：ていねいに細かいへら磨き調整	貯蔵穴B付近の覆土中(床上29・30cm)	口縁部～体部中位20%以下
第35図2	甗	(5.9)	—	(9.0)	「ハ」の字状の器形／裾端部は平坦／胎土は入間系土師器に類似	胎土は暗赤褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：胴部下半はへら削り、脚台部はハケ目調整／外面：ハケ目調整	P1上の覆土中(床上22cm)	脚台部のみ100%
第35図3	高坏	(3.0)	—	—	脚台部破片／裾部は大きく開く／円形の穿孔あり	淡橙色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子を含む	内面：横ナデ／外面：縦方向のへら磨き調整、裾部は軽い横ナデ後へら磨き調整	貯蔵穴Bのやや東側床面上	脚台部破片
第35図4	壺	—	—	—	複合口縁／口唇端部にLR単節斜縄文がまわる／複合部下端に刻み目／内外面赤彩か	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒を僅かに含む	内外面：外面複合部を除きへら磨き調整	南西壁際の覆土中(床上12cm)	口縁部小破片
第35図5	壺	—	—	—	幅狭の複合口縁／内面及び口唇端部にLR単節斜縄文／複合部下端にハケ状工具による刻み目／外面複合部直下に赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子を含む	外面：複合部直下に縦方向のへら磨き調整	覆土中	口縁部破片
第35図6	壺	—	—	—	幅狭の複合口縁／外面複合部に文様あり／文様はLR単節斜縄文／外面複合部を除き内外面赤彩	胎土は淡橙色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面：横方向のへら磨き調整／外面：縦方向のハケ目調整後へら磨き調整	住居中央やや南東寄りの床面上	口縁部小破片
第35図7	壺	(3.8)	—	—	幅広の複合口縁／外面複合部に文様あり／文様は単節斜縄文を上下羽状／棒状貼付文は4本／口唇端部にLR単節斜縄文がまわる	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子を多く含む	内面：横方向のへら磨き調整	住居中央付近の覆土中(床上5cm)	口縁部破片
第35図8	壺	(2.7)	—	—	幅狭の複合口縁／内外面赤彩か	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子を多く、砂粒を僅かに含む	内面：横方向のへら磨き調整／外面：横方向のハケ目調整	覆土中	口縁部破片
第35図9	壺	—	—	—	胴部上半に文様あり／文様はLR単節斜縄文の直下に1条の細線が施文	暗茶褐色を基調とする	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：へらナデ／外面：文様直下にへら磨き調整	覆土中	胴部上半小破片
第35図10	壺	—	—	—	胴部上半に文様あり／文様はLR単節斜縄文	淡黄褐色	黄褐色粒子をやや多く含む	内面：ハケ目調整か	覆土中	胴部上半小破片
第35図11	壺	—	—	—	胴部上半に文様あり／文様はLR単節斜縄文が施文／外面無文部は赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面：へらナデ／外面：無文部は横方向のへら磨き調整	覆土中	胴部上半小破片
第35図12	壺	(9.5)	—	—	胴部上半に文様帯あり／単節斜縄文はすべてRL縄文／斜縄文との境には1条のS字状結節文がまわり、3段構成／円形貼付文が1つ残存／外面無文部は赤彩	胎土は黄褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：ハケ目調整／外面：無文部は横方向のへら磨き調整／文様部の下地にはハケ目調整が施されている	貯蔵穴Aの東側の壁際覆土中(床上13～20cm)	胴部上半～中位破片
第35図13	甗	(4.6)	—	—	小型甗／口唇部に刻み目なし／口縁部は外反する	暗赤褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整／外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整	P1上の覆土中(床上8cm)	口縁部～胴部上半破片
第35図14	甗	—	—	—	口縁部小破片／口唇部には刻み目なし	内面：淡褐色／外面：黒色	黄褐色粒子をやや多く、砂粒・小石を僅かに含む	内面：横方向のハケ目調整／外面：縦方向のハケ目調整後軽い横ナデ	住居南コーナー付近のほぼ床面上	口縁部小破片
第35図15	甗	(4.0)	—	—	口唇部に刻み目あり	全体的に黒色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：横方向のハケ目調整／外面：縦方向のハケ目調整	覆土中	口縁部破片
第35図16	甗	—	—	—	胴部破片／外面は黒く燻けている	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子をやや多く、砂粒・小石を僅かに含む	内面：へら磨き調整／外面：ハケ目調整	覆土中	胴部中位破片
第35図17	甗	(3.0)	—	—	台付甗／「ハ」の字状を呈する脚台部破片	暗赤褐色を基調	砂粒を含む	内外面：ハケ目調整	住居南コーナーほぼ床面上	脚台部破片
第35図18	甗	—	—	—	外面は赤彩／本資料は第124地点出土の523Y-1	内面：暗橙色／外面：黒褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面：へらナデ／外面：ハケ目調整後へら磨き調整	覆土中	胴部小破片

(単位：cm)

第15表 558号住居跡出土遺物一覧

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第38図1	高坏	(8.3)	(15.0)	—	口縁部は内湾する／最大径は体部上半／外面口縁部に5段の単節斜縄文を施文し、上下羽状構成を基本とする／口唇部にはLR単節斜縄文がまわる／円形赤彩文あり／内面及び外面無文部は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：へら磨き調整／外面：無文部はへら磨き調整	住居中央付近から東壁にかけての床面上から散在的	脚台部を除き70%
第38図2	壺	(8.4)	—	(7.2)	底部は平底／外面は赤彩	胎土は淡黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子をやや多く、砂粒・小石を含む	内面：粗いハケ目調整／外面：へら磨き調整	住居中央やや南東寄りの覆土中(床上35・36cm)	胴部下半～底部40%
第38図3	甗	(7.9)	—	(10.0)	台付甗／脚台部は「ハ」の字状／裾端部は平坦	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・白色砂粒を含む	内面：胴部下半はへら磨き調整、脚台部はハケ目調整／外面：ハケ目調整後粗いへら磨き調整	P1上のほぼ床面レベル	脚台部のみ100%
第38図4	壺	—	—	—	複合口縁／3本の棒状貼付文あり／口唇部にはRL単節斜縄文がまわる／内面赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：へら磨き調整	炉跡直上	口縁部小破片
第38図5	壺	—	—	—	口縁部は内湾気味に外傾する／口唇部は平坦／内外面赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒をやや多く含む	内面：ハケ目調整／外面：口唇部直下は横方向のハケ目調整、以下は粗いへら磨き調整か	住居中央付近の覆土中(床上30cm)	口縁部小破片
第38図6	壺	—	—	—	有段口縁壺／口縁部は外反する／有段部分の輪積痕が観察できる	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子をやや多く、砂粒を僅かに含む	内外面：ハケ目調整後粗いへら磨き調整	住居中央やや東寄りのほぼ床面上	口縁部小破片
第38図7	壺	—	—	—	頸部から肩部への屈曲部分に凸帯がまわる／凸帯は断面が三角形で上端に刻みを有する／内外面赤彩か	明茶褐色を基調／内部淡茶褐色のサンドイッチ構造	茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：頸部は斜方向のへら磨き調整、以下は横方向のへら磨き調整／外面：頸部は縦方向のへら磨き調整	住居中央付近の覆土中(床上31cm)	頸部～肩部破片
第38図8	壺	—	—	—	肩部文様帯あり／文様は5段の単節斜縄文が施文され、上からLR・RL・RL・LR・LR／円形貼付文(径5mm)5個あり	暗黄褐色を基調／内部黒褐色のサンドイッチ構造	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：指頭押捺による成形痕が残り、指紋が観察できる	住居中央やや南寄りの覆土中(床上29cm)	肩部破片
第38図9	壺	—	—	—	肩部文様帯あり／文様は上端に3段の自縄結節文の下部にLR単節斜縄文が施文される／頸部の無文部及び内面は赤彩	色調は暗黄褐色を基調とする	黄褐色粒子・雲母・砂粒を含む	内面：へらナデ／外面：頸部の無文部は縦方向のへら磨き調整	住居東コーナー付近の覆土中(床上17cm)	頸部～肩部破片
第38図10	壺	—	—	—	肩部文様帯あり／文様は端末結節文を伴うRLの単節斜縄文1段が施文される	暗橙色を基調	砂粒を含む	内面：へらナデか	覆土中	肩部小破片
第38図11	壺	—	—	—	胴部上半に文様あり／文様は2段の単節斜縄文の上端に1本の細線による沈線文がまわる／単節斜縄文は2段により上下羽状構成される／頸部の無文部は赤彩か	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：へらナデか／外面：無文部は縦方向のへら磨き調整	住居中央付近の覆土中(床上28cm)から散在的	肩部小破片
第38図12	甗	—	—	—	口唇部には布目状圧痕を伴う押捺がまわる／口縁部は外反する	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内外面：へら磨き調整か	覆土中	口縁部小破片
第38図13	甗	—	—	—	口唇部には交互押捺がまわる／口縁部は外反する	淡茶褐色を基調／外面：黒色	黒色粒子をやや多く、黄褐色粒子・橙色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ／外面：ハケ目調整後横ナデ	炉跡の北側の覆土中(床上27cm)	口縁部破片
第38図14	甗	—	—	—	口唇部外面にはハケ状工具による刻み目がまわる／口縁部は外反する	暗黄褐色	黄褐色粒子・橙色粒子を含む	内外面：ハケ目調整／ハケ目調整の方向は内面が横方向、外面が口縁部は縦方向、直下は横方向	炉跡直上	口縁部破片

(単位：cm)

第16表 559号住居跡出土遺物一覧(1)

第2節 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第38図15	甗	(6.3)	—	—	炉体土器か／頸部から胴部上半への移行はゆるやかなカーブをもつ	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	内面：頸部～胴部上半は粗いハケ目調整、胴部中はヘラナデ／外面：頸部～胴部上半は斜方向のハケ目調整、胴部中は横方向のハケ目調整	炉跡内	頸部～胴部上半破片
第38図16	甗	(4.3)	—	—	台付甗／胴部下端には脚台部への移行のゆるいカーブをもつ	暗茶褐色	橙色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整	覆土中	胴部下半破片
第38図17	甗	(3.6)	—	—	台付甗／「ハ」の字状の器形／裾端部は平坦	暗黄褐色	白色微粒子・橙色粒子・砂粒を含む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整か	貼床内	脚台部破片

(単位：cm)

第16表 559号住居跡出土遺物一覧(2)

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第39図1	高坏	(4.3)	—	—	脚台部は「ハ」の字状／円形の孔が2カ所穿たれている／坏部内面及び外面は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒をやや多く、小石を含む	内面：坏部はヘラ削り、脚台部はハケ目調整／外面：縦方向のハケ目調整、指頭押擦れにより指紋が残る	覆土中	坏部～脚台部60%
第39図2	甗	(3.9)	—	—	高坏ではなく台付甗と思われる／脚台部は「ハ」の字状	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：ナデ／外面：縦方向のハケ目調整、上半部はその後ナデ	覆土中	脚台部40%
第39図3	壺	(4.0)	—	—	有段口縁壺／口縁部は外反する／剥落しているが、3本の棒状貼付文の痕跡あり	淡黄褐色／内部黒褐色のサンドイッチ構造	砂粒を含み、角閃石を僅かに含む	内外面：横ナデ	覆土中	口縁部破片
第39図4	壺	(9.0)	—	—	肩部から頸部への移行はゆるやかなカーブをもつ／内面頸部及び外面は赤彩の可能性	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く、砂粒・小石を僅かに含む	内面：頸部は軽いナデ後粗いヘラ磨き調整、以下はヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	覆土中	頸部～形部下破片
第39図5	甗	—	—	—	ハケ甗／口唇部には刻みなし／口縁部は外反する	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く、砂粒・小石を僅かに含む	内面：横方向のハケ目調整／外面：口縁部は横ナデ、以下は縦方向のハケ目調整	覆土中	口縁部小破片
第39図6	甗	(6.7)	—	—	ハケ甗	淡茶褐色を基調／内部黒色のサンドイッチ構造	黄褐色粒子をやや多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：ヘラナデ後ヘラ磨き調整／外面：横方向のハケ目調整後横方向の粗いヘラ磨き調整	覆土中	胴部下半破片

(単位：cm)

第17表 3号ピット出土遺物一覧

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第41図1	土師器 坏	5.2	12.1	6.5	口縁部は短く外反する／底部はヘラ削りにより平底気味／内面及び外面口縁部～体部上半は赤彩／いわゆる比企型坏	胎土は暗黄褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒・雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ラ磨き調整、指頭押擦れによる成形痕(指紋)が残る	床面上	ほぼ完形品
第41図2	土師器 高坏	13.5	17.0	11.8	坏部は全体的に内湾気味に広がる器形／外面口縁部直下には弱い段がまわる／脚台部は脚柱部は「ハ」の字状で、裾部は屈曲し大きく外反する／脚台部内面を除き赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：坏部は口縁部が横ナデ、以下はヘラナデ、脚台部は脚柱部がヘラ削り、裾部は横ナデ／外面：坏部は口縁部が横ナデ、以下はヘラ磨き調整、脚台部は脚柱部がヘラ削り、裾部は横ナデ、口縁部直下に指頭押擦れによる成形痕(指紋)が残る	ほぼ床面上	90%(脚台部の裾部を僅かに欠損)
第41図3	土師器 高坏	15.0	18.6	12.6	2の土器に比べ、坏部の底部付近に弱い稜が見られ、有段高坏の器形を残している／口縁部は外反する／口縁部直下には弱い段がまわる／脚台部は脚柱部は「ハ」の字状で、裾部は屈曲し大きく外反する／脚台部内面を除き赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を僅かに含む	内面：坏部は口縁部が横ナデ、以下は軽いヘラナデ後ヘラ磨き調整か、脚台部は脚柱部がヘラ削り(ひだ状)、裾部は横ナデ／外面：坏部はナデ後ヘラ磨き調整か、脚台部は脚柱部がヘラ削り後ヘラ磨き調整、裾部は横ナデ	床面上	90%(脚台部の裾部を僅かに欠損)

(単位：cm)

第18表 22号住居跡出土遺物一覧

第4章 西原大塚遺跡第159地点の調査

挿図番号	器種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	特 徴	出土位置
第45図1	不規則剥離のある剥片	チャート	52.1	27.6	8.6	11.0	複剥離打面から剥離された縦長剥片が素材（コーンタイプ、打点径2.5mm、打窟極小）。	558Y
第45図2	打製石斧	ホルンフェルス	73.7	52.2	15.7	81.8	両側縁はラフエッジおよびシャープエッジが交互に切り合っている。上方の剥離はパティナが他より新しいが、フレッシュな面よりは古い。ダブルパティナか？	606D

(単位：mm・g)

第19表 遺構外出土の石器一覧

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物			出土位置	備 考					
					石	角	礫 砂			他				
第45図3	胴	捺糸文R	にぶい赤褐 5YR5/4	捺糸文系	○			554Y 559Y	表面磁石に付く／ 5と同一個体か					
第45図4	胴	捺糸文R	にぶい赤褐 5YR5/4	捺糸文系	○			553Y	表面磁石に付く／ 4と同一個体か					
第45図5	胴	捺糸文L／植物の圧痕？	明赤褐 5YR5/6	捺糸文系				558Y						
第45図6	口縁	平行沈線	赤褐 5YR4/6	黒浜？			○	織	559Y	磁石に付く				
第45図7	胴	縄文RL	明赤褐 5YR5/6	黒浜			○	織	559Y					
第45図8	胴	縄文R	にぶい褐 7.5YR5/4	黒浜				○	織	558Y				
第45図9	胴	縄文LR	にぶい黄橙 10YR6/3	黒浜		○		○	織	558Y				
第45図10	底	縄文LR／やや上底	にぶい橙 7.5YR6/4	黒浜					○	織	559Y			
第45図11	底	文様不明／上底	赤褐 5YR4/6	黒浜					○	織	559Y			
第45図12	口縁	結節沈線	にぶい赤褐 5YR4/4	諸磯	○				○		遺構外	磁石に付く		
第45図13	口縁	結節浮線文／口唇部に鋸歯状の刻み	にぶい赤褐 5YR5/4	諸磯 b～c						○	雲	559Y		
第45図14	胴	縄文RL／結節浮線文	にぶい橙 7.5YR6/4	諸磯 b	○							557Y	磁石に付く	
第45図15	胴	結節浮線文／棒状貼付文（押捺のある隆帯？）	にぶい黄橙 10YR6/3	諸磯 c？	○							1 P	磁石に付く	
第45図16	胴	結節浮線文	橙 5YR6/6	諸磯 b～c	○							558Y	磁石に付く／砂粒は 円摩度が低い	
第45図17	胴	結節浮線文による同心円文	にぶい黄橙 10YR6/3	諸磯 c								557Y	砂粒の混入は顕著	
第45図18	胴	連続爪形文	黒褐 10YR3/1	黒浜						○	織・白	559Y		
第45図19	胴	半裁竹管による平行沈線	赤褐 2.5YR4/6	諸磯						○		遺構外		
第45図20	底	沈線？／底部は広がる	にぶい赤褐 5YR5/4	諸磯						○		559Y	磁石に付く	
第45図21	胴	半裁竹管による集合沈線	にぶい黄褐 10YR5/3	前期末～ 中期初頭								559Y	内面赤褐	
第45図22	胴	平行沈線による鋸歯状文／三角および鋸歯状の陰刻文	褐 7.5YR4/3	前期末～ 中期初頭							○	褐	558Y	
第45図23	胴	半裁竹管による集合沈線／深い沈線？	橙 5YR6/6	前期末～ 中期初頭？								557Y		
第45図24	口縁	縄文LR／結節浮線文および浮線文	暗赤褐 5YR3/3	五領ヶ台	○						○	金	遺構外	磁石に付く
第45図25	胴	縄文LR／沈線による弧線文	灰褐 7.5YR4/2	五領ヶ台	○						○	白	559Y	弧線の内側は剥離
第45図26	口縁	隆帯による渦巻文	にぶい橙 7.5YR6/4	加曾利 E II								○	558Y	
第45図27	胴	捺糸文L／隆帯による懸垂文	橙 2.5YR6/6	加曾利 E I ～II							○	○	遺構外	磁石に付く
第45図28	胴	捺糸文L／隆帯による懸垂文／同心円文も有るか？	にぶい褐 7.5YR5/4	加曾利 E I ～II								○	558Y	内面名赤褐磁石に 付く

※ 石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：繊維 雲：雲母 白：白色粒子 褐：褐色粒子

第20表 遺構外出土の縄文土器一覧（1）

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備考
					石	角	礫	砂	他		
第45図29	胴	縄文RL/磨消懸垂文	明赤褐 2.5YR5/6	加曾利EⅢ				○		559Y	
第45図30	口縁	無文	橙 5YR6/6	加曾利EⅢ ～Ⅳ				○		606D	内面黒褐
第45図31	胴	撚糸文R	にぶい褐 7.5YR5/4	加曾利EⅠ ～Ⅱ				○	○	558Y	
第45図32	口縁	縄文RL/口縁部に沿う3本の沈線	にぶい黄橙 10YR7/4	連弧文系				○			遺構外
第45図33	胴	縄文L	にぶい赤褐 5YR5/4	中期末～後 期前葉				○	○	559Y	
第45図34	口縁	縄文RL/口唇部に刻み	黒褐 5YR3/1	加曾利B				○	○		遺構外
第45図35	胴	沈線	明赤褐 2.5YR5/6	後期粗製				○	○	557Y	磁石に付く
第45図36	胴	平行沈線	褐 10YR4/4	後期粗製				○	○	557Y	磁石に付く

※ 石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：繊維 雲：雲母 白：白色粒子 褐：褐色粒子

第20表 遺構外出土の縄文土器一覧(2)

() は現存値及び推定値

図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	成形及び調整	遺存度	出土位置	時期
第46図37	鉢	3.8	7.6	3.8	小型鉢/口縁部は短く外反する/最大径は口縁部にもつ/内外面赤彩と思われる	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒をやや多く、石英を僅かに含む	内面：口縁部はハケ目調整、以下はヘラナデ/外面：斜方向にはけ目調整様部以外は横位のヘラ磨き調整	ほぼ完形品	攪乱内	古墳初頭～前期
第46図38	壺	(3.8)	—	8.2	底部は平底/外面は赤彩	胎土は淡黄褐色を基調	橙色粒子をやや多く、砂粒を僅かに含む	内面：ハケ目調整/外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	胴部下半～底部30%	攪乱内	弥生後期末葉～古墳初頭
第46図39	甕	—	—	—	台付甕/脚台部は「ハ」の字状	淡黄褐色を基調	橙色粒子を多く、砂粒を僅かに含む	内面：ハケ目調整/外面：目の粗いハケ目調整	脚部破片30%	48M	古墳初頭～前期
第46図40	壺	—	—	—	胴部上半に文様あり/文様は端末結節を伴うRL単節斜縄文/無文部は赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・小石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：無文部は横方向のヘラ磨き調整	胴部上半破片	P1	弥生後期末葉～古墳初頭
第46図41	甕	(6.8)	—	—	小型甕か/「く」の字口縁/口唇部には刻みなし	明茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整後ヘラ磨き調整	口縁部～胴部中位破片	遺構外	古墳初頭～前期
第46図42	壺	—	—	—	小型壺/丸味をもつ胴部/外面は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	胴部上半～中位破片	攪乱内	弥生後期末葉～古墳初頭
第46図43	甕	(5.3)	—	—	台付甕/脚台部は「ハ」の字状	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面：ナデ/外面：ハケ目調整	脚部破片	攪乱内	弥生後期末葉～古墳初頭
図版17-44	土師器環	(4.5)	—	—	内湾タイプ/内面及び外面口縁部は赤彩/人間系土師器/時期的に22H出土の可能性あり	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・石英・小石を僅かに含む	内面：ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	口縁部から体部下半破片	攪乱内	6世紀初頭
図版17-45	土師器環	—	—	—	内湾タイプ/内面及び外面口縁部～体部下半は赤彩/人間系土師器/時期的に22H出土の可能性あり	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・小石を含む	内面：ヘラナデ/外面：以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	体部破片	遺構外	6世紀初頭
図版17-46	土師器甕	—	—	—	口縁部は外反する/胴部から頸部の移行は屈曲する/人間系土師器の胎土に類似/時期的に22Hの可能性あり	淡赤褐色を基調	砂粒をやや多く、小石を含む	内外面：横ナデ	口縁部破片	遺構外	6世紀初頭
図版17-47	須恵器環	—	—	—	口縁部は外反せずにやや内湾する/鳩山製品	淡灰褐色	白色針状物質・白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転	口縁部小破片	606D	9世紀中～後葉

(単位：cm)

第21表 遺構外出土の弥生～平安時代の土器一覧

第5章 調査のまとめ

本書は、平成20・21年度の国庫補助事業として、確認調査及び発掘調査を実施した成果を収録したものである。ここでは、発掘調査を実施した田子山遺跡第107地点、新邸遺跡第10地点、西原大塚遺跡第159地点の3地点についての所見をまとめることにする。

第1節 田子山遺跡第107地点

今回の調査では、古墳時代後期の住居跡1軒（56H）と平安時代の住居跡1軒（71H）が検出されている。ここでは、これらの住居跡から出土した土器について検討することにする。

（1）古墳時代後期の56号住居跡出土土器について

器種構成としては、土師器坏・甑・甕形土器、須恵器壺形土器（以下、「形土器」を省略。）である（第5図）。土師器については、2が北武蔵型坏であるが、その他はすべて、志木市では7世紀以降に普遍的に出土する、在地系土師器（尾形 2005・2006）である。

まず、1の土師器坏は口径10cm未満の最小化を遂げた土器であり、口縁部と体部との境に横ナデによる弱い稜がまわる無彩土器である。2は暗茶褐色の胎土をもつ、いわゆる北武蔵型坏と考えられる。特徴は、富田和夫氏の分析（富田 1985）による、「須恵器模倣坏の系譜を引く」と考えられるA類に該当する。おおよそ7世紀後葉～末葉に比定される。

土師器甑の5は鉢タイプで、口縁部が外反し、底部に穿孔をもつ。6は大型の寸胴タイプで、このタイプは変化が乏しいため、時期設定は難しいが、7世紀中葉～8世紀前葉の範疇で捉えられるであろう。

土師器甕では、7が小型丸甕、8は大型丸甕である。外面調整は甑形土器と同じようにていねいにスリップが施されるものである。時期設定は難しいが、大きくは7世紀中葉以降、いわゆる武蔵型甕の出現まで存続すると考えられる。

須恵器壺は、3が短頸壺、4は長頸壺であろう。いずれも胎土は灰白色を呈し、外面を中心に薄緑色の自然釉がかかっている。おそらく、湖西製品と考えられ、湖西古窯跡群の報告書（後藤他 1989）で、4は長頸瓶に、3はその他器種の中の蓋付壺に分類されるものであろう。

以上、56号住居跡出土土器は1の土師器坏が口径10cm未満という法量の最小化を遂げている点を重視し、7世紀末葉に比定したいと考える。

（2）平安時代の71号住居跡出土土器について

出土遺物は少なく、須恵器坏2点と須恵器甕1点である（第8図）。

まず、1の須恵器坏は胎土に白色針状物質を含むことから、鳩山製品と考えられる。底部のみの破片であるが、底部に回転糸切り痕を残すことから、9世紀以降の特徴と言える。2は酸化炎焼成の須恵器坏で、底径は1より大きい7.6cmである。法量の拡大化が見られる特徴があることから、鳩山編年（渡辺 1990）HBVII期（9世紀中葉）に比定されるであろう。

3は須恵器甕で、内面胴部には抉るようなヘラ削りが施され、外面には平行叩き目痕が残る。

以上、1は胎土に白色針状物質を含むことから、鳩山製品と言えるが、2・3はここでは産地不明としたい。時期については、2の須恵器坏から9世紀中葉として考えることにする。

第2節 新邸遺跡第10地点

本地点からは、古墳時代前期の住居跡2軒(11・12H)と近世～近代の溝跡1本(5M)が検出されている。ここでは、古墳時代前期の住居跡から出土した土器について、簡単にまとめてみることにする。

(1) 11号住居跡出土土器

器種構成としては、鉢・壺・甕である(第13図)。

まず、1の鉢は口縁部が内湾気味に開き、底部は碁笥底を呈する。この土器は廻間編年(大塚1990)の廻間Ⅲ式期から新たに参入する小型鉢で、鉢Bに該当するものである。鉢Bは廻間Ⅲ式期2段階では、丸底化が基調となると指摘されていることから、1は廻間Ⅲ式期1段階と考えられる。

壺の2は赤彩壺である。ハケ目調整後へラ磨き調整が施され、精巧な作りの土器である。3は内外面に顕著なハケ目調整を残し、装飾は何も施されていない。

甕については、「く」の字口縁を呈し、口縁部には横ナデが施され、口唇部に刻み目を持たない台付甕である。4は胴部に甕では珍しいへラ磨き調整が施されている。この土器は12H-4の壺と調整及び胎土が類似しており、時期的に近似性が感じられる。

以上、壺・甕からは、古墳時代初頭より新しい特徴と考えられ、古墳時代前期の範疇で捉えられるであろう。1の鉢からは、廻間Ⅲ式期1段階に比定することができる。

(2) 12号住居跡出土土器

器種構成としては、高坏・鉢・壺・甕である(第16図)。

まず、1の高坏は裾部が外反するタイプであり、廻間Ⅱ式期以降の特徴である。

2は鉢または埜で、11H-1同様に丸底ではないため、廻間Ⅲ式期1段階の特徴と考えられる。

3・4は赤彩壺であるが、3は「く」の字口縁を呈するが、屈曲部分はやや決れるような器形をしており、山陰系あるいは布留系の甕の口縁部形態を思わせるようで特徴的と言える。

5はS字甕で、口唇部の屈曲が弱く、直立気味である。廻間Ⅲ式期以降の特徴と考えられる。

以上、本住居跡出土土器は、11号住居跡に近似する時期の特徴をもつことから、2軒同時に存在した可能性がある。

第3節 西原大塚遺跡第159地点

本地点からは、縄文時代の土坑2基(611・612D)、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡8軒(552～559Y)と古墳時代後期の住居跡1軒(22H)、近世以降の土坑6基(605～610D)・溝跡1本(48M)が検出されている。ここでは、以下の点についてまとめることにする。

(1) 西原大塚遺跡の縄文時代前期の様相

今回の159地点の調査では、縄文時代の遺構に伴わない縄文時代の遺物は、石器1点と土器95点が出土している。土器の内訳は早期撚糸文系6点、前期羽状縄文系24点、前期諸磯式12点、前期末～中期中頭11点、中期加曾利E式24点、後期5点、時期不明13点であった。本調査地点では全体に出土数が少ないながら、西原大塚遺跡ではあまり例の無い早期撚糸文系の土器が出土し、前期の土器も小破片ながらやや多く見られた。

西原大塚遺跡の縄文時代については、主に中期の集落として知られるが、遺構は少ないものの黒浜式を主とした前期の土器も出土している。(第47図・図版18)。

遺構では、住居跡は西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査(以下、区画調査)の第10Ⅱ地点の43号住居跡(43J)、同じく区画調査の第11地点の14号住居跡(14J)が黒浜期の住居になる。

土坑は、区画整理第5Ⅱ地点427号土坑(427D)が諸磯式期の土坑で、諸磯c式の大型の深鉢が出土している。

遺構外出土遺物は、第10地点で花積下層式、第36地点で諸磯式、第37地点で黒浜式及び諸磯式、第65地点で黒浜式、第113地点で羽状縄文系、第154地点で諸磯式の土器片が報告されている。

また、区画調査では第4・5・6・9・11・36地点の弥生時代をはじめとする後世の遺構覆土や包含層などから黒浜式土器の破片が出土している。これら黒浜式土器の出土地点および遺構の検出位置を見ると、本159地点も含め遺跡南西部の台地の縁辺から斜面に集中しており、小規模な集落があった可能性が考えられる。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器様相

ここでは、比較的に出土土器が多い557～559号住居跡出土土器について考えることにしたい。

1. 557号住居跡出土土器

器種構成としては、高坏・壺・甕である(第31・32図)。

まず、高坏であるが、1は坏部が有段となる大型タイプで、廻間編年では、高坏A2に分類されるものであろう。5は埴形高坏あるいは器台の脚台部である。

3・4は小型台付甕であろう。特に3は「く」の字口縁、口唇部に刻み目をもたない、目の粗い工具によるハケ目調整など古墳時代前期でも新しい特徴と言える。

以上、時期は古墳時代前期に比定できる。

2. 558号住居跡出土土器

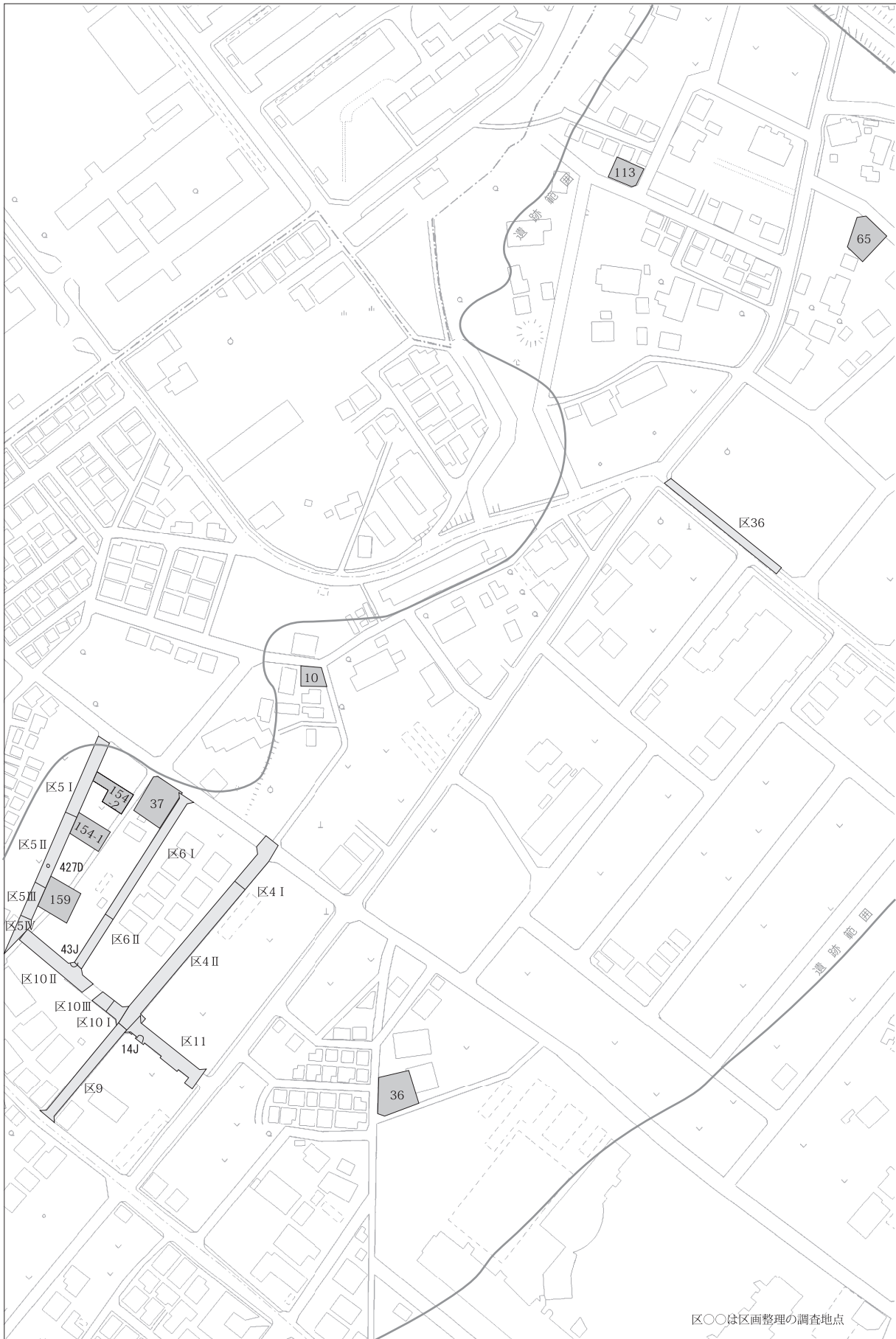
器種構成としては、埴・高坏・壺・甕である(第35図)。

1の小型埴については、小型タイプであることから、廻間Ⅲ式期以降の特徴と考えられる。

壺では、4～8のように複合口縁を呈するものが見受けられる。また、12の胴部文様帯には3段構成の文様が施文されているが、各段との境には自縄結節文が施されている。

甕については、15が口唇部に刻み目をもつが、主体は口唇部に刻み目をもたないものであろう。

以上、時期の比定は難しいが、本住居跡が557号住居跡に切られているが、少なくとも古墳時代前期に比定できるであろう。



第47図 西原大塚遺跡における縄文時代前期の遺構・遺物検出地点

3. 559号住居跡出土土器

器種構成としては、高坏・壺・甕である（第38図）。

まず1の高坏は、台付鉢タイプで、口縁部に5段の単節斜縄文が施文されるものである。この特徴は東京湾沿岸部、特に東岸地域との強い結びつきで考えられる土器である。

壺では、4が複合口縁を呈する土器である。7は頸部に1段の押捺を伴う凸帯がまわるもので、東海地域の特徴であろう。11には沈線区画を伴う文様が施文されている。

甕は口唇部に刻みを伴う土器が多く、12には口唇部に布目状圧痕が付されている。市内では、市場裏遺跡2号住居跡出土土器（徳留・尾形・青木 2011）の甕と田子山遺跡21号住居跡（尾形 1998）の壺がある程度で、まだ類例が少ないため、今後は資料の蓄積を待って検討したいと考える。

以上、全体的には東京湾沿岸部の地域の特徴をもつ土器が多く、前述した557・558号住居跡より古い様相を示している。時期の比定は難しいが、おおよそ弥生時代後期後葉に位置付けられる。

（3）古墳時代後期第22号住居跡出土土器について

器種構成としては、土師器坏・高杯である（第41図）。

まず、1の土師器坏は口縁部が短く外反し、底部はまだ丸底ではなく、やや平底気味を呈することから、いわゆる比企型坏の初源タイプ（尾形 1999）と考えられる。

次に土師器高杯であるが、2・3ともに坏底部に段あるいは稜をもつ有段タイプではない。脚台部はまだ長脚の特徴をよく残しており、脚柱部と裾部の区分もはっきりしている。このタイプは志木市城山遺跡第62地点（尾形・徳留・深井・青木 2012）では3期（6世紀前葉）まで存続する。

以上、本住居跡出土土器については、1の土師器坏からは5世紀末葉～6世紀初頭に比定できるが、今回は土師器高杯の有段が退化した特徴を重視し、6世紀初頭に比定したいと考える。

[引用・参考文献]

赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター

尾形則敏 1998 「志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例について」『あらかわ』創刊号 あらかわ考古談話会

1999 「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会

2000 「志木市における古墳時代の土師器の編年(1)」『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会

2001 「志木市における古墳時代の土師器の編年(2)」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会

2005 「第4章 まとめ」『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集

2006 「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義 一武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例一」『埼玉考古Ⅱ』埼玉考古学会

尾形則敏・徳留彰紀・深井恵子・青木 修 2012 『城山遺跡第62地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第48集 埼玉県志木市教育委員会

後藤建一他 1989 『静岡県の窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会

佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2009 『西原大塚遺跡』西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市遺跡調査会

徳留彰紀・尾形則敏・青木 修 2011 『市場裏遺跡第13地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第44集 埼玉県志木市教育委員会

富田和夫 1985 「XII 結語」『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第46集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

渡辺 一 1990 『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会

版 圖



1. 調査区近景



2. 表土剥ぎ風景



3. 発掘風景



4. 56号住居跡



5. 56号住居跡遺物出土状態



6. 71号住居跡



7. 71号住居跡掘り方



8. 測量風景



1. 56号住居跡出土遺物



2. 71号住居跡出土遺物



3. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 11号住居跡遺物出土状態



3. 11号住居跡遺物出土状態



4. 11号住居跡



5. 12号住居跡遺物出土状態



6. 12号住居跡



7. 13号住居跡



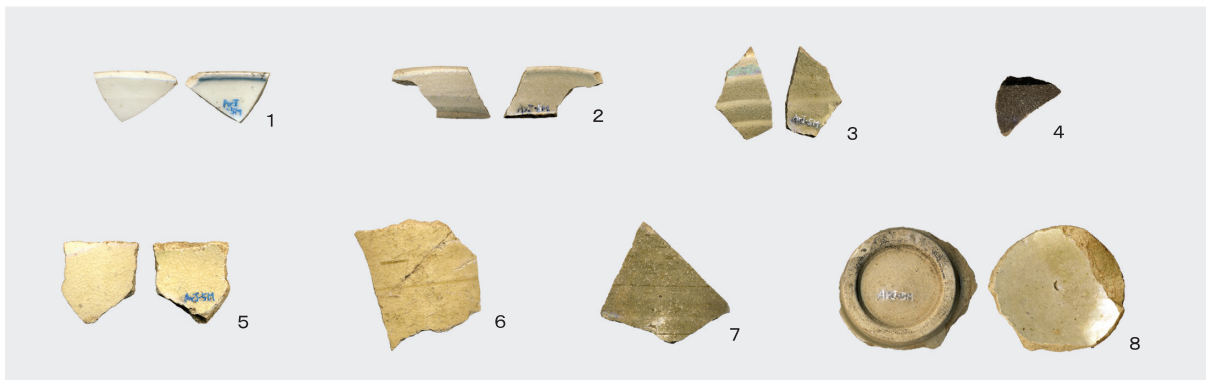
8. 5号溝跡



1. 11号住居跡出土遺物



2. 12号住居跡出土遺物



1. 5号溝跡出土遺物



2. 遺構外出土遺物



ハケ目



ハケ目+ヘラ磨き



ハケ目+ヘラ磨き



横ナデ(口縁部)+ハケ目

3. 器面にみられる調整技法



1. 調査区近景



2. 表土剥ぎ風景



3. 調査区整備風景



4. 611号土坑



5. 612号土坑



6. 612号土坑・6号ピット



7. 5号ピット



8. 6号ピット



1. 552号住居跡



2. 552号住居跡炉跡



3. 552号住居跡赤色砂利層検出状態



4. 553号住居跡



5. 554号住居跡遺物出土状態



6. 554号住居跡遺物出土状態



7. 554号住居跡炉跡



8. 554・555号住居跡



1. 555号住居跡



2. 555号住居跡



3. 556号住居跡



4. 556号住居跡貯藏穴



5. 557号住居跡遺物出土状態



6. 557号住居跡遺物出土状態



7. 557号住居跡遺物出土状態



8. 557号住居跡



1. 558号住居跡



2. 558号住居跡遺物出土状態



3. 558号住居跡貯蔵穴A



4. 558号住居跡貯蔵穴B



5. 558号住居跡入口梯子穴付近



6. 558号住居跡炉跡



7. 559号住居跡遺物出土状態



8. 559号住居跡遺物出土状態



1. 559号住居跡遺物出土状態



2. 559号住居跡赤色砂利層検出状態



3. 559号住居跡貯蔵穴



4. 559号住居跡凸堤



5. 559号住居跡入口梯子穴



6. 559号住居跡炉跡



7. 559号住居跡



8. 3号ピット



1. 22号住居跡遺物出土状態



2. 22号住居跡遺物出土状態



3. 22号住居跡



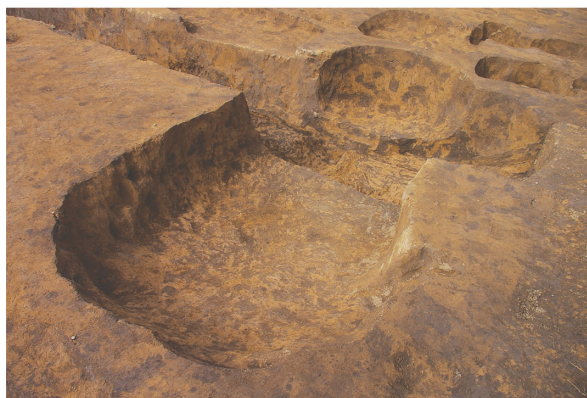
4. 調査風景



5. 605～607号土坑



6. 605号土坑



7. 606号土坑



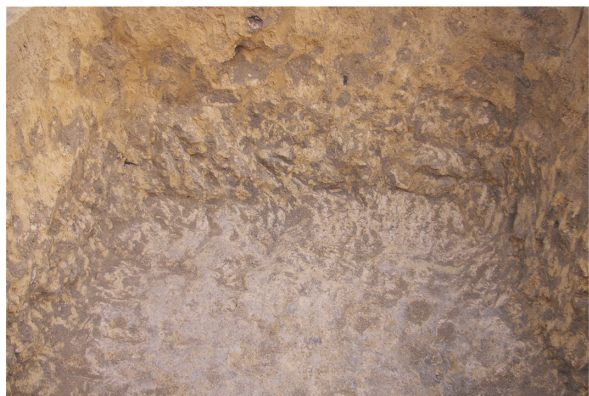
8. 607号土坑



1. 608号土坑



2. 609号土坑



3. 609号土坑工具痕



4. 610号土坑



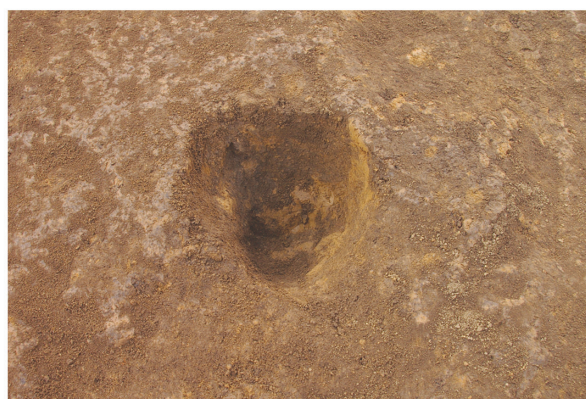
5. 48号溝跡



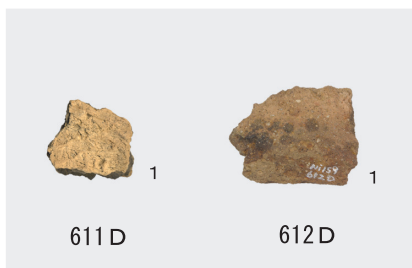
6. 48号溝跡



7. 1号ピット



8. 4号ピット



1. 土坑出土遺物



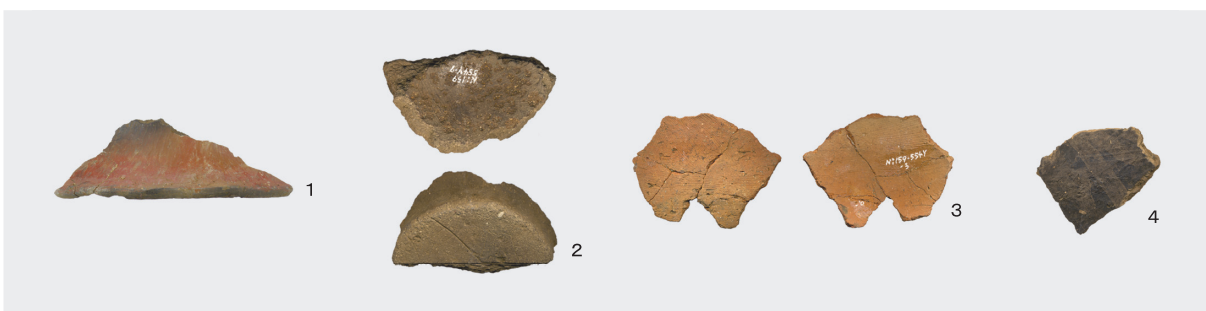
2. 552号住居跡出土遺物



3. 553号住居跡出土遺物



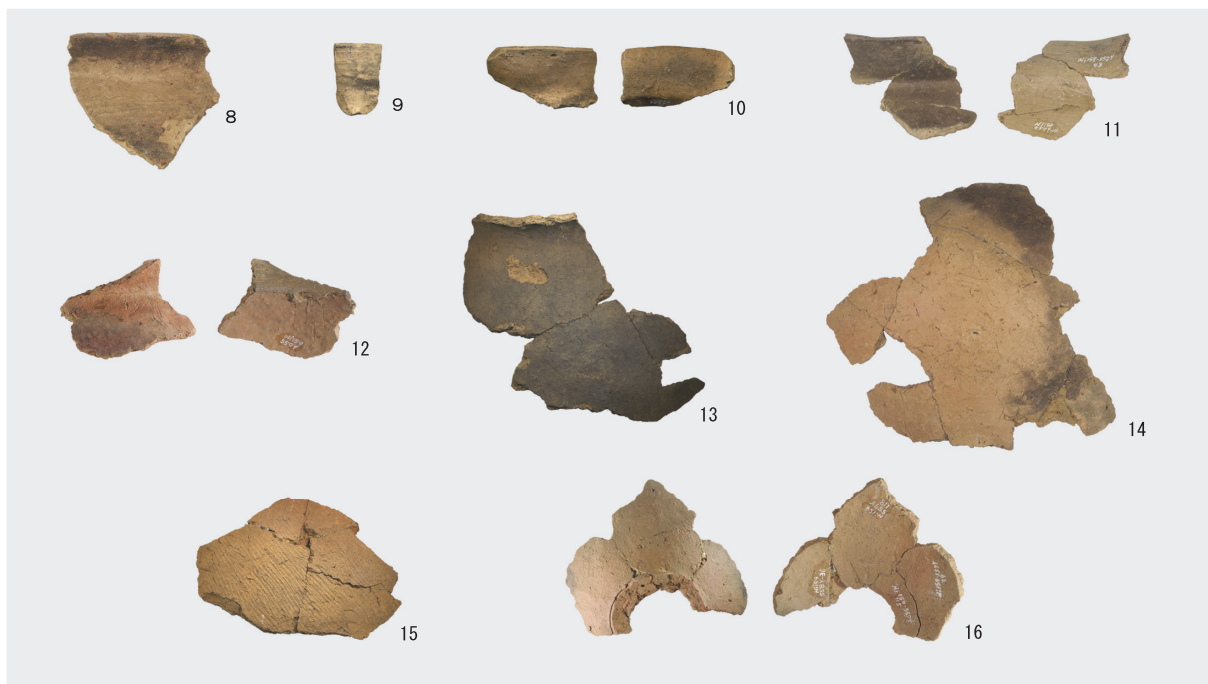
4. 556号住居跡出土遺物



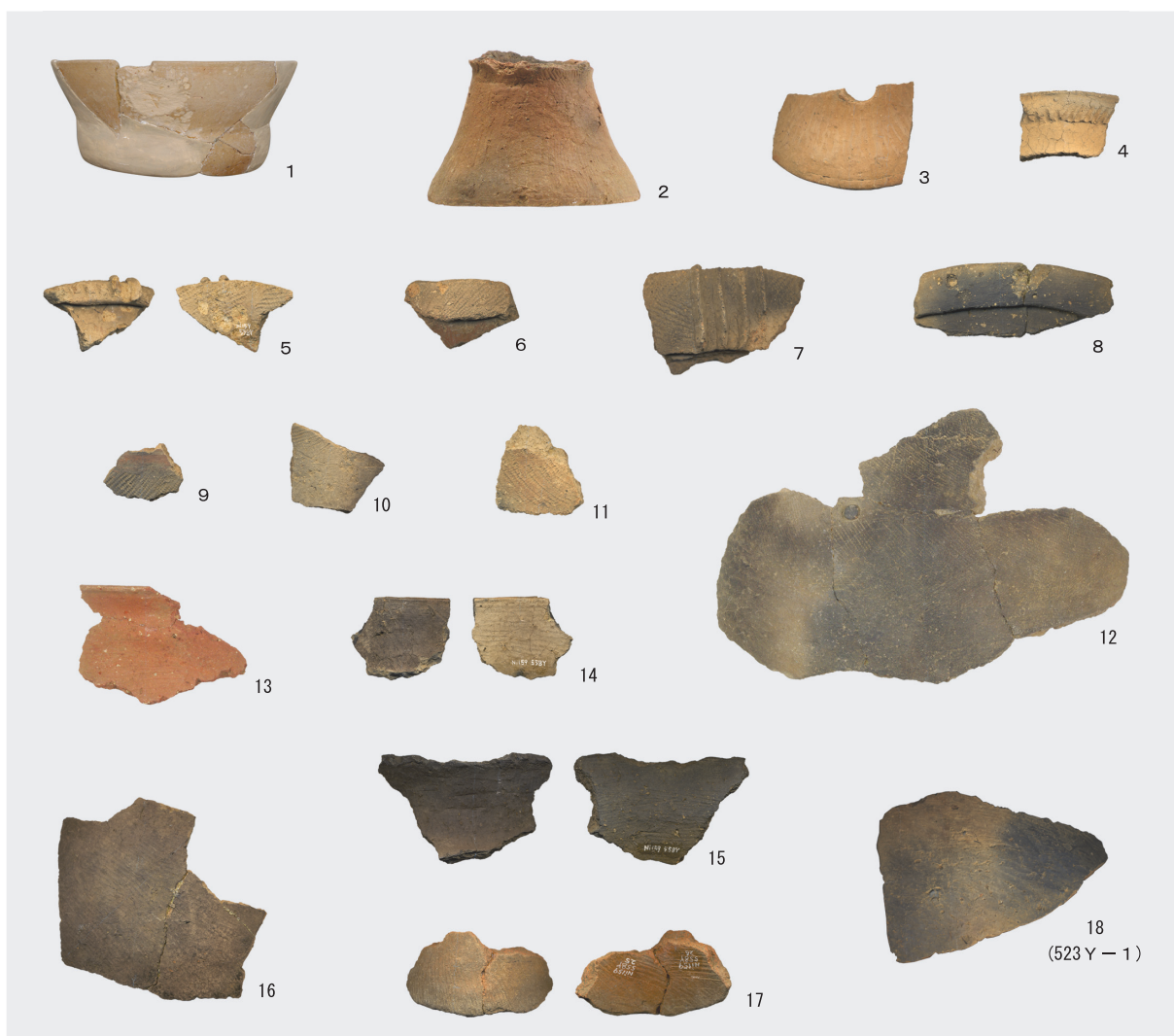
5. 554号住居跡出土遺物



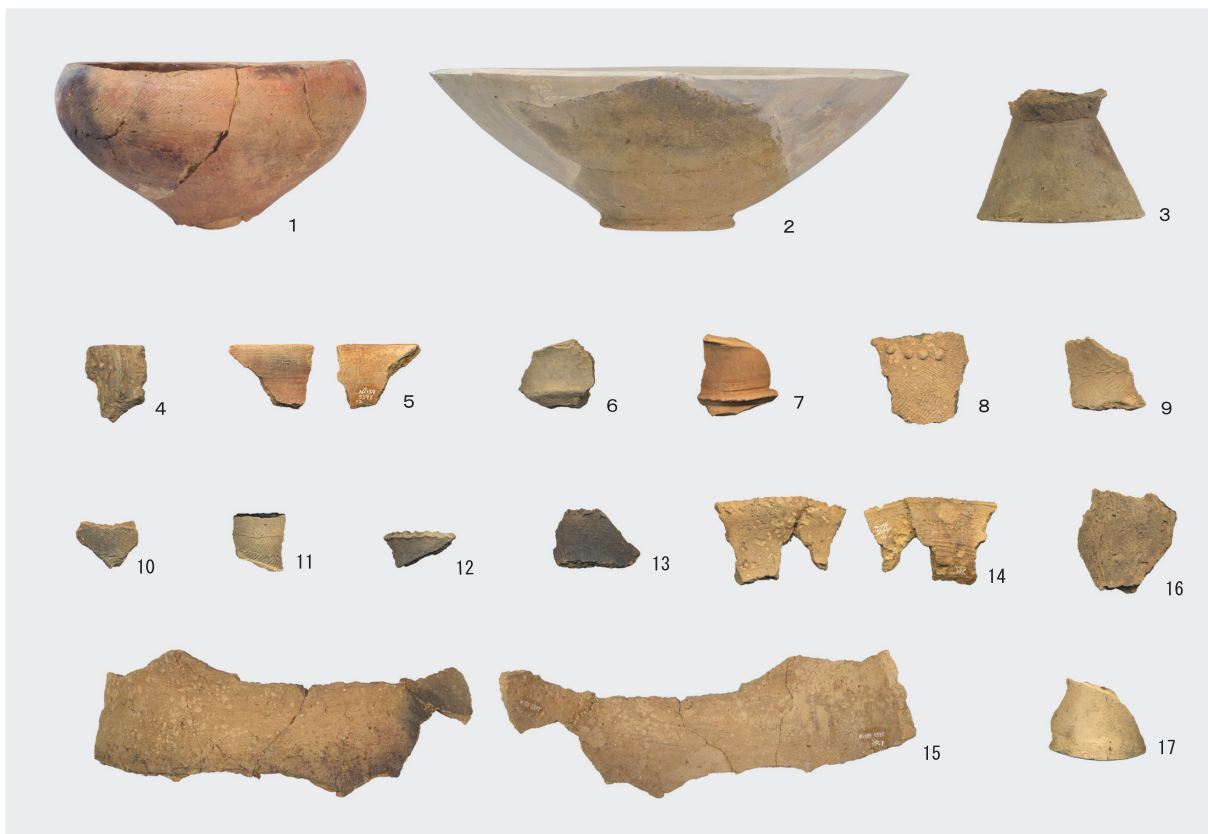
6. 557号住居跡出土遺物 1



1. 557号住居跡出土遺物 2



2. 558号住居跡出土遺物



1. 559号住居跡出土遺物



2. 3号ピット出土遺物



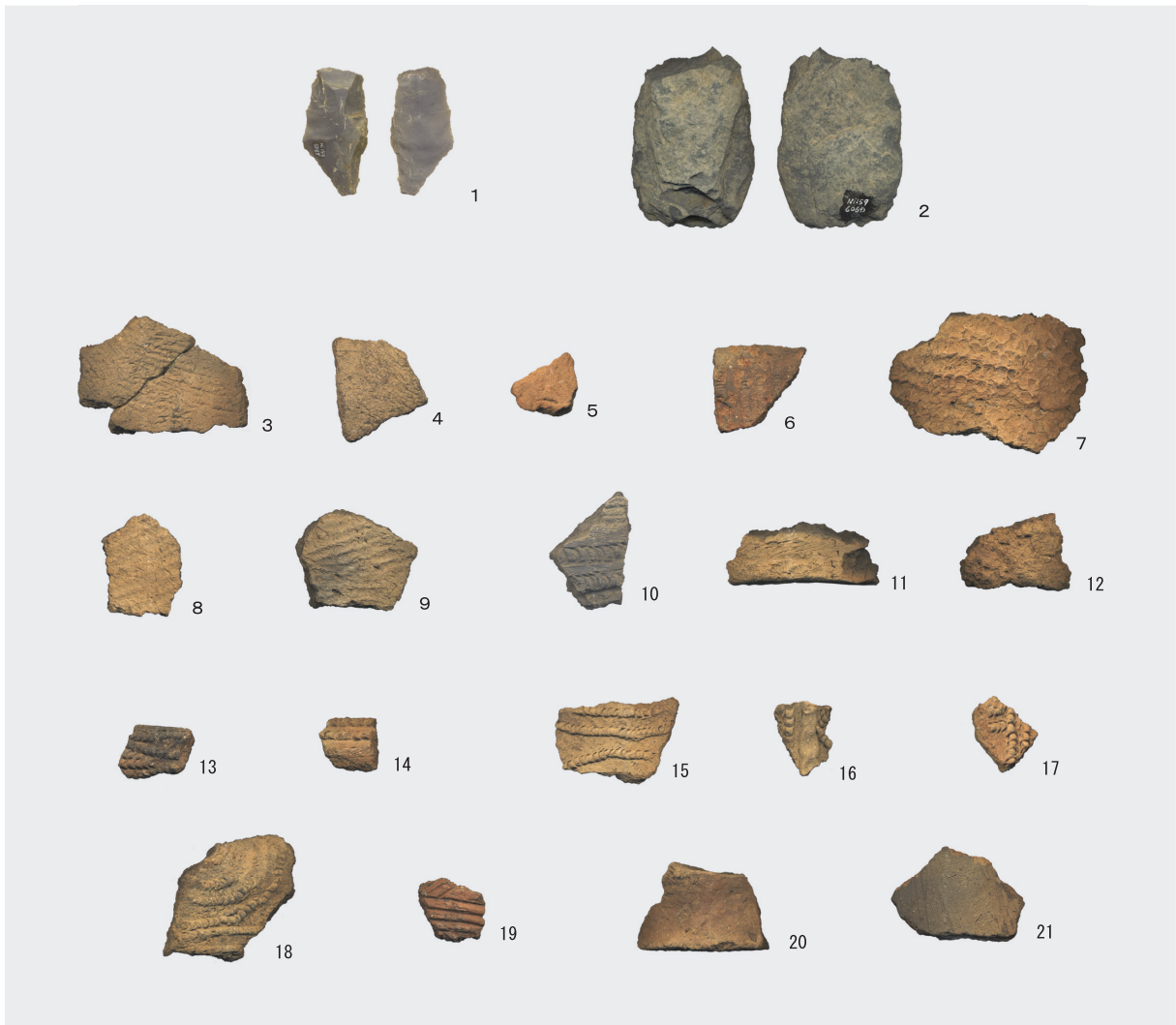
3. 22号住居跡出土遺物



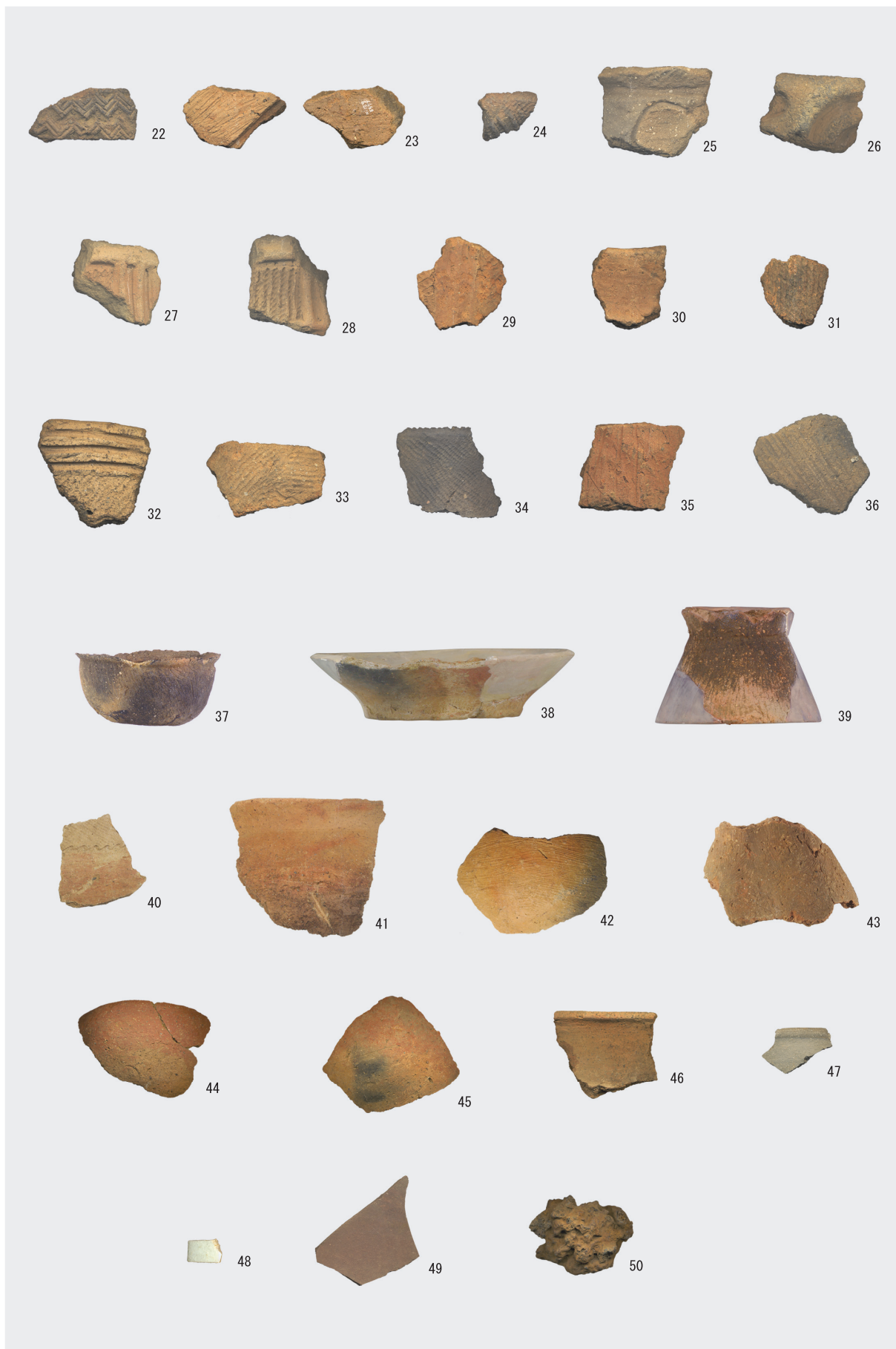
1. 606号土坑・48号溝跡出土遺物



2. 1・4号ピット出土遺物



3. 遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



西原大塚遺跡の遺構外出土黒浜式土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	しきしいせきぐん 20						
書名	志木市遺跡群 20						
シリーズ名	志木市の文化財						
シリーズ番号	第51集						
著者氏名	尾形則敏 徳留彰紀 深井恵子 青木 修						
編集機関	埼玉県志木市教育委員会						
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111						
発行年月日	平成25 (2013) 年3月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
たごやま いせき 田子山遺跡 (第107地点)	しき しほんちよう 志木市本町 2丁目1731-1	11228 09-010	35° 49' 53"	139° 34' 58"	20090205 ～ 20090210	105.78	個人住宅建設
あらしき いせき 新 邸 遺 跡 (第10地点)	しき しかしわちよう 志木市柏町 5丁目3021-9他	11228 09-008	35° 49' 39"	139° 34' 02"	20090603 ～ 20090605	83.92	個人住宅建設
にしはらおわつかいせき 西原大塚遺跡 (第159地点)	しき しさいかいちよう 志木市幸町 3丁目7370	11228 09-007	35° 49' 25"	139° 33' 48"	20090930 ～ 20091030	208.27	個人住宅建設
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
田子山遺跡 (第107地点)	集落跡	古墳時代後期 平安時代	住居跡 住居跡	1軒 1軒	土器破片 土師器・須恵器		
新 邸 遺 跡 (第10地点)	貝塚・集落 跡・墓域	古墳時代前期 近代	住居跡 溝跡	3軒 1本	土器	溝跡は野火止用水 跡と考えられる。	
西原大塚遺跡 (第159地点)	集落跡・ 墓域	縄文時代 弥生時代後期末葉 ～古墳時代前期 古墳時代後期 中世以降	土坑 住居跡 住居跡 土坑 溝跡	2基 8軒 1軒 6基 1本	土器破片 土器 土師器		
要 約							
<p>田子山遺跡は、縄文時代早・中期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期・奈良・平安、近世・近代の複合遺跡である。今回の第107地点では、古墳時代後期の住居跡1軒と平安時代の住居跡1軒が検出された。2軒の住居跡については、調査区隅からの検出であり、住居構造などの詳細は不明である。</p> <p>新邸遺跡は、縄文時代前期、古墳時代前期・後期、近世・近代の複合遺跡である。今回の第10地点では、古墳時代前期の住居跡3軒と近世以降の溝跡1本(5M)が検出されているが、この5Mについては、第8地点で検出された溝跡と同一のものと考えられ、野火止用水跡と考えられる。</p> <p>西原大塚遺跡は、市内最大規模の遺跡で、旧石器時代～近世・近代にかけての複合遺跡である。今回の第159地点から検出された遺構は、縄文時代の土坑2基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡8軒、古墳時代後期の住居跡1軒、中世以降の土坑6基・溝跡1本である。</p>							

志木市の文化財 第51集

志木市遺跡群 20

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成25(2013)年3月28日
印 刷 株式会社白峰社